
鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

黒縁眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼鉄の指揮官ハガネノシキカン

【Zコード】

Z4762Z

【作者名】

黒縁眼鏡

【あらすじ】

若くしてとある空軍基地に司令として派遣された男のストーリー。
SFロボットアクション物の定番であるパイロットが主人公では無く、指揮官として戦略・戦術を駆使して敵との戦闘を繰り広げていく。

エースパイロットでも無い彼を英雄と呼ぶ者はいないだろう。

彼より輝かしい功績を残した者は多くいる。

ただ、彼がいなければその功績は無かったかも知れない。

部隊の裏役者として戦っていく彼の知謀を楽しんでください。

*他のサイトでも一部アップしています。

登場人物（前書き）

登場キャラの簡単な紹介です。

登場人物

登場人物

キーナ基地のメンバー

坂本竜 サカモト リュウ：階級大佐・年齢28

世界初の大型兵器マップス試験用特殊部隊出身。初期マップス適合者の中に士官学校出が彼一人だつたため、異例の若さで基地指令に赴任する。

田口修造 タケチ シュウゾウ：階級軍曹・年齢25

第一世代型マップスの元テストパイロット。現役パイロットを続けながら教官としてパイロット候補生の指導にあたっている。

整備のオヤジ オヤジ：整備主任・年齢43

主人公のパイロット時代から整備を担当していた。ガレージの力リスト。

Gandwick 小隊

近接攻撃と連携が得意な若い正規パイロットの集まつた小隊。部隊内はいつも騒がしい。

Gandwick 1 イヌツカ ケン：犬塚剣・階級中尉・年齢25

Gandwick 小隊の隊長。騒がしい部隊を上手くまとめている。

Gandwick 2 ヨシダ リエ：吉田理恵・階級：少尉・年齢22

Gandwick 小隊の副隊長。少し小言が多く理屈っぽい。同じ部隊の高井則良とはライバル関係。

Gandwick 3 コヤマ シズカ：小山静・階級准尉・年齢20

いつも無表情で声に抑揚が少ないと言われている。

Gandwick 4 タカイ ノリヨシ：高井則良・階級准尉・年齢20

お調子者だが、戦闘中の命令にはしっかりと従う。吉田との勝負は負けが多い。

Gandwick 5 イシャマ シンジ：石山慎治・階級准尉・年齢20

冷静なスナイパー。冷静過ぎて気付かないこともあるとか。

クロスボウ1：武田京子・階級准尉・年齢19歳

タケダキヨウコ

男勝りな女性でたまに色っぽいギャップが素敵と噂されている。ス

ナイパー担当。

ランス1：沖田修司・階級准尉・年齢19歳

オカタシユウジ

童顔の男性。男性受けまで良いことに本人は気付いていない。スナ

イパー担当。

ソード2：伊東公太郎・階級准尉・年齢19歳

イトウコウタロウ

反射神経が良い。近接重視のファイター担当

徳川大佐：オーカシス陸軍基地司令官・年齢49

ほりの深い渋いダンディーなオジサマ。軍による首都警備の第一人者

毛利大佐：カシゴマ海軍基地司令官・年齢50

老狐と称される強面なオジサマ。首都警備の応援に参加する。

宮野茂：ヤボネ軍空軍大将・年齢60

ミヤノシゲル

坂本大佐のパイロット時代からの上官。眼鏡のおかげで極めて眞面目に見える方だが、かなりの破天荒オヤジ。定年は65なのだが、特別顧問として残るつもりでいるらしい。

陸軍大将と海軍大将：年齢59と58

警備について確認をとるために空軍大将の宮野とともに打ち合わせに参加。空軍大将と合わせて軍の三大トップ。三人の仲は結構良い。

警察庁長官・年齢56

国際会議中は建築物、市民、首脳と守るものが多くて苦労する警察トップ。毎回警備が大変なので、そろそろ胃潰瘍にでもなるのではないかと心配中。

澄川早苗：中央司令部情報解析班に所属・年齢26

スミカワサナエ

坂本のパイロット時代の同僚。音にとても敏感で、声の調子から人の感情を予測することが出来る。

序章・「コーヒー＆amp;ワールド」コース

序章「コーヒー＆amp;ワールド」コース

「起きて下さい。坂本さん起きて下さいよ」「ん？ しまった寝ていたのか。誰かから身体をゆすりられてる。声の特徴から該当する人物を割り出してみる。

「ん？ 澄川さん？」

「正解です」

同じ部隊に所属するオペレーターの澄川早苗がどうやら起きてるらしい。

さつきまで何をしていたんだっけ？

寝ぼけた頭で周りを見渡すと書類の山が崩れて、そいつ中に散らかっている。

「そうだ、新兵器の最終報告書を書いていたら眠くなつたのか。あのぉ……連絡見てないですか？」

連絡？ 何のことかさっぱり分からない。

とりあえず、個人用の端末をチェックすると上官から連絡が入っていた。

『1500に司令室へ来い』

「へ？ 今時間は……げ、15時30分にしか見えない。
えーっと、澄川さん……あなたが俺に会いに来た理由つてもしかして」

澄川はぱつが悪そうにそっぽを向いて頭をかきだした。

ショートカットのはねている髪が指につられて踊っている。

「その焦っている様子を見ると、多分坂本さんが思つてゐる通りです」

「ありがとう！ 行ってきます！」

全速力で司令室に向かつて走り出す。

また上官に叱られてしまつ。

これでも一応小隊長として威儀を必死に維持しているんだ。こんなしようもないミスで信頼を失つてしまつなんて悲しすぎるんだ。

切れた息を無理矢理抑えて、扉をノックする。

「坂本龍です。失礼します」

「坂本か。入れ」

扉を開けると司令官が両肘をつきながら手を組んで、その上に顎を乗せている。

少し機嫌が悪そうな顔をしながら、嫌みたっぷりの口調で遅れた理由を指摘された。

「どうだ？ 書類を枕にゅっくり眠れたか？」

ばれていた……。言い訳をせずに素直に謝ろつ。

「申し訳ありません。居眠りをしていて、連絡に気付きませんでした」

司令官が軽くため息をついている。

最近では戦闘訓練が減った代わりに、戦術や戦略等の指導が増えているので、今度の戦術レポートが倍増しそうだ。

通常の量でも、かなり厳しい指摘が返されて苦労するのに、倍増したらどうなるんだろう？ 眠れるのかな……。

その状況を想像してうんざりする。

「あー……安心しろ。レポートは増やさないし、撃墜スコアを増やして来いとも言わんよ」

あれ？ 心の中が読まれた？

驚いた顔をしていたのだろう。連続でまた指摘されてしまった。「そんな驚くことは無いだろつ。その癖が治らなかつたら……いつか教えてやる」

一体何だつて言つんだ？ 超能力でも教えてくれるのか？ 読心術に近い物を習い始めてはいるが、俺には到底理解出来ないレベルで言い当てられている。

とりあえず、これ以上ぼろを出さないように早く本題に入つて貰

うしかない。

「ところで、用件は何でしょうか？」

「今からちゅうとしたテストをする。私の質問の答えを言い当ててみろ」

突然びついたのだろうか？ 緊張であふれた唾を飲み込む。

「坂本龍中尉。^{ゴースト}新兵器適合者の中に士官学校出は君しかいな？ そして、現在その新兵器が一般化され量産体制に入つた。つまり誰でも使えるようになる。そんな中でだ。誰も使つたことの無い新兵器の実戦訓練やら戦術研究やら指揮とこうのを誰がやる？」

最近自分に課せられた数多くの戦略・戦術レポートと新兵器の評価報告、そして今の思わせぶりな質問内容。該当する可能性に頭が真っ白になりかけながら答えを返す。

「もしかして、俺がやるんですか？」

自分を指している指が若干震えている。

「正解だ。おめでとう。最終試験合格だ。お前来月から大佐に昇進な。ちなみに言い忘れてたが、我が輩も昇進してるぞ」

「へ？」

「お前には隠してたからな。驚くのも無理は無いが、試験部隊、ゴーストは解散だ。他の奴らも教官として各地に派遣するからな。お前は来月から最南端にあるキーナ空軍基地の司令として頑張つてこい」

「」の辞令から私の生活は一変する。

軍上層部から辞令を受け取るまで、私は20歳から26歳までパイロットとして国境付近や紛争地域での介入など各地を転戦してきたが、今はヤポネ南方キーナ空軍基地司令として転属して2年が過ぎた。

この2年でようやくパイロットではなく、管理者としての仕事にも慣れてきている。

顔を洗い、身なりをただす。鏡に映るのは身長170cmで筋肉質のしまった身体をしている男性。髭は剃ってあり、髪型は清潔感

のある短髪で、眼はビクリカといつと垂れ目だ。実年齢より若く見られることがそこそこある。

そのため一人称も私に変えて、しゃべり口調も丁寧な物に変えることにより威厳を無理矢理出している現状だ。

軽く朝食を済ませ、「コーヒー片手に端末を立ち上げると、おはようございます。と機械音声が流れた。

カレンダーに記録されているスケジュールのチェックから、私の朝は始まるのだ。

「さて、今日の仕事は」

- ・バイロット候補生の模擬戦0900
- ・国境資源会議警備の打ち合わせ1400
- ・各種基地報告書の作成。

「今日も忙しそうだなあ……」

場所と時刻を携帯端末の情報と一致したのを確認する。

「まだ余裕があるし、時間が来るまでニュースでも見るか」

特に大きな事件もないようで、経済では首都と郊外の地価が連續で上昇中とか、企業の設備投資が新記録や新製品発表だとか景気の良い話が掲載されていて、芸能やスポーツ関係の記事も多く掲載されている。

今日も当たり前の平和が続いているようだ。

芸能人のゴシップ話でコメント欄が盛り上がるのは国民に余裕のある証拠だろう。

「さてと、バイロット候補生の模擬戦はまずガレージ集合だったな空いたコーヒーカップを洗い、乾燥棚において個室を後にする。

第一章「機械の身体」

第一章「機械の身体」

佐官用の個室からガレージに向かつ途中で教官を務める田口軍曹を見つけた。身長は185cmと高く、黒い髪のショートモヒカンがあるせいで、もう少し高く見える。

日に焼けた黒い肌と服越しにも分かる筋肉をしている彼はなかなかの威圧感がある。

こちらに気付くと敬礼とともに威勢の良い挨拶をしてきた。

「おはようございます大佐殿。お早いですね」

この少ししゃがれた声が怒鳴り声になるとたちまち訓練名物の鬼軍曹怒りの怒号となる。場合によつては怒りと愛の鉄拳付きだ。私も頭を上官仕様に入れ替えて挨拶を返す。

「おはよう田口軍曹。今年のルーキー達は使えそうか?」

「肯定です大佐殿。皆輝く物を持っています。それぞれの特性にあつた配備をすれば悪くない戦力となるでしょう」

「なるほど。テストパイロットから乗りこなした現役の君がそういうなら、今日の模擬戦が楽しみだな」

この日の訓練は正式に配備されている小隊との模擬戦である。1対1の戦闘ではなく、基地防衛側と攻略側に分かれての実戦形式で戦闘を行う形式だ。

ちなみにこの基地では毎回こうした模擬戦で賭けが行われている。偉い人は怒りそудが、戦闘の条件から勝利する方を選ぶのは戦術と戦略を学ぶ良い教材となるのだ。

教育にはムチと飴がなくてはならない。そのムチと飴にあたるのが賭けの結果ということだ。ちなみに模擬戦参加者にはハンデの条件が知られていらない。

「昨日の段階でレートは候補生が4倍でガンドッグが2倍です。ち

なみに私は候補生に賭けました。彼らならやつてくれます

鬼軍曹と候補生から恐れられる者の口から出る言葉とは思えず、笑ってしまった。普段じこかれている候補生達が聞いたら、さぞ驚くのではないかだろうか。

「まったく。君が鬼軍曹と呼ばれているのが信じられない発言だな。今日の相手はガンドッグ小隊だろ。現役パイロットから見て候補生がガンドッグお得意の近接連携にかなうと思つか？」

田口軍曹はニヤリと笑い答えた。

「彼らが死なないためにだつたら鬼でも悪魔でもなつてやりますよ。もちろん個人の力は劣つてゐるでしょうが、候補生にも連携と複数戦闘の捌き方は叩き込んでありますし、今回はハンデとして候補生を防衛側で指揮官あり、さらに数はガンドッグの2倍。指揮官も大佐殿と来れば勝てる見込みもあるでしょ」

候補生の実力を冷静に分析し、戦闘の条件も加味しての判断だった。単純に熱いだけではなく、冷静さも持つてゐる彼ならこの先も教育を任せられそうだ。

候補生達は弱点や欠点を毎日のように突かれ怒鳴られて大変なのだが、戦場で生き残るために訓練をしているのでそこは我慢してもらおう。

ただ、そんな鬼軍曹の元で訓練している候補生達だ。ちょっとした褒美があつても良いだろう。一つ軍曹に提案をしてみよう。

「軍曹。そこまで言うなら、賭けに勝つた時はあいつらに飯でもおごつてやれ。きっと喜んでくれるぞ」

苦笑いをしながら軍曹は了解した。

彼の感情は分からぬが表情と声の調子から推測すると、恥ずかしいから勘弁してくれ。と言つたところだろうか。

この後もガレージにつくまで候補生について語つていた彼の顔は実際に良い顔をしていた。

私は小学校や中学校の頃、熱血教師の良さが分からなかつた。部活動はさんざんな目にあつた記憶しかない。

ただ軍曹を見ていると、もしかしたら彼らもこの軍曹と同じように裏ではにこやかに笑っていたのかも知れないと思えてくる。

私が目指すべきリーダーとはどのような物かまだ正直分からない。軍曹のような熱血教師風のリーダーも確かにありだとは思うが、多分それは6000人を超える人間が集まる空軍基地トップの姿では無いような気がする。

まだまだ至らない所も多いが、精進していく。

軍曹の話を聞きながらそう心に誓つた。

ガレージ入り口にて田口軍曹と別れ、模擬戦用に整備されている人型兵器を見上げていた。高さは4m一般的な2階建ての一軒家ほどで肩幅が3mの機械の身体だ。

「多武装携行システム」 「Multiple Arms Portable System」 または略して「マップス」と呼ばれる。

この人型兵器は、近年確率されたFTE粒子の制御技術を最大限に活用した兵器である。

FTE粒子とは「Free Transferring Energy」の略で、重力・光・電気・運動・位置・熱・質量などあらゆるエネルギーを目的にあわせて変換することにより動力を得ることが出来る。

従来のエンジンではガソリンの爆発を利用しての運動から車輪を回したり、燃料の燃焼と噴射による反作用から推進力を得ていたのだが、FTE粒子の制御を行うと重力のベクトルを真下ではなく真横に運動エネルギーとして変換したり、移動により生じる摩擦を電気エネルギーに変換して機体に貯めることも理論上出来る。

このような各種エネルギーの自由変換により機体の機動性を始めとする各能力が各段に向上すると考えられた。

その理論の元、いくつかの試作機が作られたが、操作が当初想定していた物より煩雑となり、脳波によるサポートコントロールが必要となつた。

そこで人が挙動をイメージしやすい人型として機体開発が行われた。

と教科書的には書かれているが、開発者の一人を知っている私は、技術者たちの趣味でこうなったように思える。

この国の技術者はどうにも変態が多いので、やりたいことをやるためにやつた結果人型になつたのではないか。

開発者の一人から

「人型の方がかつこいいでしょ？」

と言われた時は思わず吹き出したものだ。

ただこの選択は当初予定していた以上に効果的で、開発を進めていく中、人型兵器が持つ従来兵器とは違つた特性が、兵器としての重要性を向上させ、秘密裏の開発ながら予算が潤沢に出たそうだ。マップス最大の特徴は手があることだ。

手をつけることにより武装変更が持ち替えだけで済み、機体に搭乗したまま単独で出来る。さらに肩や脚部や腰部にハードポイントを設け多様な武装を携行可能になった上、武器格納用バックパック等の追加装備によりあらゆる状況に対処出来る能力の高さが従来兵器に比べ格段に向上していく。

ヤポネではそれまで経済的に多くの兵器を所持、維持するのは難しく、一機で複数の目的に使える兵器が非常に魅力的だったのだ。制空権の確保から地上の制圧まで幅広く運用が可能な兵器は喉から手が出るほどだった。

初めて実戦に投入された際に得られた機体評価は、飛行機より機動性が高く、ヘリコプターより小回りが効き、戦車よりも制圧力が高い。武器の変更による状況対処能力は歩兵並みで、武装さえ用意しているならあらゆる状況に対処が可能性である最強の現代兵器とうたわれた。

今では世界的に開発・販売メーカーが増加し、現在では大国に1メーカーは存在する勢いで広がっている。

「マップスも随分と種類が増えたな」

ヤポネの元祖マップスメーカー「菱田重工」の初代マップス「ゴースト」に乗っていた者からすると、この第一世代型は何度見ても感慨深く誇りしく感じる。

当初は脳波コントロールだつたせいもあり、適合者が少なかつたが、我々の操縦データをもとにAIが開発され、戦闘データから各能力に個性を待たせた第一世代のフレームの開発が行われたのだ。AIを触媒にしてパイロットとマップスの融合をコンセプトに開発された第一世代型は、更にパイロットに合わせた細かなカスタマイズまでも行えるようになった。

今一般に配備されているのがこの第一世代マップスで近距離、中距離、遠距離のどれかが得意なカスタマイズが出来る。

近距離型は装甲が少なめでスラッシュとしたシルエットをしていて、弱点となる関節部分にあたる所々に小型の追加装甲がつけられる。逆に遠距離型は全体の装甲が厚いためかガツチリしたシルエットをしている。

しばらく立つて眺めていたら後ろから元気の良い声がかかった。

「よお、坊主！　ああ、いや大将！　また乗りたくなったか？」

日に焼けた170cmくらいの整備主任だ。

頭の髪の毛が最近減り気味で悩んでいて、少し小太りだががっちりしている。そして大声で喋る豪快な人だ。

このオヤジさんなかなかのカリスマ性を持つていて、多くのパイロット達からオヤッサンと慕われている。

昔からの知り合いとは言え、私は一応上官なのだが、特に喋り方は変えてこないらしい。

さすがに坊主は最近減ってきてはいる。その代わりに大将というのもいかがな物かと思う。

だが、若くしてこんな地位に抜擢されてしまったので、最初は信頼関係とか色々大変だったところを、オヤッサンの昔の戦友ということで隊員たちの信頼を得られた。

それに自分も前から世話になつてるので、細かいことは大目に

見ることにしてるし、一いちもある程度碎けて喋られるので良いとする。

他の所から視察が入る時は気をつけてもらえば良いか。

「おはよう。オヤジさん。たまに懐かしいで乗りたくなるけど、さすがにブランクはあるからね。現役には負けるよ。しかも、最近のマップスは脳波コントロールが減って、AIによる補助で非常に操作性があがってるんだって？ それについていけるかわからんよ。それに残念ながら今は司令という立場だ。マップスに乗つて前線で戦いながら全体指揮はとれないさ」

まるで分かりきった冗談が通じなかつたのを隠すように、オヤジさんは豪快に笑つてきた。

「まつ、それなら仕方ない。気が変わつたらいつでも言えよ。あんたの一言があればあつという間に整備してやるからよ。なんと言つてもあんたは初代マップス中隊の隊長だ」

それにしてもとオヤジさんが話題を変える合図をする。

「マップス乗りも随分増えたよな。十年前までは大将含めて10人だつたのが、今年はここだけで候補生が50人か。すごいもんだな」「さつきも言つたように操作性が向上して誰でも使えるようになつたからな。まあ、この基地が特別多いつてのもあるんだが、上の連中かなりの数押し付けてきた」

「それだけ期待されるんだろ。マップスの実戦経験がある佐官は大将だけなんだからよ」

「あの10人に選ばれた上に士官学校出は私だけだったからな。ものすごい運だよ。おかげで白い眼で見られることがあるのがたまに傷だが、仕事の成果で見返せるように努力するしかない。私の成果にも繋がる新人を育成してくれる田口軍曹には感謝だな。私には基礎まで細かく教えられるほど暇がない。面倒な書類がこうも多いとは思わなかつたよ。マップス乗りがする仕事じやないね」

やれやれと右手で頭を押されて大げさに首を振る。

「心中察するぜ。ちなみにだ大将。そうやつて書類で悩んでいると

ころ悪いが、今日の書類を追加しても構わないかい？ 菱田重工の松平の坊主からマップスの第三世代フレームが完成すると報告があつてな。採用出来るように申請書を頼むわ

とんでもないことを凄く軽く頼んできた。

この基地に新兵器の実験部隊を擁するので、他の基地に比べれば申請しやすいとは言え、去年初めて新しいライフルを申請した時は、試験の許可が降りるまで色々あって一週間はかかった。

まあ、私の不手際がその原因の大半を占めていた気がするのは内緒だ。

ただ、その後も、使用的手続きだの、搬入手続きだの、申請書類以外にも書く書類が多く、集めたデータを送る度に送信許可の書類を書かされたのだ。

しかもその後のライフル返却手続きも同様に面倒だつた。

上層部がやつた第一世代マップスの正式採用手続きを比べれば遙かにマシなのだろうが、新型機だとそれくらいかかるのだろう。

考えるだけで頭が痛くなりそつだが、将来の兵士達のためなら仕方ない。

「分かつた。後で資料をこちらに送ってくれ。松平もかんでいるなら良い機体だろうし」

松平というのは同じくゴースト隊にいた一人で、もともと菱田重工の開発者兼テストパイロットだったが、特殊部隊として徵収され共に戦つた戦友だ。

彼によつて戦場で得られたデータから数多くの兵器が作り出されている。

大事な仕事も頼めたし、残りの時間で最終チェックをしてくると言ひ残してオヤジさんは整備に戻つていつた。

「そのうち久しぶりに乗るのも悪くないかもなあ

かの愛機と戦友のことを思い出し、思わず口から言葉が漏れてしまつた。

オヤジさんが整備に戻つて行つてくれて良かつた。

第二章「ブリーフィング」

第一章「ブリーフィング」

整備主任のオヤジさんと話していた間に候補生達がガレージ入り口に集合していた。

田口軍曹が点呼を取り模擬戦の心得を語っている。予定ではこの後各種機体のチェックを行いブリーフィングだ。その間に私は、相手をするガンドック小隊に簡易ブリーフィングを行うことになつている。

集まっているガンドック小隊の前に立ち説明を始める。

「今日の訓練は候補生だけではなく、諸君らの訓練もある。シチュエーションは通信障害下で対空迎撃を低空飛行でかいくぐつてからの敵地潜入だ。作戦目標は基地防衛部隊の制圧およびジャミング設備の破壊である。なお、今作戦は事前に敵部隊の武装・数の判断がつかなかつた場合を想定している。武装は対マップス用を装備し、施設破壊は同武装をもつて作戦にあたれ。バックアップ無しの状態での戦闘だ。敵の場所・目的施設は機体に搭載されている光学レーダー・熱源探知のみで索敵しなくてはならない。このような制限条件下的作戦だ。諸君らには言うまでも無いが、部隊内の連携を戦闘行動だけでなく情報においても上手くやれ。以上だ。何か質問は？」

隊長が手を挙げ質問をした。

「ジャミング施設の破壊を行つた場合、バックアップは回復するのでしょうか？」

なるほど。さすがに隊長をやつてているだけあって状況の悪さを認識し、打開策の検討も行つている。

「もちろんイエスだ。ジャミング施設破壊に成功した際は通信が回復し、衛星からの敵部隊分布図がレーダーに反映される。しかも、喜べ。橋オペレーターからの激励付きだ。他に質問は？」

何処から感嘆の声が漏れた。ガンドッグ4か。分かりやすい奴め。ガンドッグ隊から更なる質問は5秒待つても無かつたので早速指定ポイントに向かつてもらうことにした。

「よし、これ以上質問は無いようだな。ルーキーに負けるなよ！」

「ガンドッグ小隊出撃」

「サー！ イエッサー！」

ガレージでの簡易ブリーフィングを済ませて、ガンドッグ隊は各自のマップスに乗り込み出撃準備を始めていた。私は見送りをしながら整備班からガンドッグ隊の機体構成・武装構成の資料を貰い、その場を後にした。

「さてと、次は候補生か。正規パイロット相手とは言え、ハンデとして限られた情報量、数、地形、指揮の有無と来て負けたら敗因は私になってしまうな」

指揮官たるもの周りが不安にならぬよう構えておくべきなのだが、周りに人がいなかつたので、ついつい苦笑いを浮かべてしまった。一つ息を吐いて気持ちを入れ替え、候補生達の方に向かうと既に私が来るのを待機していた。どうやら軍曹から心得も機体チェックも終わったようだ。

ここからは私の仕事が始まる。彼等の前に立つと同時に候補生が揃つて敬礼をした。少し表情が固いように見えるが、正規パイロット相手に模擬戦だから仕方ないか。

いや、それか指揮をとるのが私だからかもしれないな。私も士官候補生時代は上官が怖かった。少し懐かしさを覚えたが、思い出に浸る暇はない。

敬礼を返し挨拶を始めるとして。

「候補生諸君、今日君達を指揮する坂本だ。今まで君達が血も滲むような努力をしていることは知っている。今日の相手は確かに強い。1対1なら勝ち目は薄いだろう。だがしかし、君達は彼らに負けない絆を持っている。今まで訓練を共にしてきた時間は何よりも強い経験だ。その絆をもつて正規パイロットに勝利して見せろ。諸

君らの健闘を祈る」

軍曹に目配せをすると次の指示を出してくれた。

「分かつたかひよつこども。大佐殿の期待を裏切るなよ！ では、ブリーフィングルームに移動せよ！ ちんたらするな！」

軍曹の怒号と共に候補生達はブリーフィングルームに走って行った。廊下での会話を思い出してイタズラ心が芽生えた。

「じついうのを世間ではなんといったかな」

軍曹が不思議そうな顔をしている。

「そうだ。ツンデレというやつだ。これからは鬼軍曹ではなくシンデレ軍曹と呼ばれるのはいかがかな？」

軍曹が困ったようにひきついた笑いをしている。ビリヤリシンデレの意味はわかつているらしい。

「司令がそうおっしゃるなら。いささか教官としての威厳にかけるので遠慮したいのですが」

冗談が通じないほど真面目な男だ。しかも、まずは田上を肯定してから遠回しな否定を使いこちらをたてている。やれといつたら本当にやりそなので、からかうのはこの辺で止めておこう。

「もちろん冗談だ。すまなかつたな。後はモニターで観戦をしてくれ」

軍曹は安堵の顔をして敬礼をした。

「イエッサー。ではあいつらを頼みます」

任せとおけ。という意味を込めて敬礼を返す。

「君の教え子だ。負けるわけが無い」

軍曹と別れブリーフィングルームに向かうと、中で既に候補生が待機していた。中に入るしつかり敬礼をしてくる良く出来た奴らだ。彼らのためにもしつかり仕事をしよう。

ブリーフィングのための大型モニターをつけて作戦を説明する。

「今回のシチュエーションは本隊が陽動にかかり、拠点兵力が少な

い状態での奇襲をかけてくる敵迎撃だ。拠点施設にはレーダーのジャミング設備が設けられており、敵の索敵はカメラによる光学レーダーと熱源探知のみだ。しかし、ジャミングが破壊されると通信が回復し、こちらは丸見えとなる。いかに施設を守りながら敵を倒すかが鍵となる。具体的な数字は次に話すが、まずはここまでで、シチュエーションについて何か質問は？

手を挙げる者はいないようなので、次に進める。

「敵はマップス1小隊のみ。数にするにマップス5機だ。敵作戦目標はジャミング施設の破壊、拠点制圧とそれに伴う防衛部隊の撃破と予想される。つまりこちら側は敵の全機撃破が脅威を取り除けるただ一つの勝利条件だ。なお、今回はジャミング施設の破壊を防げなくともよい。が、防げたらちょっとしたボーナスを進呈しよう。勝利条件について何か質問は？」

後列に位置していた1人が手を挙げたので質問を促した。

「サー、敵の撃破判定はどのように行われるのでしょうか？」

「今回実弾兵器にはペイント弾を利用して命中箇所、命中時弾速とともにダメージ判断を行つ。また、粒子ブレードや粒子ライフルのようなエネルギー兵器は命中時の熱変化によりダメージを判定する。なお、訓練用に粒子密度を大幅に下げ被弾による損傷は起きないよう設定してあるため安心してくれ。最後に武器によって係数がある。同じ当たり箇所でも発射武器によりダメージは変化するので被弾が少ないからダメージが少ないとと思って油断するな。HUDにダメージの蓄積は表示されるので、機体のダメージチェックを常に怠るな。他に質問は？」

「ありません。ありがとうございます」

「よし、では次だ。これからは敵部隊迎撃のための作戦を説明する。まずは、敵部隊の編成を見て貰おう」
ガレージで整備班から貰った GandD パートの資料を展開させていく。

「近距離格闘戦に特化したファイタータイプが一機、近中距離が得

意なアタッカータイプが三機、そして遠距離に特化したスナイパー・タイプが一機の編成だ。各機体スタイルに合わせた武装は勿論サブウェポンとして、苦手距離を埋める装備も携行している。ファイターは足の速い機体にショットガン、粒子ブレード更にアサルトライフルを装備。アタッカーは旋回性能の高い機体にマシンガンとレールライフルそしてミサイルを装備。スナイパーは防御能力の高い機体に長距離用の実弾ライフルと粒子砲を装備している。正面から戦えばこちらの数が二倍とは言え苦戦するのは目に見えている。そこで、諸君らには正攻法ではなく策を持つて敵を打ち破る必要がある。今回の戦闘区域マップを見て貰おう。」

画面に基地周り50km程度の地図を表示した。この基地は南には森と山と海、北は山に囲まれた所に位置している。

「敵は南の海上から飛行してくる。待機ポイントは基地から南方30kmの海岸、基地から南方27km海岸付近の山の基地側、基地南方24kmの上空、そして基地南方20kmの森林地帯だ。まずは海岸に足の速いファイターで三機待機してもらおう。敵部隊が50km圏内に入つたら、海上に移動し敵と交戦。近中距離戦闘が可能な距離になつたら即転身し、後退。牽制射撃をしながら山を抜けろ。抜けたタイミングでスマートグレネードを炸裂させる。山を敵も抜けたら、上空に待機してもらうアタッカー一機とスナイパー一機により敵を上から攻撃。散開したタイミングを狙つて山に待機しているアタッカーミニ機で背面から敵スナイパーを攻撃し他の機体に割つて入りながら敵を分断する。分断した機体に同じく山に待機しているファイター一機が近接攻撃をしけ、可能な限り早く撃破。さらに援護に向かう敵には基地南方の森林地帯よりスナイパー一機で牽制射撃をしかけ敵の合流を遅らせる。スナイパー撃破後はアタッカーミニ機ファイター三機により敵ファイター一機を撃破する。同時に、スナイパー一機による砲撃とファイター・アタッカーにより敵アタッカーミニ機を近接戦闘に持ち込み、ファイターの援護を阻止する。ファイター撃破後は残存戦力全てで、残りを叩くのみだ。まとめると

と不意打ちを連続で行い分断と包囲による個別撃破作戦だ。質問は？」

童顔で一部の男にまで人気の沖田が沈黙をやぶる。

「サー。それぞれの配置はどうなつてているのでしょうか？」

丁度次に説明する内容だったので先に進めるこことを兼ねて答える。
「各自携帯端末を取り出せ。それとのコールネームおよび配置、
機体と武器構成のデータを送信してある」

コールネームは最初の陽動がソード、上空待機班がクロスボウ、山
に伏し分断をはかるのがアックス、分断した敵を落としにいくのが
ランスだ。それに各々の番号をつけている。

「本日は諸君らの部隊をアームズとよばせてもらひ。他に質問はな
いか？」それぞれの役割が判明して皆の緊張感が表れている良い顔
だ。後は各々の奮闘に期待する。

「よし、質問は無いようだな。各員健闘を祈るアームズ出撃せよー。
「サー！ イエッサー！」

候補生が部屋を駆け足で出て行ったのを見送り、こちらも司令塔に
移動する。既にオペレーターも司令塔にいるはずだ。

候補生の資料に書かれている能力が新人パイロットにしては意外に

高く、彼らの成長ぶりに口元が思わずニヤケてしまった。

「軍曹の言う通り1対1なら Gandling が勝つだろうが、複数相手
なら危ないかもな。Gandling の対応が楽しみだ」

一つ深呼吸をして頭を落ち着かせて司令塔に向かった。

第三章「陽動」

第三章「陽動」

司令塔では既にオペレーターが準備を完了していた。作戦区域の地図を映し出した大型モニターを確認すると両部隊とも位置についていた。準備の最終確認をとろう。長い艶やかな黒髪を縛つてポニーtailにしているオペレーターの橋に連絡を入れてもらひ。「本部よりガンドッグ全機へ。こちらオペレーターの橋です。みなさん準備は良いですか？」

「ガンドッグ1レディ。いつでもいける」

「ガンドッグ2レディ。待ちくたびれましたよ」

「ガンドッグ3レディ。余裕です」

「ガンドッグ4レディ。良いとこ見せちゃうぜ？」

「ガンドッグ5レディ。問題無い」

それぞれ個性の出る応答だ。この組合せで良くなうまくできているのが面白い。次は候補生の確認をとつてもらひ。

「本部よりアームズ全機。こちらオペレーターの橋です。整備班より全員マップスに搭乗済みと連絡が来ています。間違いないですか？」

「アーフマーティブ」「？」

候補生全機から通信が入った。こちらも準備完了だ。後は私が模擬戦開始の号令をかけば始まりだ。指揮官用の机のマイクをオンにして、声をはる。

「ガンドッグ全機。アームズ全機。これより、実戦型模擬戦を開始する。各員の健闘を祈る。ミッションスタート！」

「イエッサー！」

全機からいい返事が返ってきた。やる気があつて実に頼もしい。モニターを見るとそれが動き出ていたので、橋にガンドッグ

グに課したハンデの連絡と実行をしてもらひ。

「本部よりガンドッグ全機へ。これから先はジャミング地帯です。こちらからのレーダーを始めとする通信バックアップが行えません。注意してください」

「ガンドッグ1。ラジャー」

「橘ちゃん、ジャミング施設なんかとつとどぶつ壊すから待つてねー。あ、でも先に頑張ってとか言ってほしいな」

ガンドッグ4の軽口に橘は表情一つ変えないで受け流した。

「ガンドッグ4。作戦中です。私語はつつしんでください」かわいい顔して実にクール。ガンドッグ4はお構いなしにそんなとこが素敵とまだ減らず口を叩いていた。

「通信を遮断します。頑張って下さい。応援します」

橘の操作により、こちら側からの通信は入らず、向こう側からの通信は入っている状態になつてるので、歓喜の声がダダ漏れになつていた。

「くうう、橘ちゃん可愛い！ マジ可愛い！」

ガンドック4の興奮ぶりにおのの突っ込みを入れてるのが聞こえて思わず苦笑いをする。

「作戦中ですよ。まったくどうしてあなたはこつも頭の中が空っぽなのか。そもそもですね。あなた一人に向けて言つた訳ではないでしょう」

とやたら理屈っぽくつっこむ女性の声はガンドッグ2。

「バカ。本部には通信丸聞こえ。今頃笑われる」

と抑揚のない女性の声でつっこむのがガンドッグ3。

「問題無い。いつものことだ」と冷静で低い男性の声はガンドッグ

5。

「お前ら仲が良いのは結構だが、そろそろ真面目にやれ」

と隊長のガンドッグ1が最後に締めるのが彼らの様式美だ。そんなつっこみの嵐の中ガンドック4がどれだけ橘が自分に親切にしてくれるかと抗議の声をあげている。

「君も苦労してそうだな。橋君」

きょとんとした顔でこちらに振り向いている。思わず言つてしまつたがしまつた作戦中だった。

「いえ、それほどでもありませんよ。彼一人だけじゃないので慣れていますし。それにこの程度でやる気を出してもらえるなら安いものですよ。案外男ってちょろいですよ?」

ニッコリ笑いながらとんでもないことを言い出した。今を勘違いしている連中が聞いていたら大変かわいそうなことになりそうだ。今はこれ以上余計なことは言わないように仕事に戻つてもらおう。というか計算でやっていたのか、誰が結ばれるかは知らないが頑張れ。

「そうか。その人心の扱い方については非常に興味深い話題だが、お喋りはここまでにしておこう。アームズの方はどうなっている?」

橋は自分の端末に向き直つて報告する。

「ソードが残り三十秒で待機地点に到着。他のチームは既に目的地で待機、迷彩起動中です。ガンドッグが海岸に到着するのは大体5分後かと」

作戦地図をこちらも確認する。思ったより早いな。アームズ各機のレーダーにも情報は転送してあるが、注意を促す。

「ビッグハットよりアームズ全機、敵部隊が接近中。レーダーで確認出来ているか?」

「アスマーティブ」「アスマーティブ」

よし、全員レーダーを見ている。次に最初に交戦するソード三機の様子を確認しよう。

「ビッグハットよりソード全機へ、敵部隊との推定交戦時間まで三分を切つた。指定ポイントにダミーバルーンを射出し敵との交戦を始める」

「ソード1了解」「ソード2了解」「ソード3了解」

山と山の間を挟んで東西にダミーを一機ずつ設置したことをモーターでこちらも確認をする。

「ソードーよりビッグハット。ダニーの設置が完了しました。これより敵陽動にあたります。」

「」ひらビッグハット。ダニーの設置を確認した。陽動で撃破されるなよ。氣をつける」

「「了解」」

そして1分後、ついに海上10m、彼我の距離が6kmで双方が敵を補足した。「 Ganddigg

「アームズ」

「「Henggeji!（交戦開始）」」

交戦開始の合図とともに、最初に発砲したのはアームズ側だった。距離は6km。通常アサルトライフルで当たられる距離ではないが、弾は当たらなくとも良い。ただ注意をひきつけるための、射程外からの射撃だ。

ガンドッグの方も通信を聞く限りこの射撃に戸惑っている。

「この距離でアサルトライフル撃つてくるなんて、候補生達よっぽど緊張してんのか？」「この距離はロングレンジライフルでも割ときついぞ」

肩と腰と脚部についているサイドブーストを噴射し、大きく横に一回転する回避行動を取りながら曲芸飛行でガンドッグ4が少し小馬鹿にした口調で疑問を口にすると。

「油断するな。常識を無視した行動には裏があるかもしだ。全機周りに気をつけ、回避行動をとりながら前進。真っ直ぐ飛ぶなよ。距離による減衰があるとは言え当たると面倒だ。ガンドッグ5は、ロングレンジライフルで応戦しろ」

「ガンドッグ5ラジャー。スコープモードで狙撃する。視界が狭まるので何か情報があれば通信を頼む」

隊長であるガンドッグ1は緊張がゆるまないようじつかり締めて反撃につづる。

距離がまだあいでいる状態とは言え、真っ直ぐ飛んだら当たる可能性があるのと、本命の攻撃がいつどこから来るか分からぬ状況

だ。いきなり距離を詰めず回避を優先する彼の判断は正しい。

「こちらもソードに通信を入れる。

「ビッグハットよりソード全機へ。交戦開始を確認した。敵スナイパーの射程圏に入っている直撃を防ぐためにシールドを展開。シールドの隙間から牽制射撃を続けろ」

「了解」

各機体が脚部・腰・背中に装着された浮遊型追加装甲6枚を展開し防御体勢に入る。FTE粒子の制御により盾を機体周りの空間に展開する装備だ。

実体装甲だけでなく、粒子を高密度展開し高密度粒子空間を機体周りに作ることによって弾の運動エネルギーを変換し威力を殺したり弾く粒子型のシールドもある。どちらも一長一短あるが、共通する欠点として展開中は速度があげられない問題がある。実体装甲は本体に速度が追いつけなく、粒子型は密度が安定しなくなり防御能力が落ちる。

とは言え、改良によりそれなりに速度は出せるようにはなったようだが、ガンドッグが回避に徹しているのはこのためだ。前進しなければならない局面で速度は落としづらい。

ガンドッグ5が狙いを定める間にソード三機は実体装甲を機体前面にアサルトライフルの先端が隙間から出るように展開し、射撃を続ける。おかげでガンドッグ5が最初に撃つた弾三発は防ぐことが出来た。

ソードが防御体勢をとり、弾が防がれたことをガンドッグ5が早速報告する。「ガンドッグ5よりガンドッグ1へ。敵、浮遊型装甲を展開し防御姿勢をとっている。距離は現在5km。射撃は当てられるが、防がれている」

「ガンドッグ1から各機。牽制射撃を加えながら距離を一気に詰める。フォーメーション（ハント）が可能な距離まで他方面から攻撃が無ければ、そのまま仕留めるぞ。全機高度を一旦上げるぞ」

「ラジャー」

ガンドッグ全機が上昇のために脚部・背部ブーストの出力を上げ一気に高度を100mほど上げた。

防御体勢に入った相手を切り崩すには近距離からの多方面攻撃が有効と判断し接近を選択。さらに、恐らく近づいたタイミングで伏兵から攻撃があると考え、敵の位置がわかりやすい上空に高度を上げだのだろう。

このタイミングで伏兵に気をつけているなら、そのまま利用させてもらうか。「ビッグハットよりソード全機。シールドを開設しながら後退。敵との距離が2kmを切つたらシールドを解除し、全速力でダミー設置ポイントまで後退せよ」

「ラジヤー」

距離が4kmを切り、アタッカーであるガンドッグ2、3、4からレールライフルの射撃が始まった。

今の所、ソード三機は機体を左右にふって回避行動をとりながら後退し、浮遊装甲で直撃も防げている。

ガンドッグの方は上下左右にブーストを噴射し回避しながら、レールライフルを撃ち続けたガンドッグ4がなかなか敵の撃墜が出来ないことにぼやき始めた。

「自分も乗つて言うのはなんだけど、相手をするのが面倒というか、マップスつてホント頑丈だな。戦車やらヘリならとっくに壊れてるだろ」

ガンドッグ2が話題に乗つかり応答する。

「さすが、最高の現代兵器と言われているだけあって、簡単には落とせないです。ただでさえ、機動力が高くて捉えにくい上に装甲も堅い。しかもその装甲より頑丈な浮遊装甲を展開中ですし、そもそも浮遊装甲も頑丈じゃなかつたらわざわざ武装として登録されていませんよ。それにですね」

いつもの長話をされたると面倒だと思ったのかガンドッグ3が制止をかけた。

「先輩長話はストップ。距離が3kmを切りました。残り1kmで

ハントの距離です

相変わらず戦闘中でも声に抑揚がない。しかし、回避行動と射撃をしながら余裕で会話するとは良くやるよ。

対照的にソードは攻撃を受け続け余裕が無くなつて来ている。

「橋。今ままのスピードだと何秒後に目標距離になる?」

3秒ほどで答えを出してもらえた。

「30秒後です」

何とか持つだらう。続けざまの攻撃で混乱に陥らないように声をかける。

「ビッグハットよつソード全機へ。残り三十秒で敵との目標距離だ。もう少し耐える。浮遊装甲はそう簡単には破壊されない。今ままで上手く防ぎながら後退だ」

「ラジャー」

まだ大丈夫。パニックにはなつていかない田口軍曹は良い教育をしてくれている。徐々に距離が詰まり3kmを切つたところでガンドッグが速度を更に上げた。

「ガンドッグ1より、ガンドッグ全機へ。フォーメーション(ハント)」

「ガンドッグ2、お任せあれ」

「ガンドッグ3、仕掛けます」

「ガンドッグ4、待つてました!」

「ガンドッグ5、いつでもいける」

ファイターのガンドッグ1を先頭に左右にアタッカーのガンドッグ2と3がつき、その後ろにガンドッグ4、そしてスナイパーのガンドッグ5が続く。

ソードは横に1、2、3と並んでいたが、ガンドッグ5がソード2に右手のロングレンジライフルをソード3には左手の粒子砲を連続で撃ち始めた。

ソード2と3の意識を防御に集中させ、ソード1には残りの四機で集中攻撃を始める。

距離を見るとまだ2・5kmだが、通信から聞こえる候補生の緊迫した声と状況から、さすがにこれ以上近づかれると被弾する可能性があると判断した。

「ビッグハットよりソード全機へ。敵が本気になつた。予定より早いが状況が悪い。こちらでポイントを指定する。全速で後退しろ」「ソード・ラジヤー。ロックアラート鳴りっぱなしで、生きた心地がしなかつたですよ……」

ソード三機は機体を反転させ、展開中の浮遊装甲を全て背面に取り付け背中、腰、脚部につけられている全てのブーストを噴射し、後退を始める。転身した際に多少の被弾があつたようだが、浮遊装甲を全て背面に取り付けた結果直撃は免れた。

後はうまく後ろからの射撃を避けるだけだ。

ただ、ガンニングも簡単には逃すつもりは無いらしい。自らは真っ直ぐ飛行しながら相手には執拗な射撃で回避行動をとらせ、距離を詰めようとしている。同じ距離を進むにも真っ直ぐとジグザグや回転の回避行動が混じつた進み方では明らかに真っ直ぐが早い。

だが、ソードは足の早いファイターのみの編成に対し、ガンニングは足の遅いスナイパーも混じっている。敵を追いかけるのに必死になるあまり味方を孤立させ、伏兵に奇襲される危険は犯せない。その結果、足の遅い機体にあわせた速度となつたので、徐々に両者の距離が開いていく。ガンニング4が呆れて通信で叫んでいる。

「おいおいおい、突っ込んできたと思って、本気で攻撃し始めたら、本気で逃げだしたよ？！ どういうことよ？ やる気あんの？」

ガンニング2がそれに呆れて通信を返した。

「やる気がないのはあなたの頭ですよ。我々より少ない数で仕掛けで、距離が縮まつたら後退つてどう考えても陽動でしょう。待ち伏せか後ろに既につかれているかのどちらかですね」

「ああ？ 僕は常にやる気に満ちあふれてるよ！ それにレーダーには敵影は映つて無いぞ。熱源反応も今の所あの三機しか無いし挟まれてはいないだろ。大体、ルーキーにそんな小賢しいこと出来ん

のか？」

ガンドッグ5が更に通信を割り込む。

「ガンドッグ4落ち着け。相手を過小評価しない方が良い。だが、今スコープでも後ろを確認しているが、確かに敵影は見えない。まだ挟まれてはいないようだ」

そして、ガンドッグ3が続いた。

「となると、考えられるのは待ち伏せですか？」

最初に待ち伏せの可能性を提案したガンドッグ2が返事をする。「いきなり海の下から飛び出して来るとか考えられますけど、陸地で待ち伏せというのも考えられますね。何にせよバックアップが無いのは厄介ですね。出来ることは良く周りを観察するのと突然敵が出てくることに対する心の準備くらいでしょつか」

やれやれとため息混じりに説明を終えると、隊長のガンドッグ1が指示を出す。

「ガンドッグ2の言う通り待ち伏せの可能性が非常に高い。敵が反転した瞬間には気をつけろ」「

と部隊に注意を促し、話を続ける。

「ただし、注意のし過ぎで速度が落ち、捕捉済みの敵を見失い、不意打ちは受けようものなら話にならない。基本このままの速度で飛行し、補足可能距離を維持するために適宜速度を上げるぞ」

「「ラジャー」」

良く敵を見て警戒していく。良いチームだ。これは私の策略が見破られるかもしれないな。

モニターに映るレーダーを見ていると、何とかレールライフルの射程圏から抜け出したソードは後少しでダニーのある海岸線に着くところであった。少し緊張感が切れたのか私語が聞こえる。

「おい、伊東。佐藤。さっきのすごかったな。ロックアラート鳴りっぱなしで、浮遊装甲が銃弾を受ける音がガンガン鳴つてさ。実弾だつたら危なかった……」

ソード1がコールネームではなく名前で呼んでいる。

伊東と呼ばれたソード2が返事をする。

「コールネームじゃなくなつてるぞ斎藤。つてこいつちもか。俺も口ツクアラート鳴りっぱで、粒子砲撃たれてたから田の前が緑でいっぱいになつてたよ。装甲間に隙間を作つたらやばかった」

ソード3が会話に乗つかる。

「後退が早まつて良かつたね。もう少しあのままだつたらやばかつたよ。つて、うわー？ソード1の浮遊装甲がペイント弾の色で真つ赤になつてる！ つて私のもか」

「あんだけ撃たれればなあ……」

「私達、良く撃墜判定にならなかつたよねえ」

ソード1が大きくため息をついたようだ。海岸線がもう田の前に迫つて来ている。海岸線付近でもう一度敵を引きつけなければならないと思うとため息の一つでもしたくなつたのだろうか。

私は彼らの気を落ち着かせるために、お喋りを聞かなかつた振りをしていたが、そろそろポイントなので、気をもう一度引き締めて貰うために指示を出す。

「ビッグハットよつソード全機へ。まだ誰も落ちていないな。ポイントは田の前だ。ここでもう一度敵を引きつける。気を引き締めろよ」

了解と3人から応答が返つてきた。ここからが正念場だ。

ソード3機がポイントに到達し機体を反転させ、浮遊装甲を再度展開し敵を迎えた。

「ガンドック1より各機。敵が足を止め、こちらを向いている。恐らく罠だ。牽制射撃を加えながら左右に分かれて挟み込み、待ち伏せより早く敵を撃破するぞ。フォーメーション（クロー）」

ガンドック1の合図で部隊が左右に分かれた。

左にガンドック1と4、右に残りのガンドック2と3と5からの挟み撃ちだ。

左右どちらかに注意を逸らせ浮遊装甲をずらし、ずらした隙間に弾を打ち込む戦術だ。

「」の戦術は部隊の息が合えば合つほど防御を切り崩しやすくなる。ソード3機が防御で敵を引きつける予定だが、非常に相性が悪い戦術だ。

しかし、次の仕掛けのために今回はギリギリまで近づいて貰わなくては意味がない。

そのためにもソード3機にはゆっくりと下がつて貰わなければならぬ。

動きの速い回避起動では潜伏中の部隊が捕捉される危険や仕掛けの先に行かれてしまう恐れがある。

「ビッグハットよりソード全機へ。密集防御陣形を取り、防御面に隙間を作るな」

ソード一機を前面に残りの二機を三角形になるように背中合わせで密着させ、浮遊装甲を各機の前面に展開することによって前方180度を防ぐ陣形だ。

距離が空いている間はミサイルと銃弾の雨をフレアと浮遊装甲で何とか防げていたが、距離が1kmを切った時、 Ganddug3が他の隊員に通信を入れた。

「先輩、 ガンドック5。 ナイスアシスト」

ソード2が初めてダメージ判定を伴う被弾をする。

どうやら、ガンドック5から撃たれたロングレンジライフルを防いだのは良かつたが、同時に撃たれていた垂直ミサイルに気付かず対応が遅れ、フレアではなく浮遊装甲を上に向けて防いだところ、空いてしまった隙間を撃たれたようだ。

「こちらソード2、左脚部に被弾した。損傷は軽微。つて、あぶねつー？」

「ソード2！ ミサイル！ また上からの垂直ミサイルだ！ 気をつけろ！」

「右からもミサイルが来るよ！ 私がなんとかする！」

ソード3が装備していたフレアを射出し、ミサイルをそらしたのは良かつたが、防戦一方だったせいもあり、フレアの残弾数が少な

い。

しかも、激しい弾幕を防ぐのに精一杯でなかなか反撃が出来ずにいるため、 Ganddick の攻撃を止めることが出来ない状態だ。

しかし、両者の距離は 1 km を切った。目標の 500 m まで後少しだ。

500 m まで近づけば Ganddick 小隊がソードの防御陣形をめぐるため、更に接近して後ろに回りこもうとするはずだ。

「 橘。ソードに後退のカウントダウンを頼む 」

了解です。橘が距離のカウントを始める。

900 …… 「 後少しか。ソード 2 ソード 3 何とか持たせるぞ！ 」

800 …… 「 ソード 2 フレア 残数 0 ！ ミサイルはそつちに任せた ! 」

700 …… 「 ソード 3 ひらもフレア 残数 0 ！ 」 ひらのフレア 全部切れたんじゃないの ? ! 」

600 …… 「 ビッグハットよりソード全機 ! 後退用意 ! 」

500 …… 「 ソード全機後退してください 」

「 ラジヤー ! 」

合図とともにフラッシュ・ショグ・レーダーを射出す。

強烈な閃光で一時的に機体のカメラ機能を麻痺させる。その一瞬の隙をついてソード 3 機が全速で後退をする。

「 二度も逃がすかよ ! 」

Ganddick 4 が加速しソードを追いかける。

「 ガンドック 4 ! 先走り過ぎです ! 隊長どうしますか ? 」

Ganddick 2 が Ganddick 4 の制止をかけながら、隊長の判断を待つ。

その間 Ganddick 4 は文句を言しながらも制止している。良い判断だ Ganddick 4 。

「 仕方ない。罠の可能性もあるが、追いかけるしかあるまい。後方に注意しながら行くぞ 」

隊長の判断が下され、 Ganddick 小隊は前進しながら左右に分か

れていた部隊を合流させた。

ガンドックが合流した後、ガンドック5から数発狙撃を放つたが、ギリギリで回避されてしまった。

そして遂に策を仕込みに仕込んだポイントにガンドック小隊が到達する。

第四章「反撃」

第四章「反撃」

「ビッグハットよりソード。ダミーに熱を入れ、五秒後に全スモーケグレネードを後方に炸裂せろ」

「了解」

待機しているチームの出番が迫っているのでそちらにも確認をとる。

「ビッグハットよりクロスボウ。スマートが行動開始の合図だ」

「クロスボウ1了解」

「クロスボウ2了解」

よし、準備は大丈夫そうだ。

後はガンドックがこちらの思惑通り動けば勝てるはずだ。

ソードの遠隔操作により、ダミーが熱を持ちガンドックのレーダーに表示される。

いち早く気付いたガンドック2が通信で報告を入れた。

「隊長！ 8時と16時の方向に敵熱源反応を確認！」

「3・4は機体を回転！ 後ろの警戒をしながらついてこい！」

「分かりました」

「まかせとけって」

ガンドック3と4は胸部にあるバックブーストを片側だけ噴射し一気に機体の向きを反転させ、バックブーストに加え脚部を前に突き出しブーストを噴射することによつて速度を維持しながら前進を始めた。

うまく引っかかつてくれた。

そして、予定通りスマートがソード3機によつてまかれ、ガンドック小隊がスマート内に突っ込んだ。

「レーダーロスト。ジャマースモークのようです」

ガンドック3が報告を入れる。

「隊列このまま。前方・後方からの攻撃に注意しろ」

そのまま突破することを選んだようだ。

5秒後スマートを突破したところで、ソードとクロスボウからの攻撃が始まった。

前方のソード3機からの射撃を回避することは出来たが、上空のクロスボウ2機から降り注ぐライフル弾、ミサイル、炸裂弾に反応出来ず、後ろを向いていたガンドック3と4にダメージを与えた。

「こちらクロスボウ1。ソードのみなさんお待たせ！」

上からの攻撃を想定していなかつたため、ガンドック小隊の対応に焦りが出ているようだ。

「おいおい！？ 上かよ！ レーダーには映ってなかつたぜ？」

ガンドック4が想定外の攻撃に驚いて叫んでいる。

「ジャマー圏内の上に、ジャマースマークまでまかれたんじゃ 気付かないよ」

やられたとガンドック3も抑揚の無い声で悔しがっている

「全機散開！」

そんな中でガンドック1は爆発半径の広い炸裂弾に密集は危険と即判断し、すぐに散開号令で部隊を前方に散開させる。

よし、ここまでは想定通り。

現在ガンドック小隊のレーダーにはソード3機とクロスボウの2機、そしてダミーの3機が映っている。

前を突破してその包囲から抜けるつもりのようだったが、ガンドック5がダミーに気付いた。

「隊長、先程後方に現れた敵影ですが、この状況で全く動いていません。こちらの注意を後ろにそらせるダミーです」

よく気付いたが遅い。それにむしろ気付かれた方が好都合だ。

「よし、5は後方に下がり敵の遠距離砲撃を黙らせろ。残りで前方の敵を落とすぞ」

ガンドック1の指示通りガンドック5は山側に後退し、残りが前進した。

どうやらアックスを出す前に分断に成功したようだ。作戦を少し変更する。

クロスボウ1はロングレンジライフルでガンドッグ5と撃ち合い、距離を敵部隊から離していき、ソード三機とクロスボウ2が残りの敵四機の対処を始めた。

上空のクロスボウ1が狙撃に集中出来るように敵を抑えるのが彼らの仕事になる。

分断に成功した今ここで一気にガンドッグ5を落とすか。

「ビッグハットよりアックス全機！ 予定とは違うが、田の前にいるスナイパー型を落とせ！」

「アックス1了解。撃墜スコアは俺の物」

「アックス2了解。逆に落とされないでよ？」

「アックス3了解。なんとかなるっしょー」

応答とともに射撃を開始し、前方上空のクロスボウ1と撃ち合っているガンドッグ5の背部にレールライフルが直撃する。

「ダニーは伏兵を隠すための物でもあったか……隊長、後方の伏兵三機より攻撃を受けています。援護頼めますか？ ある程度までは浮遊装甲を展開し、耐えます」

直撃は五発。

損傷判定は腕部と脚部にそれぞれ小ダメージ。

不意打ちに対してもう一枚を非常に早く展開された結果、大したダメージは与えられなかつたようだ。

ガンドック5の通信通り続く後方からの攻撃は浮遊装甲で防ぎつつ、前方からの狙撃の一発を回避機動で避けていたが。

「動きが読めたよ。いただき！」

クロスボウ1の狙撃が更に避けようとするガンドッグ5を捉えた。撃たれたロングレンジライフルの弾丸はガンドッグ5が動いた先に置かれるよう放たれていたのだ。

「む、左腕に直撃か。損傷判定は中程度。もう一発今を貰えば破壊判定か。こちらの回避を予測して置き撃ちとは良い腕だルーキー」

こんな時にも落ち着いた声で冷静に分析している。さすがスナイパーをやつているだけはある。

「5まだやれますか？ 今からそちらに向かい援護します」
ガンドッグ2が背部への不意打ちを避けるために、ソードとクロスボウに対して機体を前に向けたままバックブーストで後退し、ガンドッグ5の方に離れていく。予定とは少し違ったが、これで敵五機を三つに分断することが出来た。

「ビッグハットよりランス！ ショータイムだ！」
「ランス1ラジャー。援護に向かう敵を狙撃します」
「ランス2ラジャー。敵スナイパーを落とします！」
「これで落とせればかなり楽になるはずだ。」

失敗した場合に備えての包囲戦術も準備してはいるが、敵よりも技量が低い部隊では、数が一倍でも不安なので確実に決めて欲しい。さてどうなる？ 息を呑んでモニターを見るとランス1が撃つた弾はガンドッグ2の右腰前面に直撃した。

ロックオン無しのスコープ射撃で警告音が鳴らす反応が出来なかつたようだ。

損傷判定は中程度だつたが、当たりどころが良く、戦闘に大きな支障が出るダメージではなかつた。
しかし、足止めには十分だ。

「今のは一体どこから？ 被弾状況からして上からではなく正面か下といったところかしら？ まだ敵がいるの？」

続けざまにライフルが撃たれるが今度は粒子型シールドを開け、弾の威力を殺して防御する。

「ふむ、やはり下からですか。2から全機へ11時の方向に敵スナイパー…こちらで捕捉したのでレーダーに表示します」

「マジかよ？！ 何体敵がいるんだつての！」

3機で4機を相手にしているガンドッグ4がうごぎりしたように叫ぶ。

その頃ガンドッグ5は器用に多方面の攻撃を防いでいた。

一番ダメージの大きいスナイパー方面に常に装甲を3枚展開し、ミサイルにはフレアを射出してそらし、レールライフルやマシンガンには2枚の浮遊装甲をピンポイントで当てて防いでいる。

だが、この攻撃の雨に近接戦闘の得意な機体が参加したことによりガンドック5の防御にほころびが生じた。

「いただく！」

ランス2がショットガンの連射により、浮遊装甲3枚を一点に集めたところに、背部ブーストを噴射し粒子ブレードを構えながら突っ込んだ。

初撃は横切りで浮遊装甲をまとめて払い空いたところにショットガンをつきつけ至近距離で発射するが、寸でのところでガンドック5が右手のロングレンジライフルをショットガンに払うようにぶつけ射線を変え回避、左手に粒子ダガーを取り、突きの反撃を繰り出しうが、ランス2がバックブーストで突きを回避し、ショットガンを発射する。

ガンドック5はバックブーストが噴かれた瞬間にナイフを右腰にマウントしてそのまま左腕を盾にして、本体のダメージを減らす。

同時に右手のライフルを肩に取り付け、空いた手でマウントされたダガーを投擲する。

ランス2は投擲されたダガーをショットガンにぶつけ直撃を防いだ。

「ちつ、ショットガンが一本お釈迦になつたか！ それでも！」

そしてショットガンに弾かれたダガーを掴み、そのまま投げ返した。ガンドック5はダガーの投げ返しに反応し、払われなかつた浮遊装甲を一枚ランス2に向け展開した。

しかし、そこから生じた隙をアックス3機によつて左右から狙われ、ライフルとミサイルを連續で撃ち込まれてしまつた。

左腕大破、脚部中破、右腕中破、コア損傷軽微、搭載されたAIから損害報告とアラート音が出ている。

ギリギリのところでロングレンジライフルと右腕を盾にしコアである胴体を守つたため撃破判定はまだ出ていなかつた。

「次で落とすぞ！頼むぞクロスボウ！」

ランス2は上からガンドック5の後ろに回り込み、クロスボウ1の砲撃に向けられていた浮遊装甲を右に弾き、追撃をせずにそのまま右にそれた。ガンドック5がカウンターの蹴りを入れようとしたがそのまま回避されてしまう。

「ナイスアシスト！ ランス2！」

クロスボウ1の声とともに発射された弾丸はガンドック5の背部に直撃し、更にだめ押しの粒子ブレードの突きがコアに入つた。オペレーターの橋から撃墜報告が入る。

「敵機撃墜。次の目標に移ってください」

これでまずは一機。攻撃力の高い厄介な敵が減り、遠距離が大分楽になつた。

「こちら5、すまん。やられた。悔つていると痛い目を見る」

ガンドック小隊に衝撃が走る。気付いたら敵が一倍の数になり、包囲されたあげく、味方機の撃墜により、戦力的にも精神的にも受けたダメージは大きい。

「了解。後は任せておけ。2はこっちの援護に戻れ！ 片側の敵を早く片づけなければまずい！」

「やれやれ。後ろに5を戻したのは失策でしたね」

「今更です先輩。それよりも後ろから撃たれるのが、1機だけで逆に良かつたかも知れませんよ。全機一片にスクラップは勘弁です」

「仇はとつてやるよ！ まずは田の前のやつらをぶつ潰す！」

ガンドック5はうまく損傷無しで撃破出来たが、前線の方は数が1機勝っているとは言いえ戦況は互角で、候補生達の機体に損傷が出ていた。

「ビッグハットよりアームズ全機！ 敵部隊は正面突破を図つているようだ。損傷のある機体は集中攻撃で落とされる可能性がある。損傷の少ないアックスとランスは速やかに援護に向かえ！」

「了解」

後ろに向けられる全ブーストを噴射し、全速で援護に向かう。

「橋、彼らが援護に入れるまでどれくらいだ?」

「後30秒ほどです」

「ガンドッグ2が残り10秒ほどで合流すると、中近距離の数は1対1になる。」

「タイマンで勝てる見込みは少ない上に数が減らされたら勝率はかなり落ちてしまう。そうなつてしまえば、ここまで作戦が全て水泡に帰す。」

「ビッグハットよりソードおよびクロスボウ。アックスとランスが援護に入るまで約30秒。援護が来るまで回避・防御主体で良い。絶対に落とされるな」

「了解」

海上や海岸の時とは違い、遠距離からの狙撃を含めて候補生達の数が増えて攻撃が激しくなったので、ガンドッグ小隊の攻撃頻度が落ちるかと思ったが、頻度が落ちた分、三機の攻撃が集中し、回避と防御に失敗した瞬間に撃墜判定もしくは損傷大判定が下されそういうで攻撃されている。

そしてガンドッグ2が合流して更に攻撃は激しさを増した。

アタッカーミニによるレールライフルとマシンガンで激しい弾幕をはりながら、ガンドッグ1による高速攪乱機動で上下左右前後と空間を最大に活かしてショットガンとアサルトライフルを撃ち込む。候補生側も、狙われた機体に一機援護が入り浮遊装甲を開け漏らした攻撃を防いでいる。

そして残りの一機で違う方向から射撃を撃ち込み撃墜を狙うと共に注意をそらして攻撃を一時的に止める。

大ダメージを狙えるスナイパー2機の狙撃は、レーダーから弾道の予測がつけられていたため、射線に対し機体の大部分が隠れるように浮遊装甲のマウント場所を変えて防がれていた。

スナイパー2人がそれぞれ驚きと共に打開策を相談する。

「どんなけシールドの扱い上手いのよ! さつきから何発も当てるのに全部シールドじゃないの!」

クロスボウ1にランス1が返事を返す。

「さすが正規パイロットですね。恐らくレーダーで僕達の場所を見て、そこから弾道を割り出してるのでは？」

「だったらどうすれば良いのかしら？」「

「さつきの撃墜と同じで、隙を作つてもうつて確実につくつてのは？」

「今の状況を見ると難しそうね。近接攻撃しようと近づいたら蜂の巣にされて厳しいわよ。つてちょっと待つて！ サっき弾道予測で防いでるって言つたわね？」

クロスボウ1がどうやら何か思いついたらしい。

「そうだけど。それがどうかした？」

「ちょっと試したいことがあるの。今からロックオン無しのスコープ射撃は止めて全てロックオン有りで射撃するわよ。」こちらのロッカ状況を送るからリンクして、同時に時計回りでロングレンジライフルを連射しなさい！」

なるほど。悪くない戦術だ。試す価値は十分にある。」*ヒ*は静観しておこう。

クロスボウ1は上空からガンドッグ小隊の裏に回り込んでから、ガンドッグ4をロックオンし、ロック情報をランス1とリンクさせた。

「射撃開始！」

ロックオンアラートが鳴り、狙撃を事前に察知したガンドッグ4はほくそ笑んだ。

「馬鹿め！ 回り込んでの同時攻撃とはいえ、弾道予測が出来ている相手にロックオンとは当てる気があるのか？ まつ、ノーロックでも当たらんがな！」

自信満々の言葉通りマウントされた浮遊装甲で初撃は防ぎ、続く射線を変えながら撃たれる射撃には浮遊装甲を開け、装甲を動かしながら弾を防いだ。

ランス1がクロスボウ1の戦術に気付いたようだ。

「なるほどね。でもこれ多分確実に決まるのは一回切りだよ？」「

「1機確実に減らせるだけでも十分よ」

自信満々にクロスボウ1が答えた。

「それもそうか。タイミングは援護が到着した瞬間だね」

クロスボウ1がアックス3機とランス2に通信を入れる。

それも何故か色気たっぷりの声で。

「敵を一機減らす賭けにつきあつて」

第五章「包囲」

第五章「包囲」

援護が到着した頃、ソードとクロスボウ2は機体の損傷が中程度でまだ保っていた。

機体の性能もあるだろうが、訓練の結果でここまで出せるようになつているのは間違いない。

素人や練度が不足している者が正規パイロット相手にここまで出来る訳がないのだ。

そして、到着と同時にクロスボウ1より戦術が告げられた。

「クロスボウ1より全機！ 私のロックオン情報を送るからリンクして。今から私とランス1が狙撃で敵の浮遊装甲を時計回りに動かすよ。空いた隙間に全弾丸を撃ち込んで！」

全機のFCSにロックオン情報を送信し、準備が整ったのを通信で確認する。

「よし、全機クロスボウに続くぞ！」

アームズ全機がクロスボウ1の戦術に参加する。

まずはスナイパー二機が時計回りに狙撃を始めた。

ガンドッグ4は浮遊装甲を展開し、射線に応じて装甲を時計回りに動かす。

「だから何度やっても無駄だっての！」

何回か同じ動きをして慣れさせたせいもあり、ガンドッグ4は完全に戦線に参加した四機のことを忘れていた。

右後ろと左前に隙間が生まれたのをクロスボウ1は見逃さなかつた。

「撃ち方始め！」

敵機に狙われていた一機と援護に入っていた一機をのぞいた全八機からの集中砲火が始まる。

「ちつ！ しまつ……」

ガンドッグ4が撃墜を覚悟したところに新たな装甲が周りに展開され攻撃を防いだ。

「4油断しそぎ。レーダーをしつかり見て」

ガンドッグ3が自らの浮遊装甲をガンドッグ2に飛ばしていたのだ。装甲のやりとりが出来る浮遊装甲の長所を活かしている。

「助かつたぜ。今のはちいとひやつとした」

だが、浮遊装甲を味方に飛ばすことは自分の盾が無くなることと同じだ。それをクロスボウ1は見逃さなかつた。

「浮遊装甲を飛ばした！？ ランス1、丸裸のやつを落とすよ！」

ロックオン機能をオフにして、スコープ射撃でガンドッグ3に連続で弾丸を放つ。

初撃は右肩に、続く射撃で胴体に連続で入つた。コア損傷による撃墜判定だ。

橋からの撃墜判定が報告される。

「油断したのはボクか。みなさん後は頼みます
やはり抑揚のない平坦な声音で報告をする。

二機を撃墜したことによって勝利に近づいているが、ここで油断してはならない。

私の方も敵の動きを見落とさないよう注意深くモニターを見つめる。

「やるなルーキー。だが、ここまだだ… フォーメーションファン
グ！」

ガンドッグ1がブーストの出力を上げソード1に肉薄し、右腕の粒子ブレードを上から振り下ろした。ソード1が左手の粒子ブレードで斬攻を何とか受け止める。

一瞬のつばせり合いの間にソード1が右腕のショットガンで狙いをつけるが、ガンドッグ1はショットガンの構えを見た瞬間に射撃が来ることを察知し、粒子ブレードを解除して、下に回り込んで回し蹴りをソード1の背中に入れる。

バランスを崩したソード1は体勢を立て直すため上空に離れて距離

をどううとするが、予測されていたかのようにガンドッグ2と4が背面にいた。

「さすが隊長。最高の攻撃ポイントです」

「マシンガンが2機から斉射される。

「ちつ、させるか！」

二機からの攻撃に対しギリギリで浮遊装甲を開け、数発の被弾で済ますことは出来た。

しかし、正面からの攻撃はまだ続いていた。ソード1はブレードを構え直し、接近して来るガンドッグ1を迎える。

初撃の袈裟切りをまたブレードで受け止めた所、ガンドッグ1が左手にダガーを持ち、突きを繰り出す。

ソード1は繰り出された突きを防ぐため、背面からの射撃に被弾覚悟で浮遊装甲を前面に移動させたが、突きはフェイントで、つばぜり合いをしているブレードを下げる変わりにダガーでソード1のブレードを抑える。

「なっ！？ 突きじゃない？」

そしてその一瞬に、下げるブレードで下からの切り上げをソード1の左腕に直撃させた。

「おいおいおい！ なんだそれ？！」

完全な直撃を受け、左腕の破壊判定が出されたため、ソード1の粒子ブレードの刃が消えてしまった。

「おいおい、まじかよ？！」

空いた左側からブレードの突きによる連撃が繰り出されたが、機体を右にひねり、まだ破壊判定の出ていなかつた左肩に当てる。

「ほお、今のは防ぐか」

ガンドッグ1は少し嬉しそうにつぶやき、既にショットガンに持ち替えられていた左腕武器のトリガーを押した。放たれた散弾が浮遊装甲にあたるが、この一連の攻撃でソード1は後ろの警戒がおろそかになってしまった。

「ソード1！ 後ろだ！」

誰かからの通信が入ったころにはガンドッグ2と4が格闘距離に入りダガーで突きを放っていた。

「2、4、よくやつた」

「隊長！ 次もたのんますよ！」

コアにダガーの直撃判定が下り、だめ押しの零距離射撃まで加えられたソード1に撃墜判定が出る。

「すまん。やられた」

ソード1が味方に撃墜された報告をする。

「大丈夫だ。後は任せろ」

初めての撃墜に動搖するかと思ったが、ソード2の応答をはじめ、皆落ち着いていた。

これは私も負けてはいられないな。落ち着いてレーダーを見るとあることに気がついた。ソード1、どうやら君の粘りは無駄ではなかつたようだ。

ソード1の奮戦により敵の配置がアームズの丁度真ん中に位置していたのだ。

ここが決め所と判断し全機に通信を入れる。

「ビックハットよりアームズ全機。敵は一力所に固まっている。このまま包囲して一機に攻撃を集中せよ。こちらでガイドを出す」

「了解」

アームズの応答を確認して、橋にガンドッグ1にマークを入れてもらつた。

全機のレーダーにターゲットとしてガンドック1に重要ターゲットのマークが映し出される。

更に近接攻撃をしかけるファイターの映像を小窓でスナイパー二機表示させた。

クロスボウ2とアックス三機による援護射撃の中、残ったファイターのソード2と3、そしてランス2が牽制射撃を入れながら接近し、スナイパー二機はガンドッグ2と4の注意を引きつけるための射撃を始め、少しづつガンドッグ1を他の機体から引きなした。

数秒後、接近戦が推奨される距離にまで近づきそれが粒子ブレードを展開する。

「三機相手か。さて……」

左右と後ろからのブレードを浮遊装甲それぞれ一枚で受け止め、払うようにブレードを横に一回転しながら振つて反撃する。

候補生達は脚部のブーストの出力を上げて上に切り払いを回避し、三機同時にブレードで切りかかるが、振り下ろした腕に浮遊装甲がぶつけられ体勢が崩される。

よくもそこまで上手く装甲のコントロールが出来るものだ。

「まずは1機」

ガンドッグ1のブレードによる突きがソード2に向けて放たれる。「まずつた！」

腕が後ろに反り返つていたためコアである胴体ががら空きだつた。そこを確実に狙われている。

しかし、スナイパー一機に前衛のモニターを表示させておいたのが功を奏した。

「ソード2！ 貸しよー今度はんおじつてね？」

ガンドッグ1が浮遊装甲を相手の体勢を崩すのに使っていたため、防御力がダウンしていた事に気づき、モニターから危険を察知して、とつさにガンドック1の右腕を狙つて狙撃したのだ。見事に右腕に直撃し破壊判定が下された。

「ほお、やつてくれる」

ガンドック1の感想通り、本当によくやつたと言わざるを得ない。判断力、射撃能力が高くなれば出来ない芸当だ。

ガンドッグ1はブレードが使えない状況で接近戦は出来ないと判断したのかバックブーストで距離を離しながら、浮遊装甲を引き戻そうとする。

「ここで逃すわけにいかないわよ！」

前衛三機が再度突撃をかける。

一方ガンドッグ2と4はアタッカー4機によつて足止めをされてい

た。

「隊長！ ちつ、じいつうとうじいぞ！ 2ビットにかしり！」

「じつちがどうにかして欲しいくらいですよ。さすがに1対4は厄介です」

「おい、俺を数から外すな！ 仕方ねえ。被弾覚悟で近接攻撃をしかけて突破するしかないか！」

「本当に仕方ないですね。あなたの頭の悪い作戦につきあいましょう」

「だから、誰の頭が悪いってんだよ！？ いくぞ！」

ガンドッグ1がいる方角には現在アックス2と3が応戦していて、この2人が少しでもガンドック2とガンドック4を抑えられれば、反対側からアックス1とクロスボウ2で挟むことが出来る。とりあえずは静観だ。

一方ガンドッグ1の方は左腕一本で上手く対処しているが、いくら正規パイロットとは言え片腕だけで三機を相手にするのは大変難しいようでは徐々に押され始めていた。

「スナイパー！ 浮遊装甲はこちらでぶつ飛ばす！ 空いたところを撃ち抜け！」

ガンドッグ5を撃墜した戦術をランス2が提案する。

「「了解」」

展開されている浮遊装甲は六枚。それを敵の方面に合わせて展開している。

1人1枚プラス1で各方面からの攻撃をしのがれていた。

この状況で浮遊装甲の無力化は大きなチャンスになる。良い判断だ。

「さすがに、厳しいな」

ガンドッグ1は味方の援護がレーダーを見る限り、足止めされて期待出来ないと分かっていたのだろうが通信を入れて確認をとる。

「2、4。少し状況が悪い。援護に来られるか？」

「今何とかします！ 待つてて下さい」

「了解」

ガンドッグーはロックアラートが鳴り響くロックピットの中で一度深呼吸をして敵の攻撃に再度集中したようだ。

次で決まるか？と私にも緊張が走る。

3方向からの斬撃を浮遊装甲で防いだが、これは候補生達の予定通り。

そのまま防いでいる装甲を横に弾き飛ばし、残っている3枚の装甲にそれぞれがもう一度攻撃をしかける。

「ちっ、まずいな」

ガンドッグーは浮遊装甲のコントロールを捨てて高度を一気に落とした。

装甲をはじかれた時に狙撃が来る事を予測し、ガンドッグーの舞は回避する事ができたようだ。

「さすがに警戒されていますね。でも、丸裸な状態でいつまで逃げ切れますか？」

1発2発と何発もの狙撃をかわしながら、ゆっくりと落下している浮遊装甲の近くに飛び、コントロールを復活させるつもりでいるようだが、前衛がコントロール距離に近づくとショットガンを放ち、何とか体勢を立て直さないように牽制する。

「しぶとい。しぶと過ぎるわ。どんな腕してるのよ……」

呆れるようにソードーが呟いている。

「ほんとよね。足さえ止まれば当てられるんだけど。なんのあれ

？ 動き過ぎよ」

先ほどから何発もの攻撃をブーストの出力を調整しながら自由自在に上下左右に動き回り、攻撃を避けられているクロスボウーも困惑していた。

既にお互いの姿を見せ合っている状態の戦闘に関して、指揮官がしてやれることは少ない。

有利な状況は作れるが、そこから先は個人とチームの能力が決め手となる。元パイロットとしては非常にもどかしい。彼らはこの状況を開拓する能力があるだろうか。

「ちょっと賭けをやるか。わしがの借りを返すぞ。そんでもって、おごりは無しだ。」

ソード2が何やら思いついたようだ。

「何するつもりよ?」「

「敵の浮遊装甲をハックしてぶつけるからその隙を狙い撃て」
ランス2がその提案に割ってはいる。

「おい、その機体でハックキング出来たか?」

ランス2が言つた通り、今回機体に電子戦用の装備はついていない。

一体何を考えているのか私にも予想がつかない。

「だから分の悪い賭けなんだよ。ってことで頼むわ」

「何だがわかんないけど、その賭け乗つたわ」

ソード3はガンドッグ1が浮遊装甲近くに行けるよつわざと射撃を外した。浮遊装甲がコントロール距離間近になつた時、ソード2が急接近し、浮遊装甲を左手で掴み装甲に沿つようにブレードを持った右手を添え、ブーストの出力を上げた。

「浮遊装甲は返すぜ! ただし、ブレードのオマケ付きだ!」

「それハツキングじゃねえ!」

ランス2が大声でつっこみを入れた。

面白いことを考へる奴だよ。私にはまったく思いつかなかつた戦法だ。

吸い寄せられるような形でガンドッグ1にソード2が突撃する。

「面白い!」

ソード2の突撃に対し、ダガーによるカウンターを入れるため、ガンドッグ1が一瞬止まつた。

「あら残念。ご飯楽しみだつたんだけど、これでチャラかしらね?」
一瞬の隙をクロスボウ1がつき、狙撃がガンドッグ1の背部に直撃した。

ガンドッグ1が舌打ちをする。

「本命はそちらだったか。なるほど、良いチームワークだ。だが、タダで落とされてはやらん

右肩をソード2の突きに直ら当てに行き、左手に持っていたダガーを落として左足で蹴り上げた。蹴飛ばされたダガーがソード2の右足に命中する。

同時にソード2の粒子ブレードがコアに届き狙撃とブレードのダメージによる「ア損傷の擊墜判定が下された。

「やれやれ最後のを脚部を使ってコアを防ぐとは。思った以上に反射神経が良いじゃないか」

大きなため息を一つつき、味方に連絡を入れる。

「こちらガンドッグ1。すまんな。落とされた」

近距離戦闘に持ち込んでも、なかなか突破出来ないでいた最中に、隊長機から落とされた報告を入れられて2人は衝撃を受けた。

「すみません。こちらが手間取ったばかりに」

「隊長落とされたってマジっすか？！」

「マジだから困る。2も今は気にするな敵に集中しろ」

ガンドッグ1を失つて現在の戦力差は2対9。

圧倒的に候補生達が有利な状況になつた。だが、ここで油断してはならない。

少しの気のゆるみが実戦では死につながる。

「ビックハットからアームズ全機。残敵は2だが、決して油断するな。こちらからターゲットマークを出す。集中して撃破しろ」橋にターゲットマークをガンドッグ2につけるよう指示し、全機に送つて貰う。

「みなさんにターゲットマークを転送しました。確認してください」

全機の攻撃がガンドッグ2に集中し、接近戦をしかけられているアグクス2機から引き離した。

代わりに候補生のファイター三機が近接攻撃をしかける。

「私に攻撃を集中させますか。まずいですね……何か手は」
ガンドック2が粒子シールドを全方面に最大出力で展開し射撃を防ぎながら手を考える。

射撃を防げてはいるが、足を止めてしまつてはいるので、チャンスと
思ったソード2がブレードを構えて突撃していく。

「やはり、突っ込んで来ますか」

ダガーを右手に構えて袈裟切りを受け止める。

粒子シールドは銃撃戦には強いが格闘武器にそこまで強くないのだ。
あくまで、粒子によつて運動エネルギーの置換をしているだけなの
で、力が加えられ続けたり、粒子が放出され続けるような攻撃は防
ぎきれない。

その短所をよく理解してのダガーによる防御だ。

ただ、1機は防げたものの続く2機は防ぐ手段が無い。

それを見越してソード3が切りかかる。

「トドメは任せてよ」

しかし、ブレードが当たる直前にソード3がガンドック4に体当た
りをもらい押し戻された。

「よう、無事か？」

「おかげさまで何とか」

ガンドック2は返答をしながら、つばぜり合いをしていくソード2
に蹴りを入れ吹き飛ばし銃撃で距離を離せり、ガンドック小隊の2
機が背中合わせで候補生と向き合つ。

「そう思うなら今度から俺の扱いを良くしてくれよ?」

「あなたがここにいる敵全機を落としたら考へてあげます」

「お前それ微塵も改善させるつもり無いだろ?……」

両者ともに鼻でふつと笑い合い操縦桿を握りなおした。

「私が半分以上落とすのでね。残念ながらあなたは私以下ですよ」

「ハツ! 言つてくれるぜ。俺に負けて悔しがるが良いさ!」

言つと同時に2人が散開する。

友というよりライバルなのだろう。そういう仲の良さも張り合つが
あって楽しそうだ。

緊張感や絶望感を紛らわせる良いコミュニケーションになる。

どうやら隊長機が落とされた精神ダメージからは回復しているよう

だ。だが、ここで分散するとは失策以外の何でもない。

候補生が再度包囲と近接攻撃をしかける。

「今度こそ落とすよ！」

ソード3が最初にガンドック2に横切りをしかける。

ガンドック2はバックブーストでそれを回避し、振り向きながら左手のレールライフルを後ろから来たソード2にぶつけ、上からのランス2の斬撃をダガーで防いだ。

「つ！ ライフルは鈍器かよ！？」

面食らいながらも体勢を立て直し、避けられたソード3と共に再度切りかかるために接近する。

ガンドック2はこれに対し、高度を一気に下げることで相打ちを狙うが、3機とも反撃に備えながら接近していたので、反応して射撃による追撃を入れることが出来た。

3機からのショットガンとアサルトライフルによる銃撃が連續で近距離から当たり、「ア損傷による撃墜判定が下された。

「やれやれ、私もまだまだでしたか。4良いとこ見せてくださいよ？」

「あー……何だ？ わりとマジに言つが、これ詰んでないか？」

戦力差を考えれば普通勝てる見込みが無い状況だ。

援軍が期待出来ない中での1対9で勝てたら教科書に載せられる。

「主人公なら主人公補正で何とかなりますよ？」

ガンドック2が悪戯っぽく笑いながら言つと。

「俺この戦いが終わつたら告白するんだ。花束も用意してあるんだよ」

「それ、死亡フラグですよ」

ため息をつきながらガンドック2がつつこみをいれる。

「頑張つてくださいよ。ひっくり返したらほめてあげます」

ガンドック2は通信を切つて、もう一つ溜め息をついて観戦モードに入る。

「みなさん敵は残り一機です。油断せず攻撃してください」

橋の通信が入り、残ったガンドッグ4を9機で包囲し、一斉射撃を続ける。

ガンドッグ4は防御と回避が間に合わず、被弾が増えていった。機体に搭載されているAIが警告を発する。

「げ、サブブースター被弾で出力ダウンドって！？ 勘弁しろっての！」

動きが鈍り、更に攻撃が畳みかけられた。

「あー、くそつ！ やられた！」

反撃はしたが、撃破には至らずガンドッグ4は撃墜判定が下された。これで、戦闘は終了だ。

「橋。アームズ、ガンドッグ全機に訓練終了の連絡を入れてくれ」「了解。訓練参加の全機へ。訓練終了です。繰り返します。訓練終了です。基地に帰還してください」

撃墜判定が下され待機していた機体も含めて全機が返答を返した。

「「了解」」

第六章「警備打ち合せ」

第六章「警備打ち合せ」

基地に全機が帰還し、評定を下すためにブリーフィングルームに集合してもらつた。

「皆揃つたようだな。訓練、」苦労だつた。双方ともに良く動いていたが、今回の結果に満足せず、次はより高みを目指せ」

「「イエッサー！」」

さて、まずはガンドッグの方から総括しよう。

「さて、気付いていとは思うが今回は色々とハンデをつけでもらつた。どのようなハンデだったかガンドッグー分かるか？」

ガンドッグーが期待通りの答えを返す。

「はっ！　まず一つに数です。次にジャミングによるレーダー障害とバックアップが無かつたこと。最後に恐らくですが、作戦指揮がとられていたことです」

「よく三つ目が分かつたな」

これは戦闘中に相手の動きを見ていなければ分からぬ要素のはずだ。しつかり見抜けていたかと感心する。

「指揮官がいない状態で、戦闘に参加している人数が多くなればなるほど統率は乱れやすくなります。しかし、統率がとれた動きでこちらを追いかけてきたので、恐らく指揮官がいると考えました」

「なるほど。部隊長として良く観察しているな。だが、ハンデはもう一つあるぞ」

そう通常の作戦行動ではまず起こりえないハンデがある。

「何でしうか？」

「君達の作戦も通信も全て候補生側に漏れていたのだ。指揮官にとって部隊を下げるタイミングと攻めるタイミングが見極めやすい状態になつていた」

ガンドッグ一同がなるほど。と頷いた。

ガンドッグ1が続けて疑問の解消を進めようとする。

「では今回の作戦指揮をとつたのはどなたでしょうか？」

知つたら文句の一つでも言われそうだな。と心の中で苦笑いをしながら答える。

「今回の指揮官は私だ」

「大佐？！ つてそれ簡抜けどこりの話じゃないですよ！ 」 しつちの作戦出したの大佐ですよ！？」

ガンドッグ4が驚きのあまり大声でつっこみを入れるがガンドッグ1が制止する。

「落ち着け。しかし、大佐が指揮官なら納得です。となると前半の陽動も大佐の作戦ですか？」

通信を聞いていたので、彼等が陽動に気づいていたことを知つてゐるし、警戒していたことも知つてている。

もし、正しい対応をとられていたら候補生が負けていただろう。

「その通りだ。君達の分断と不意打ちは私が提案した作戦だ。陽動だとは君達も気付いていたようだがな」

「なるほど。見事な采配でした。正しい対処が選べなかつた我々もまだまだ未熟ですね」

ちらつとガンドッグ4を見ると拗ねたような顔をしていて、他のメンバーも少し悔しそうな顔をしていた。少しふオローを入れておいてやろう。さすがにハンデ有りとは言えルーキーに破られたのはシヨックだろう。

「単騎の能力なら君達の方が上なんだがな。複数相手は苦戦しただらう？」

「そうですね。なかなかの腕でした。将来が楽しみです。」

ガンドッグ1から評価されたといふとはボーナスも出して良さそうだ。

「では、訓練の録画データを各員の端末に送信しておく。レポートを今日中にまとめてこちらに送るように」

「「了解」

次に候補生の総括だ。

「候補生諸君良くやつてくれた。先程の話にもあつたが、君達は圧倒的に有利な状況で戦つた。今回の結果で浮かれず、対等もしくは劣勢な状況でも勝てるように、いつそ訓練に励んで欲しい」

「「イエッサー！」」

そして次にブリーフィング時に言つたボーナスについて伝えなければならない。

「さて、ジャマー施設防衛ボーナスに関してだが」「わざと言葉を切ると皆そわそわし出した。やっぱ気になるんだな。候補生がこちらに熱い視線を送つてきている。

「君たちの今回の戦績を加味し、正規パイロットの内定を出そう」候補生達は一瞬ポカんとし、数秒後に状況を理解したのかガツツボーズをとつたり抱き合つたりし出した。

「あー、諸君静かに。続きがある」

とりあえず、彼等を落ち着かせる。

そして、ざわめきが收まりじつとじめを見つめている。

「ただしだ。正式配属までに訓練をおこなり成績を下げた瞬間に内定を取り下げる。分かったか！」

「「イエッサー！」」

結局のところ正規課程は全て受けて貰うが、実技審査はこれで実質パスだ。

残り一ヶ月も候補生として訓練に頑張つて貰う。

しかし、内定が決まつてゐるからといって、これから手を抜いて腕を落とすような奴なら、そんものは戦場に出せない。

「では候補生諸君も今回の訓練について、レポートを今日中に提出したまえ。田口軍曹後は任せたぞ。では解散！」

全員が敬礼をし、ブリーフィングルームから退出していった。

これで午前の主な仕事が片付いた。

時計を見ると11時近くになつてゐたので、一度リフレッシュルーム

ムに行つて少し休憩をとらうと考へたが、第三世代マップスの申請書が送られてくることを思い出し、携帯端末からメールをチェックした。

なんと既にオヤジさんから送信されていた。ただありがたいことに、既にある程度申請書が埋められている状態だった。

「そこまで量が無さそうだし今のうちにやつておくか」

後々書類の山に埋もれるのは変わらないだろうが、山は小さい方が楽なのでやれるうちにやつておきたいとは思つ。

ただそれでも……。

周囲を見渡し周りに誰もいないことを確認して溜め息をついたら、つい口に出してしまつた。

「やはり面倒くさい……」

携帯端末をしまい佐官用の個室に戻り申請書をの空欄を埋めていく。最初は面倒だと思っていたが、記載されていた第三世代のスペックが思つた以上にハイスペックで実物を見るのが楽しみになり、やる気が多少湧いてきた。

第二世代になつた時も驚いた物だが、今度のはまたすゞかった。

パイロットとして乗れないのが少し残念だ。

ちなみに海外の同盟国マップスマーカーは第一世代型の基礎フレームを菱田重工から輸入し、それぞれの国に合わせたカスタマイズを行つている。

独自にフレームを作りとする動きもあるようだが、菱田重工のフレームに劣つていたり既存パーツとの互換性の問題やコストの問題で実用化されてない。

一方で、輸出が禁じられている敵対国でも近年マップスが生産されているが、設計はろ獲した機体からの「テッドコピー」で、基本的に第二世代型と同じようなフレーム構造となつている。

将来どうなるかは分からぬが、現在はそのような状況なので、基礎フレームの開発が出来るのは菱田重工だけなのだ。

その菱田重工の最新機を模擬戦による性能試験とデータ収集のため

だけとは言え、どこよりも早く使えるのはここだけなのだ。
楽しみにならない訳がない。

20分程で一次申請の書類を完成させ本部に送信する。

更に開発者である菱田重工技術顧問の松平にもメールを送信してお
く。

第三世代フレームの視察日についてと詳細を開発者から聞いたか
つたのだ。

メールを送信して時計を確認する。

「昼休憩まで後30分か。時間まで、午後の会議資料を見直してお
くか」
机の隅に置いてある国境資源会議の警備資料を手にとりめぐつてい
く。

場所は首都ニアヤートの国際会議場。

時間は1000から1500までの予定。

会場と都市圏は警察が担当し、郊外30km地点を軍が警備。
軍で警備にあたるのは首都から一番近い位置にあるオーカシス陸軍
基地の部隊。

国境近くの基地はレトリア連邦警戒のために部隊を展開しながら待
機。

南方の空軍と海軍は緊急出動が出来るように待機しつつ、数部隊そ
れぞれから派遣するように通達が来ていた。
ある程度派遣する部隊数は決まっているが、今日の会議で最終決定
する予定となっている。

そして次に書かれている一文が、わざわざ警察だけでなく軍まで警
備に回している原因なのだろう。

「テロリストによる破壊工作の可能性あり」

毎度毎度のことなのだが、FTT技術の普及とともに様々な既得権
益を破壊してきた。

その過程で、レトリア連邦の資源所有権主張もその一つになるのだが、主に化石燃料を輸出していった旧資源輸出国で、反ヤボネ团体や

反FTE団体が生まれ、紛争やテロ行為が幾度か行われてきた。

おかげでこういった国際会議の場で気が抜けたためしがない。

そのままページをめくつていき続きを見ていたら、突然携帯端末の

着信音がなった。

番号と名前を見ると菱田重工の松平からだった。

警備資料を置き電話に出る。

「もっさん久しぶり！」

やたら元気の良い声だ。

自分より年上の33才で、菱田重工マップス部門技術顧問でマップスの機体から武器まで様々な分野で開発をしている変態技術者だ。

「元気そうだな松平。どうした突然？」

確かにメールは出したが電話で来るとは何かあったかと思ったが。

「もっさんが新しい子の紹介してつて言つから電話の方が早いかなつて」

そういうことか。メールの方が見返せてありがたいのだが、また送つて貰うことにしてよい。

ちなみに彼は自分が開発に関わったマップスの事を人扱いしている。「そうか。ならいくつか聞くが、カタログスペックを見たところ大

分第一世代型から大きく変化しているな。互換性はあるのか？」

「一応あるけど、ほとんど意味が無いよ。彼女の全力が見たいなら彼女用にカスタマイズされた第三世代用のパーツと服じゃないと。ライフルとかのアクセサリーに関しては互換性が余裕であるけどね」さらに言うと女の子扱いで各種装甲は衣装。武装や各種パーツはアクセサリー扱いで、これが変態扱いされる原因だ。

「後この予定されている各種追加装備の超高速強襲装備ってなんだ？」

「それはすごいよー。新しい子専用の新衣装！ 最速のおてんば娘つて感じ！」

説明をしたくてたまらないと言つているような声だ。少し長くなることを覚悟する。

「どうしたことだ？」

かいつまんで説明すると背部に大型の追加ブースター・ユニットを取り付けて超高速で移動できるものらしい。

しかも、オプションで武器コンテナ・ミサイルポッド・ロケットランチャー・爆撃コンテナ等が追加出来るようになつており、超高速で接近し最大火力で敵施設を制圧する運用が出来るとのことだ。また攻撃性能だけではなく、高速移動中の防御性能も向上させており、補助アームを使用してのシールド操作により高速移動中でも浮遊装甲の操作が可能となつている。

正直相手にしたくない。

「で、こいつに弱点はあるのか？」

「近距離戦は苦手だね。さすがに機動性まで確保は難しかったよ。脱げば良いんだけど、ちゃんと回収しないと大変でしょ？だから基本的に脱げないんじゃないかな」

生産コストを考えると確かに簡単にページ出来るものではない。それに敵に新装備をろ獲されるとまずい。

なるほど、確かに近距離が弱点だ。

「これ戦闘中に付け外しを自由に出来ないか？」

「やっぱそれ聞くよね。只今研究中の課題で、まつ、そのうち出来るようになるよ。ちなみに簡易版の追加ブースターだけならアクセサリーとして第一世代型でも使えるから良かつたら使ってね」仕事が増えるが戦闘において足の速さは最重要の要素だ。

採用する価値は十分にある。

そして何かを思い出したように松平があつと声をあげた。

「後そうだ。ずっと前にもつさんの所で試験してもらつたダガーとブレードのオプションパーツのことなんだけど、無事申請が通つたみたいで発注が来たよ。初回生産分は北の国境行きだけど、来月末の会議前には余裕で君達の所にも行くはずだよ」

「ほお、あれはうちの連中からも評判が良かつたからな。楽しみに待つていよう」

良くダガーやブレードは投げたり弾かれたりして手から離れるので、回収用のワイヤーを付ける試験をしたのだ。

武器ではないので簡単に申請が通つたから良かつた。

「あれはなかなか良いアクセサリーだよね。ポイ捨てなんてはしないことを、うちの子にはしてほしくないからね。まつ、今はそれよりもっと凄いもの作つてることで試験用のと一緒に送るからまた頼むよ」

これでまた仕事が一つ追加。思わず頭をかいてしまった。この話で性能試験をしたライフルをふと思い出したので、ついでに聞くことにした。

「それは楽しみだが、あのライフルについて良いのかも分からんあれはどうなつた?」

「ふふふ、勿論データを貰つてから更にすゝくなつて完成してゐよ。そろそろ採用の通知が来るかな? 今度おまけで正式版を一緒に搬入させるよ」

自信満々の声でライフルの出来を保証している。あの化け物ライフルが正式採用されるのか。送つてもらえるのは確かに助かるが、一体どう使えば良いんだ? あのロマン武器……。

その後も新装備や新機体の情報をもらい長いこと話をしてしまつた。

そろそろ食事に行つてくると松平が話を終えようとした時に氣になることを言つて残した。

「そういうえば技術者仲間から聞いたことなんだけど、どうかで最近大型のFT-E兵器が出来たとかなんとか。まあ、うちの子たちが負けるとは思わないけどね。んじゃまた」

「ああ、またな。メール頼む」

時計を見ると12時半を過ぎていた。

こちらも昼食を取りに食堂に向かおつ。多分、賭けの結果が公開されて賑わつてゐるのも終わる頃だらう。と思つたが、食堂につくとまだ混雑していた。

モニターの前では賭けの配当金が配られていたが、そろそろ行き渡つたためかその周辺に人は少なかつた。

食堂の所々から賭けについての議論が聞こえる。

レーダーが死んでいる状態での待ち伏せの対処などを議論しあつているようで、今回もこの賭が良い教材になつたようだ。

カウンターまで行くと食堂のおばちゃんに声をかけられた。

「お、もっちゃん来たねー。今日の話題は全部あんたがかつちりつててるよ。で、今日は何にする?」

おばちゃんに階級は関係無いのだ。

特別扱いされるのは基地内では珍しいので悪くない。
何にしようかとメニューを見ていたら、金曜日のカレーフュアをやつていた。

「そうだな。カレー辛口とミネストローネのセットを頃こいつ

「はいよー。ちょっと待つてね」

盆にカレーとスープそしてサラダが置かれ手渡された。
香辛料の香りが鼻腔をくすぐり、スープの鮮やかさも食欲をそそる。
サラダにドレッシングをかけて空いていた席を探すと、田口軍曹の隣がたまたま空いていたので隣を失礼することにした。

「田口軍曹、隣は空いているかな?」

声をかけると田口軍曹が体ごとすじこへ勢いでこちらに振り向いてきた。

「大佐殿?! もちろん空いております」

お盆を置き席につく。

「しかし、佐官がこのよつた所でお食事とは。自室の方が快適ではないのですか?」

「ほひう賑やかな場所は昔を思い出して好きなのだよ。いただきます」

手を合わせてから食事を始める。

「大佐殿がそうおひしゃるなら、ただ佐官としてやはつこにいるのは少しふさわしく無い気がしますよ」

相変わらず眞面目な男だ。

それにも今日の食事も美味い。

甘さ酸味塩味が良いバランスで成り立つており、そこに溶け込んだ具材の味がより深みを持たしている。

そして鼻に抜ける香辛料の香りと舌への刺激が次の一口を勧める。一緒にってきたミニストローネも野菜の甘みがよく溶け込んでおり、辛口のカレーと實に相性が良い。

うん、今日も食事が美味しい。

食事は士氣を維持する上で最重視される一つの要素だ。

不味い食事はそれだけで士気が削がれる。美味しい食事はそれだけで心が踊る。栄養価の方も不足しがちな野菜類を細かく砕き料理に混ぜ込んでいるので、身体にも良い。

おばちゃんの旦那であるシェフの腕には感謝してもしたたりないくらいだ。

舌鼓をうつていると田口軍曹から模擬戦について話題を振られた。

「今日の模擬戦さすがでした。おかげで儲かりましたよ」

ハンデありとは言え、正規組に勝てたのは私の力ではなく、軍曹の訓練のおかげである。指導の礼を伝えねばなるまい。

「いや、私は何もしていないよ。君が候補生達を鍛え上げてくれたおかげだ。ありがとう」「うう」

軍曹は椅子から立ち上がり深々と頭を下げた。

「光榮です。残り一ヶ月で更なる力をつけられるよう鍛え上げてみせます」食事時くらい気楽にしていて欲しいと苦笑して、座るよう促して話を続ける。

「他の基地に配属になるやつも多いだろうが、残って貰いたい候補が何人かいるな」

候補生から無事正規パイロットになれば各基地に異動する。

その中で何人かはこのまま残るのだが、ある程度こちらの希望が通るらしい。

ガンドックの3から5のメンバーはそれでこの基地に残せた。

「今日の訓練だとクロスボウの武田ですか?」

さすが指導しているだけあってよく分かっている。

「正解だ。あの狙撃の腕はなかなか良い。それにソード2の伊東。

ブレードの戦術は面白かった」

今日の模擬戦の戦いつぶりを思い出しながら伝える。

「確かに。ですが、今日の模擬戦に参加していない者も良い腕を持つています。決定にはいさか早計かと。」

そもそもそうかと思い、他の候補生の話を詳しく聞きながら昼食を食べた。

話を聞いていると、どうやら候補生50人の特性を全て把握しているらしい。

本当に教官が向いている男である。これは現役パイロットを引退させて教官職につかせるべきなのではないかと真剣に悩んでしまつ。

今度の候補生が卒業するころにでも意向を聞いてみよう。

食事を済ませて個室に戻り、会議の最終準備に入る。

資料をまとめてファイルに詰め、ノートパソコンとお茶の入ったペットボトルを会議室に持つて行く。

書記の係りが、モニターを起動し、こちらのカメラも起動させる。時間の2時になると一斉に参加者の顔が映つた。

警察・陸軍・海軍・空軍のトップに警備に参加する基地のトップが揃い踏みだ。

特例で大佐に昇進した身にとつてはここにいるのが何度やつても場違いであるように感じる。

丸顔に無数のしわが刻まれた顔の人警視庁長官で、今回の打合せの議長を務めている。彼の低く重い威厳のある声により打ち合わせが始まる。

「諸君全員揃つたようだね。では今から国境資源会議の警備打ち合わせを始める」

手元のモニターに首都の地図が表示された。

碁盤目上に区画が整理されている都市でその中央付近に国際会議場がある。

「事前に配付した資料通りの編成で警備にある。国際会議場付近は我々警察の特殊機甲部隊が警備にある。警察仕様にカスタマイズされたマップスを東西南北500mに2機ずつ、会議場正面に3機、背面に3機、左右側面に3機ずつ。計20機を配置する。また場内にもテロ対策部隊を50名配置する。これで会議場付近は万全でしょう。また市内には検問所や私服警官を配置し、不振人物を発見し次第確認していく。市内の方はこのような形で依存無いかな？」

警察庁長官が確認を要請する。

とりあえず、今まで通りの布陣で文句のつけようがない。
他の参加者も頷いている。

「では次に郊外の警備について頼む」

オーカシス陸軍基地の徳川大佐が説明のバトンを受け取った。
白髪混じりのグレー ヘアでほりが深いダンディーな方だ。年齢は確か50前後だったはず。

「郊外警備は首都から東西南北に四つの拠点を用意する。それぞれの拠点にマップスを20機ずつ。計80機を配備する予定だ。これで首都に接近する車両や航空機の監視を行う」

モニターに映る地図の倍率が下がり、より広い範囲が映し出され、
拠点に赤いマークが打つてある。

これも前回と基本的に同じ配置となっている。

「基本防衛網はこのようになつていて。今回もこれに加えて遊撃部隊としてキーナ空軍基地の部隊、そしてカシゴマ海軍基地の部隊を10機ずつ応援に出して貰いたい」

マップス10機で確定か。

南側から攻められても何とかなる数字だと思う。

「了解した。ところで応援で派遣される部隊の配置はどうなつている？」

事前の資料には無かつたので確認をとる。下手すれば戦場になるの

だ。

自分の部下がどういう扱いを受けるのかを知らなくてはならない。
徳川大佐がこちらの質問に答える。

「空軍と海軍には首都の上空を巡回してもらいつ预定だ。我々が敵を見逃したときのために準備してもらいたい。巡回範囲を地図に出す手元の地図が拡大されて赤い枠が現れる。

「これが君達の警備範囲だ。高度についても続けて説明しよう。
都市の形が立体的になり、視点が上から見下ろす俯瞰図から、横から見た図に変わった。

「空軍には都市上空5kmの警備を、海軍には都市上空2kmの警備を頼みたい」

なるほど、首都の地上は警察、郊外は陸軍の大部隊、低空は海軍、雲の上からは空軍か。これなら敵の侵入はどこでキヤッチ出来るだろう。それにこの高度なら見通しが効くので、奇襲は受け難いはずだ。

派遣しても一瞬で全滅は無いだろう。

「了解した。では要求通りこちらからマップス10機編成の一個中隊を派遣する」

続けて海軍の方も派遣を決定する。

「感謝する。空軍の方に追加注文があるのだがよろしいかな？」

大体予想がついた。おそらく広域レーダーを積んだ偵察機のAWACSを出せと言つことだろう。

「AWACSを追加で派遣してもらいたい。地上にも防空レーダーを設置する予定だが、念には念を入れておきたいのだよ」

やはりか。ただ、至極真っ当な提案だ。乗らないわけにはいかない。

「分かりました。ではAWACSも同時に派遣します」

これが終わつたら偵察部隊にも通達しておかないと。
ノートパソコンにメモを今のメモしていく。

「助かるよ。他に何か聞きたいことや提案は無いかな？」

応援が取り付けられたことに安堵して、少し顔が緩んだ徳川大佐が

上機嫌で質問を促した。

海軍の毛利大佐が組んでいた手を解いて、右手を軽く挙げる。

眉間に深いシワがいくつも刻まれた眼光鋭い人だ。まるで老狐のようである。

「派遣した部隊の指揮は誰がとるのかな？」

大事な自分の部下たちだ。出来れば自ら指揮を取りたいのだろうかと思案していると、徳川大佐がにっこり笑顔になつた。

「安心して貰いたい。警察、陸海空軍はそれぞれ独立で指揮してもらう。その代わり指揮官の間は通信をつなげて連携する」

毛利大佐がふむ。と頷きながら腕を組み直してその意図を確かめる。

「指揮系統を一つにまとめた方が楽ではないか？」

徳川大佐は笑顔を崩さぬまま答える。

「確かにそうかもしれないが、いかんせん私はこの広く展開している部隊の指揮で手一杯でな。それに所属は君達の部隊だ。直属の上官が指揮した方が動かしやすいだろ？」

「ふむ、了解した」

どうやら毛利大佐は回答に納得したようだ。

「どうやから毛利大佐は回答に納得したようだ。
というか、これってへまをしたら責任を負わせるための口実じゃないよな？」

陸上は陸軍が大部隊を展開するので、数の暴力で多分抑えられる。海軍の警備は低空なのだが低空侵入は陸軍の防空網に確實にひつかかる。

つまり上空からの侵入があれば丸々空軍の、そして私の責任となる。そうなれば色々と喜びそうな連中がいるのだが。いや、ただの考え過ぎか。

それにそれを防ぐためにAWACSの派遣を要求されている。

恐らくこの件に関しては味方も敵もない。

邪推を捨てて、一口お茶を飲んでから、今のやりとりで生まれた疑問を聞いてみる。

「今の話に関連して、質問よろしいですか？」

徳川大佐がこちらに手のひらを向けた。

「どうぞ」

「指揮官の所在はどこになるのでしょうか？」
派遣した中隊の指揮をとるために私も首都に向かう必要があるのかどうかを確認したかったのだ。

「所属基地から指揮をとつてもらひ。この説明は陸軍大将からして頂きたい」

陸軍大将が咳払いをして声を出す。

「理由は簡単だ。毎回の『ごとくレトリア』が軍を展開する可能性がある。その中で北の防衛だけに気を捕らわれていると、南や東西からの侵攻を防げない。そのため、諸君の基地でも地域の警戒に当たつて貰うため、基地からの指揮をしてもらひ」

なるほど。これは最悪二方面指揮をする必要があるのか。
願わくは何も起きないことだ。

「了解しました。では、最悪の事態として首都と所属地域の二方面指揮を想定して用意すれば、よろしいでしょうか？」

陸軍大将が大きく頷いた。

「つむ、それで良い。国外からの侵攻があれば軍本部から指令が下る。いつでも動けるように用意しておきたまえ」

海軍大将と空軍大将も同調して頷く。やはりトップとの会議は緊張する。

なんだこの緊張感は？

私は一昨年まで中尉だった人間で、この場に参加している者から見ればひよっこも同然だ。

モニター越しのはずなのに、不思議な圧力を感じてしまう。
質問で話しかける時にこちらの緊張や焦りを表面に出さないだけで精一杯だ。

不思議な喉の渴きを感じてもう一度ペットボトルに口をつけ、お茶を飲む。

徳川大佐は話が終わつたと判断し、次の質問を促すが、誰からも質

問は出なかつた。

「よろしいようだね」

議長の警察庁長官が話を区切る。

「では、次に当日の両首脳の動きについてだが、このようになつて
いる」

首相は公用車で首相官邸から国際会議場へ。レトリア大統領は空港
から公用車で国際会議場に向かつルートが矢印となつて地図上に表
示される。

基本的に大通りを通る最短ルートだ。

「両首相の護衛は我々警察のみで行う。公用車と併走しながらパト
カーを走らせる予定だ。また移動する時間帯はこの移動ルート近く
の道路を全て封鎖することになつていて」

日曜日だから良いものの、平日でやつたら一般市民は大混乱だらう
な。

会社への遅刻が普段の何倍になるのだろう?
きっと地下鉄乗車率と一緒にレコード記録になる。

ちょっとその光景を想像して顔に出さないように苦笑いをしていた
ら、海軍大将が何故マップスを配置しないのかと問い合わせた。

「政治的に色々あるのだよ。大統領に銃をつきつけながら連行して
いる。けしからん! と見る輩もいるそうでね。政治家は火種を下
手に増やしたくないそうだよ。外交的には悪くない判断とは思わな
いかね?」

過激派の刺激は出来るだけしたくないってことか?

確かに今の大統領は会議に参加して話し合いで解決しようとする穩
健派と言えば穩健派の人間だ。

過激派にとって、そんな穩健派の人間を銃で脅している国は蛮族國
家である。即刻打倒すべし。と捉えられてしまうかも知れない。
だが、彼がいなくなれば過激派が押さえられなくなる。

それを考慮すると、過激派に襲われる可能性がある人なのだから、
軍隊のマップスによる護衛が必要だと思ったのだが、政治的な言い

がかりを考えると納得がいった。

そうか、それで警察の護衛で、パトカーなのか。これなら過激派も言いがかりが出来ず、襲われても最低限の対処が出来るという作戦だろう。我が国の首相の方にもマップスが配置されないのは、威嚇だと過激派にとらわれないようにするためだろうか。

海軍大将もすんなり納得したようだ。

「なるほど。最低限で最大限の護衛……といふことですか。そちらも苦労しますな」

どうやら私の考察はあつていたようだ。

「お互いまですよ。万が一の際は是非お力をお借りしたい」

私以外の参加者が皆笑い合っている。

今まで全員が同じような経験をして、あるあるネタが通じたのを楽しんでいるようだ。

「お偉い様方はいつも無茶をおつしゃる」

「なに、それでもやりとげるのが我々の仕事だ。それを誇りに思おうじゃないか」

私にはとても笑える状況じゃないと思いつのだが、愛想笑いでこの雰囲気を乗り切ることにしよう。

これが年期と経験の差というやつなのだろうか。

「話がそれてしまつたな。本題に戻すとしよう

警察庁長官が咳払いをして、脱線した流れを元に戻した。

皆の切り替えもとても早く、あつという間にぴりつとした空気に戻つた。

「移動に関しては先ほどの通りだ。そして考えられる最も狙われやすいタイミングとして、会議後の記者会見が考えられる。わざわざ国際会議場の広場にステージを作つて、大勢の記者の前で話すのでは。入場整理をかけているとは言え、どうしても紛れ込まれやすい。これに対しては私服警官の大量動員と壇上のS.Pに任せることしかあるまい」

郊外に展開される陸軍にはどうすることも出来ないし、上空を旋回

していいる海軍にも空軍にも、群衆の中からテロリストを捕捉することは難しい。

確かに人間による奇襲であれば記者会見のタイミングがベストである。

まったくひどい無茶をしてくれるものである。

「これに関して軍の方からは何も出来ませぬな」

眼鏡をかけた少しやせ気味な初老の空軍大将が確認をとる。

「残念ながらそうですね」

特に何もすることが出来ないので、警察庁長官が次の議題に進める。

「そして次に帰路の護衛だ」

モニターの地図を見ると行きと同じように矢印が描かれている。両首脳の帰りの経路は行きと同じルートのようだ。

「基本的に行きと同じルートを通つてお帰りいただく」とになつて「基本的に行きと同じルートを通つてお帰りいただくなつて」となると帰りも緊急時以外では、軍の方で何か特別な事はないか。

「今までのは、平和にことが進んだ場合のルートになる」

失礼と。断りを入れて、警察庁長官はコップに入った水を飲み、喉に潤いを与えて再度説明を始めた。

「襲撃があつた場合の避難経路についてだが、地図で説明しよう」
地図の上に8つのポイントに赤い点がうたれた。

「基本的に、襲撃犯とは反対方向の待避ポイントに裏道を使いながら避難してもらつつもりだ」

特にこのポイントには頑丈な施設やシェルターといったものは無かつたと記憶しているので質問をした。

「この待避ポイントはどういう施設でしょうか?」

警察庁長官が不思議そうな顔をしていたが、秘書の耳打ちにより納得したようだ。

「どうか、君は今回首都の警備は初めてだつたね。これは緊急事態専用の地下通路だ。他の主要都市に直行するリニア車両が用意されている」

噂には聞いていたが、こんなところにあつたのか。

ということはそのリニアを使って安全なところまで避難すると言つことだな。

念のために確認をとる。

「では、その待避ポイントに到着次第、両首脳はリニアで安全な都市に待避するという認識で正しいでしょうか？」

警察庁長官がその通りだと頷いた。

なるほど。普通の都市地下間にも地下高速鉄道があるのだが、まさか首相専用の緊急経路であるとは恐れ入つた。

「質問はもうよろしいかな？ 話を戻すぞ。両首脳が乗っている公用車はもちろんF-T-E粒子制御による防弾仕様だが、さすがに大火力の攻撃を受ければ簡単に破壊される。公用車の位置はGPSで常に把握している。軍の方にも位置情報を常に提供するので、我々と協力して、一機たりとも敵を近づけさせないで欲しい」

なるほど、その時は海軍と空軍の遊軍が援護に入る訳か。徳川大佐が話に続く。

「都市圏で襲撃を受けた場合、陸軍からの援護はどうしても遅れてしまう。君達海軍と空軍が頼みの綱となる。よろしく頼むよ」

私の想定通りか。毛利大佐も分かりきっている様子で腕を組みながら頷いている。寝ているようには見えないので本当に分かつているのだろう。

会議の両首脳の移動について、一通りの説明が終わつたので、質問は無いかと聞きながら、警察庁長官が参加者に確認をとる。すると海軍大将が緊急事態における大事な質問を聞いた。

「市街戦が起きた場合、市民の避難は警察でやつてもらえるのか？」

国際会議場はオフィス街にある。日曜日と言えども人は多少いるし、避難経路の中には商業区など人が集まる場所もある。

確かに戦闘が始まつたら巻き込まれる人が出てもおかしくない。

警察庁長官が非常に重いため息をする。どうやらあまり良い話は聞けそうに無い。

「いつものことながら、避難誘導は潜伏させている私服警官に取り仕切つてもらう予定だ。だが、全ての地区で避難誘導が完了するまで、少なくとも10分はかかるだろう。避難が完了していない区域では出来るだけ攻撃を自重して欲しい」

空軍大将が困った様子で頭をかいている。

「やはり、そうなるか。10分攻撃をせずに注意を引き付けているだけ。というのは毎回言っているが、なかなか骨が折れるぞ？ 最低限の自衛は認めて欲しいものだが」

恐らく、敵部隊の攻撃が建物に当たつたり、こちらの攻撃が市民を巻き込むリスクを考えての判断だろう。

何か手はないかと思案していると、ちょっとした思いつきが生まれた。

お茶を勢いよく飲み気合いを入れる。

「一つ提案があるのですが、よろしいですか？」

参加者が一斉に反応し、「ほう」とか「む？」と漏らしながらに注目する。うつ、緊張する。

「まず、確認になりますが。避難が完了していない区域での戦闘は、流れ弾が市民に当たる危険性があるので自重するのですよね？」

警察庁長官が頷く。

よし、一つ目のハードルはクリア。

「そうなると、敵の射線上に建物を入れさせないように、更に建物に隠れられない。そして、こちらの射線上にも建物が当たらない位置からの攻撃というのはいかがでしょうか？」

警察庁長官が頭をかきながら私の提案の真意を問い合わせた。

「そんな都合の良い場所があるのかね？ 基本的に碁盤目上で見通しの良いところがあるとはいえ、建物の陰には簡単に隠れられるぞ」
その通りだ。街中や低空ではそんな都合のいい場所は無い。
空軍所属でマップスによる戦闘を多く経験した者だから見える位置
がある。

「あります。その都合のいい場所。敵の真上です。高高度からのマ

ップスによる狙撃ならピンポイントで敵のみにダメージを与えられます。戦闘機と違い上空での空中待機が可能なので、安定した狙撃が可能となっています」

警察庁長官は顎に手をあてながら考へる素振りをしながら続けて聞いてきた。

「なるほど。敵が旧兵器の車両タイプならそれで何とかなるだろう。ではマップスだつたらどうする？ 空中戦に持ち込まれたら、やはり流れ弾が市外に落ちるぞ？」

そこがこの提案の最大の問題だ。だが、それでも地上で注意をひきつけるだけより遙かにマシだ。

「その通りです。なので、空中戦に持ち込まれたら、こちらは常に敵の上空に位置するよう動き、こちらからの射撃は止めて近接格闘戦をしかけます。これなら都市部に流れ弾が当たりにくくなります」

警察庁長官はなるほどと頷いた。

どうやら2つめのハードルもクリア。

「それなら確かに注意を引きつけるだけよりは良さそうだ」

警察庁長官は納得したようだが、同じく空の上に配備される海軍の

毛利大佐から質問が来た。

「なるほど。坂本大佐。お若いながらも良い戦術を思いつく。しかし、そうなると我々海軍の低空部隊はどうすれば良い？」

多少気の引ける提案だが、これには乗つてもらわなければならぬ。

「海軍には敵部隊の注意をひきつけて、上空に上がられないようにして頂きたい。それも基本的に防御のみで、です。敵は建物を盾にすることが迷い無く出来るので、低空と地上で海軍と警察の部隊が展開していれば、わざわざ弾が当たりやすくなるような空の上に上がることは無いはずです」

毛利大佐は大笑いしてから、こちらを睨み付けてきた。

「君には冗談のセンスもあるようだ。この私の部隊におどりになれと？」

言葉に怒氣が含まれているようだ。この私の部隊におどりになれて？」

くれと言つてゐるのだ。やつぱりそうなるよな。しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。

「毛利大佐。申し訳ありませんがこれは冗談ではありません。確実に敵を撃破するための戦略です。毛利大佐が擁する精銳の海軍部隊が敵をひきつけて、敵を地面にはりつけられれば、狙撃による敵部隊の撃破が容易となるのです。貴官の部隊が機能すれば、私達空軍側もより力を発揮出来るのです」

相手のプライドをくすぐりながら交渉を推し進める。

「だが、それでも基本防御のみというのは厳しい

やはり簡単に崩れてはくれないか。警察庁長官から待つたをかけられそうだが、譲歩案を出してみる。

「ならば、敵に当たらなくて済む

接近しての格闘攻撃といった都市の被害が少ない戦法を徹底してい

ただけないでしょうか？」

右まゆげをぴくつと動かし、じがいをひりみ続けてくる。

くつ、胃が痛くなつてくるな。

「なる程だ、牽制はどうやせてもいいんだよ。」

先ほどと変わらない怒氣の含まれた低い声だ。

「その通りです。貴官の部隊ならば、その牽制で敵部隊を撃破する
ことも可能だと思います」

毛利大佐が軽く吹き出し、大笑いをし始めた。

あれ？ さっきまで凄い迫力だったはずだ。何が彼を笑わせたのだ

どうか？

不思議そうな顔をしていた私に毛利大佐が真面目な顔をして向き直

二
二
一
た

「いや、すまんすまん、君との問答があまりにも愉快でな、その歳でなかなか弁が立つでは無いか。戦術の方もなかなかのものだ。派遣された数々の実戦で訓練されたのかな？ そして何よりもその度胸！ なるほど、特例とはいえ、その歳で大佐に任命されただけはあるな」

なつ、こちが試されていたつてことが。この老狐なかなかやつてくれる。

思わずポカンとしてしまつたが、これで警察庁長官から許可が出れば、この方法でいけるはずだ。

「いかがでしようか？ 長官殿」

腕を組んでうなり始めた。どうなる？

沈黙が場を包んだ。実際には、ほんの5秒程度だったのだろうが、その数倍に感じられた。自分の部下の生死が左右されるのだ。出来るだけ危険が少ない方が良いに決まっている。

短くて長い沈黙が破られる。

「分かつた。それで行こう。ただし、必ず建物には当ててはならない。それと出来るだけ弾を外して流れ弾を作らないでくれ。こちらも部下を死なせる訳にはいかない」

良かつた。提案が通つた。たまつっていた唾を飲み込む。

徳川大佐が追加の提案をする。

「おそらく避難が終わる頃合いに陸軍が到着するだろう。それまで持たせてくれば、こちらで必ず鎮圧する。あまり無理をしなくては良いからな」

その通りだ。住民の避難が完了するまでの10分。この間の目標は住民が安全な場所に退避するまでの時間稼ぎで、私がした提案は時間稼ぎの方法だ。敵を完全に撃破するための方法では無い

「ありがとうございます」

これで、参加するメンバーが集中砲火を浴び続けて反撃も出来ずに撃墜されることはなくなるだろう。

陸軍大将が今の問答をまとめてもう一つの確認をとる。

「ということは、基本的にどのタイミングでの襲撃も、この方法で避難と時間稼ぎを行うといふことでしょうか？」

全会一致で合意する。

これで警備の大体の方針が最終決定されたようだ。

やれやれ、終わったら手洗いに行こう。

警察庁長官が話をまとめて、終了の挨拶を始めた。

「これにて国境資源会議警備打合せを終了する。参加して頂いた皆様。ごくろうさまでした」

席を立つて皆で一斉に礼をして打合せが終わった。
書記官がモニターと通信を切り、並んでいたそうそつたるメンバーの顔がモニターから消えた。

気が抜けたせいで、部屋にまだ書記官がいるのに思わず大きなため息をついてしまった。

「はあ……疲れた……」

書記官がこちらのため息に気づき、苦笑いを返してくれる。

「おつかれさまです大佐。さすがに緊張しましたか？」

「当たり前だ。あのメンバーで緊張しない同世代はないと思うが」
書記官は何故かほつとしたような笑顔になつた。

「何か変なことを言つたか？」

「いえ、大佐も人間だと思つて安心したのです。その歳で佐官なので、一時期、一部の間でAIを積んだ精巧なアンドロイドなのではないかと噂が流れていますから。ちなみに以前ここにいた大佐もこういった会議は緊張して、始まる前と終わつた後には大体トイレにいましたよ。では今回の議事録をまとめてくるので失礼します」
書記官はこちらに敬礼をして部屋を出て行つた。

いや、確かにめいっぱい背伸びをしながら仕事をしているのだが、アンドロイド扱いとは……。

もうちょっと素を出した方が良いのか？

椅子の背もたれに全体重を預けてノビをして身体をほぐす。

腕時計を見ると15時を回つていた。

「後は書類仕事と派遣部隊についてか」
だが、その前に……

「予想以上に疲れたか……」

そのまま部屋に戻ること無く軽く居眠りをしてしまった。
目が覚めて時計を見ると既に16時だ。

この会議室に入ることはあまり無いのだが、今日は誰も来て本当に良かった。居眠り姿を見られたらどうなっていたことか。ちょっとしたサボリ行為に反省する。

次からはしっかり部屋でしよう。

あれ？ それも違うか……

そんな仕方の無いことを考えて、少しボーッとした頭で手洗いに寄つてから執務室に戻った。

第七章「それぞれの絆」

第七章「それぞれの絆」

執務室に戻った後は、とにかく書類と格闘するつもりでいたが、端末を立ち上げると、先ほど打合せに参加していた眼鏡の空軍大将から極秘回線で連絡するようだ。とメールが入っていた。

背筋が凍るような寒気に襲われ、眠気が吹き飛んだ。

「うつ、さつきの居眠り中に来てたか」

気が進まないが、連絡するしかない。

部屋に設置してある通信機を極秘回線専用モードに設定する。

機械音の案内が流れ、指示された通りに行動する。

指紋確認……OK。網膜チェック……OK。声帯認証……OK。

(キーナ空軍基地、坂本龍大佐と認識。どちらにお繋げしましょう?)

「空軍総司令部、ミヤノシゲル宮野茂空軍大将につないでくれ」

30秒間の呼び出し音後、空軍大将が通信に出た。

「遅かつたじやないか坂本。喋り方はいつもの気楽なやつで良いぞ。で、遅くなつた理由だが君のことだ。また居眠りでもしていたのではないか?」

バレていた。何を隠そう、この人がマップス特殊部隊を編成した男で、私の直属の上官だった人だ。パイロット時代の時もサボリを色々と見抜かれていた。

「相変わらず、エスペーのような方ですね。私は監視カメラでもつけているのですか?」……正解です

滅茶苦茶笑われた。

「おい、どうしてくれる? 笑い過ぎて腹が痛いぞ。ハハハハ
どうやってこれを止めよつか……」

「そこまで面白いこと言いましたか?」

「そりやあ、まあな。さつきの会議のクソ真面目な態度を見て、立派に成長したと思ったら、大して中身は変わつてないようだな。疲れたら即居眠りしていた癖もそのままか。書類の山の中でよく眠つてないか？　さつきの会議ガチガチに緊張してちびらなかつたか？」

「少なくとも今まで漏らしたことは無いですよ！　それに書類の中で居眠りもここ数年してないです。宮野司令こそ、会議の時だけは真面目なんですね」

精一杯の皮肉を返す。そう、この人は会議とか公式の場では真面目振るのだが、根本的に破天荒な人なのだ。

ほとんど新兵しか乗つていない実験兵器のマップスを戦場に出したり、私を大佐に推薦したのも彼だ。

「おう、我が輩はいつでも真面目だぜ？　お前もあのメンツの中で緊張しないくらいに早く成長して欲しいもんだ。ひよっこ大佐君」それも見抜いていたのか、段々頭が痛くなってきた。早く本題に入つてもらわなければからかい続けられそうだ。

「で、今回は私をからかうためにわざわざ極秘回線を使えと指示したんですか？」

「久しぶりの一人きりの通信なのにつれないねえ……まあ良い。本題に入るか」

最後で宮野大将の聲音が変わつた。どうやら本氣モードのようだ。

「坂本。お前今回の警備体制についてどう思う？」

先程の会議で決定したばかりなのにどうしたと言つのだろう？

「どう思うと言われても、両首脳を狙つテロリストに対しても有効な布陣かと」

「そうだ。恐らく両首脳を狙つた攻撃にはこれで良い。ただ、目的が他の物にあつたらどうなる？」

「どういうことだ？　彼には一体何が見えている？　ただ、すぐには思いつかなかつたので諦めて聞くことにした。

「どういうことでしょうか？」

「いや、例えばだ。我が輩がテロリストではなく、レトリアの軍人

や過激派の政治家だつたら会議のタイミングに首都を襲う際、首脳を襲うのは陽動にすると思つたのぞ」

「首脳襲撃が陽動？ そう仮定すると、何か別の目的があることになつてしまつ。

「となると、別に本命があると申しますよね？ でも一体何が？」

「多分我が輩よりも君の方が詳しい物だよ」

「私が富野大将よりも詳しい物……」

「なるほど。菱田重工のマップス関連ですね。それも噂の第三世代がですか？」

「そうだ。敵はヤポネの同盟国が持つ第一世代型マップス強奪作戦を実施してでもマップスを手に入れた。となると、さらに発展した第三世代型はどうやって手に入る？」

あの時は確かに、秘匿されていた各種パーツを生産する工場と、パツを集めて機体を完成させる組み立て工場、そして更に基地に至るまでの全ルートが漏れていって、組み立てが完了した機体の搬出中に強奪された。と聞いている。

「なるほど。首都に警察や軍の注意を最大まで引き付けられるイベントが首脳襲撃。ということですね。で、その間に首都にある菱田重工の本社と工業地区にある工場で、第三世代型のろ獲、もしくはデータの収集を行うと？」

「そんなところだ。勘の良さはさすがだな。我が輩が鍛えただけはある」「ある

素晴らしい自画自賛つぶりだが、ある意味誘導尋問的にこの答えを導き出したので、否定はせずに皮肉だけ返しておこう。

「その最後の一言は本来私が言つべきことなのでは？」

「なに、君の心境を代弁したまでだ。で、勘の良い君は「ひでじ」するのだ？」

あっさりかわされた。しかもカウンターのおまけつきで。

恐らくこの口振りだと既に答えは持っているのだろう。

こちらが試されている。

「そうですね……まずは菱田重工の方に警戒するよう連絡を入れる。そして、PMCを雇つてもらうよう進言する。次に元特殊部隊にいた松平に、いつでもマップスで出撃出来るように武装とメンテナンスをするよう伝え。といつたところですかね？」

基本的な模範解答だらう。PMCも使えるある程度の時間稼ぎは出来るはず。

「まあ60点の及第点だな。普通に考えればその案なのだが、その案だと襲撃があつた時は大きな被害を受ける。日曜とはいえ出勤者がいるはずだ。最悪の場合、貴重な技術者から死者が出かねん。戦闘が起きてもPMC含めて民間人から一切の犠牲者が出ない方法を考えろ」

襲撃の際に機体やデータが強奪されず、技術者を始めとする民間人も現場にいなくてよく、敵を撃退する方法か。

頭をフル回転させて、策を考える。すぐ答えが出せず沈黙が10秒ほど間続いてから、宮野大将が口を開いた。

「確認するぞ？ 敵の目的は機体とデータの強奪。ついでに技術者を拉致する可能性もあるな？ ということはだ。建物を破壊することはまずしない。泥棒が金銀財宝の入つた木製の宝箱を、持つている爆弾使ってあける事はないだろ？ 空っぽだと分かれば、八つ当たりでぶつ壊す氣にもなるかもしけんがな」

宮野大将が軽く笑っている。どうやら自分の例えがうまく言えたことに対して御満悦のようだ。

ただ、おかげで私も何が言いたいか分かつた。

「なるほど。会議前に中身を引っ越せ。ってことですか」

「ほほお？ それで？」

すごく楽しそうに相槌をうつてきた。

まったくこの人は本当に良い性格をしている。

「試験用の第三世代型は、来月の資源会議前までにこちらの基地に一機送られてきます。そのタイミングで第三世代型に関する部品と

データをキーナ空軍基地に全て移動させて、首都の方は空にさせます。これなら出勤する人間もいないでしょう？

昔読んだ本にこんな作戦があつたな。確か名前は空城の計。それは確かに、敵が攻めてきているのに、あえて部隊を展開しないまま城門をあけて、何事も無かつたかのように振る舞い、罠があると思わせる計略だ。今回はその名の通り中身が空っぽになつてしているのだが。

「良いねえ。素晴らしい案だ。ただ、宝箱も吹っ飛ばされちゃ困るんだよねえ？」

言いたいことは分かる。設備だつて貴重な物だ。破壊されて良いことなど一つもない。もちろん対処方法は考へてある。

「富野さん。ミミックつてご存知ですか？」

言いたいことはきっと伝わっているのだらう。

相づちを打つ声音は相変わらず楽しそうだ。

「真似する。とか擬態。とかその辺の言葉だな。で、それがどうした？」分かっている癖になあ……。それがどうしたの？ 声が踊つているじやないか。顔が見られたら確實にニヤニヤしてゐるぞ。

「昔やつたゲームの話ですが、宝箱があつて喜んで開けようとするが、実はかなり強いモンスターで、下手をするとゲームオーバーになるようなトラップがあるんですよ。今回それを真似します」

「ほお？ それをどのよつに真似る？」

さて、ここからは割と無茶な要求だ。心してかかるう。

一つ深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

「菱田重工の地上倉庫に、第一世代型マップスに第三世代型の装甲を貼り付けたのと、完全に装甲だけのハリボテを設置します。それも敵から見えやすいように。敵がマップスや車両で襲撃をしかけるなら、偽装マップスで対処出来ます。そして、本社の方は、データ採集のために歩兵が投入されることが想定されるので、施設内に社員の格好をした陸軍部隊に待機してもらい、歩兵を迎撃するのはいかがでしょう？」

拍手の音が聞こえる。どうやら理解のよつだ。

「フフ、これはヒント無しでいけたか。まつ、これが何だかんだで普通に警備するより、被害が少なくて済む方法だろ？ で、誰が菱田重工と陸軍に今の話を頼むんだ？」

ハハツ、やつぱりそれが一番の問題ですよね？

ただ、ここまでこちらを誘導してきたところになると、

「もちろん、富野さんですよ？」

通信越しなので、相手には伝わらないだろうが満面の笑みで伝える。

「良い笑顔だねえ。まつ、愛弟子がここまで頑張つたんだ。」
「」
で菱田重工への通達と陸軍への応援要請は我が輩の方からやつてお

「」

つて通信越しだから分からぬはずなんだが、どうして分かつたんだ？

ま……まあ良いか。それにしても連絡を空軍大将である富野さんが担当してくれて良かつた。組織がでかいだけあって、トップの声が物事を早く進める上で大事なのだ。私がやつたら時間がかかりすぎる。

「助かります。とこいつが本当にこの様子は見えていませんよね？」

通信越しで吹き出した音が聞こえた。どうやらまた大笑いされる。

「2年前の答えを教えようか。坂本、お前ちょっとカマかけにひつかかりやすいぞ」

いや、あなたが相手じゃなきゃ……ってこれは言い訳か。どうにも苦手意識というか高い壁を感じるというか。自分の師匠に対してもこんなもんだらう？ 」
「」
とか超えられるよう精進しよう。
とこいつがまさか昔からひつやつてカマかけされてただけ？

いや、今はそんなことは置いておいて、今できる最大限の反撃を繰り出すぞ。

「富野さんもやつれ私の話を聞いている最中、ずっとニヤニヤしていましたよね？」

「フフ、何のことかな？ 我が輩は愛弟子の提言を孫の作文を聞いてやっている時と同じくらい真剣に聞いていたぞ？」

「それは一矢二矢どうじや済まないですね。というか相変わらずどんな例えだ……ただ、声の方は浮かれている様子だ。

「それは一矢二矢どうじや済まないですね。というか相変わらず例えが分かりづらいですよ……。でも、楽しんでいらっしゃるようで何よりです。楽しみ方は少し変わっていると思いますけどね」

「何、君もうちの孫と大して変わらないからな？ そんな変な例えでもないさ。それに君をからかうのは頭を使ってなかなか面白いのだよ。張り合いがあつて、とても良い」

思いつきりため息をつきたいところだが、ぐつといらげる。

「やれやれ、こんなのと一緒にされたらお孫さん泣きますよ？」

どつちかつていうと泣きたいのはこいつの方なんだが、こんな冗談を受け入れたらこいつの負けだ。

「大丈夫さ。我が輩の自慢の孫だからな」

富野さんは言いたい放題言つた後、大きく咳払いをして、「話がそれたが、話したいことは既に全て話した。また何かあつたら連絡しろ。内容にもよるが何とかしてやる」

どんなにおちやらけていても最後にビシッと決めるから憎めない。これがこの人がここまで地位に上がった理由の一つなのかもしれない。

「了解です。その際はよろしくお願ひします」

「おう！ んじや通信終了だ。またな」

「失礼します」

向こうの音が完全に聞こえなくなつた。どうやら通信が切れたようだ。

師匠との問答が終わり、緊張がとけたからか、また少し眠くなつてきたので、リフレッシュルームに行ってコーヒーを飲みながら談笑でもして眠気を払おうと決意し、部屋を出た。

リフレッシュルームにつくと休憩中のガンダック一同に遭遇した。

軽く挨拶をする。

「ガンドックじゃないか。休憩中か？」

こちらに3人が振り返って敬礼を返してから、ガンドック1の犬塚剣が状況の説明をする。

「はつ、今朝の訓練レポートを書き終えて、シミコレーターで戦闘訓練を行った後の休憩であります」

「で、向こうで何か一人が騒いでいたようだが、何をしてるんだ？」
ガンドック3の小山静が少しめんどくさそうな顔をしている。

「何というか、いつもの先輩と高田です」

ああ、なるほど。いつものね。妙に納得する。

そう、いつも通り、離れた場所でガンドック2の吉川理恵とガンドック4の高井則良が互いに腕を組みながら言い争いをしている。
喧嘩するほど仲が良いとは言うが、ここまでになると漫画とか小説では何か裏がある勢いだな。こう実は好きなんだけど素直になれないといった類いの……いや、どうだろう。

とりあえず、それを置いておいて、普段の疑問をぶつけてみる。

「何というか、お前等は仲が良いのか悪いのかわからんな。戦闘中のチームワークは目を見張る物があるんだが」

そんな私の疑問に、ガンドック5の石山慎治が応えてくれた。

「隊長がまとめあげてくれるおかげです。ただ、ああ見えて彼らは仲が良いのですよ。今のも姉弟がじゃれあっているようなものです。たまに見ていて羨ましくなることもあります」

そんなもんなのか。今度ちょっと互いの気持ちを確かめてみたいなと思っていたら。横から殺気のようなものを感じた。

殺気の方に視線を変えると、いつも大体半目の中山だが、その半眼に何か激情がこもった視線で中山を睨みつけるようにを見ていた。

ただ、その視線に気付いた中山の方は、極めて冷静な顔をして中山を見つめ返している。

彼ポーカー強そうだな。おっと、思考が変なところに飛んだ。

さすがに睨まれ続けられているのを疑問に思ったのか中山が口を動

かした。

ただ発せられたのは言葉の爆弾だ。

「どうした？ そんな怖い顔をして。皆、君の表情や声に可愛げが無いと言つたが、そんな表情ではかわいい顔が台無しだ」

そんなことを言いながら小山の頭に手をおいて、優しくなで始める。

「え……えつと、ちょ……ちょっとお手洗いにいってきますっ！」

小山は俯いて顔を見せないように部屋を走つて出て行つたが、声は上擦つていたし、顔が随分と赤かつたな。

……いや、何だこの状況は？

「あー、石山准尉？ 今は何だ？」

私の質問に対しても思議そうな顔をしてこちらを見ている。

「いや、特に何でもないのですが、強いて言つなら客観的事実を述べただけです。それに彼女は頭を撫でると機嫌が良くなる傾向があるので。つい」

つい。じゃない。彼は天然たらしなのだらつか？

犬塚にアイコンタクトをとつて、じりつらはいつもこんななのか？ と確認する。

私の意図を察したのか察してないのかは分からないが、両手を軽くあげて、困ったような苦笑いを浮かべている。

仕方ない。今後のことを含めて話が出来たので、耳打ちのために手招きをした。

「まあ、部隊内のメンバーが引かれ合つるのは仕方ないんだが、色々と大変だぞ？」

「分かつてはいるんですが、これでまとまっていますし。下手に禁止して田の届かないところで問題起こされても困るので、多目に見てください

思わずため息を吐いた。これが妻帯者の余裕というやつかな？ 肩に手をおきながらとりあえず適当な応援の声をかけておく。

「まあ、何だ。苦労しそうだな」

「苦労とうよりも、もどかしい感じが続くだけですけどね

「それだけで、済むと良いな。上手く立ち回れよ」

「冗談じやなく、もどかしさだけで済むなら良い。下手にこじれないように頑張つて貰おう。

石山が何の話か分からぬようで、首を捻つてこっちを見ている。

「まあ、何だ。君もあまり人を刺激しすぎないことだな」

「はあ、了解しました」

脇に落ちないような困り顔で、気の抜けた返事をされた。

ガンドック小隊の人間関係が私の中で更新された。もどかしくも微笑ましい話が終わつても、ガンドック2とガンドック4の言い争いは未だに続いていた。

「で、そろそろ言い合つているあの2人は止めないのか？」

犬塚の代わりに石山が答えた。

「そろそろ終わる頃かと。二人揃つてシミュレータールームに行くんじやないでしょうか」

マップスの訓練や模擬戦が出来るシミュレータールームに？
さつきまでそこにいたとは言つていたがどういうことだろう。

「模擬戦後シミュレータールームで訓練をしていたのですが、撃墜数の勝負を始めました。現在の結果は引き分けなんですよ。決着をつけてやる！ と息巻いていたのですが、一旦落ち着けさせるために隊長が休憩に無理矢理引き摺り出したんです。それで、そろそろ提示した勝負を再開する時間になるのですよ」

あー、それでか。普通の喧嘩とは違つてマップス関連の言葉が出ているのは。

「ただいま。何だ、まだやつてるんだ」

大分落ち着いたのか小山が戻ってきた。赤かった顔色は元に戻つてはいるが、声音はいつもよりほんの少し柔らかかったし、微妙に口が緩んでいる。

なるほど、確かに機嫌が良さそうだ。ただ、君が惚れた相手はどうやら恋愛という戦いにおいては、戦場の時ほど勘が良くないようだよ。「何かボクに憐れみの目が向けられている気がするのですが、気の

せいですよね大佐？ 何か一時期、隊長が見せたような目です
ちらつと犬塚を見るとそっぽを向かれた。

なるほど、全く同じことを考えて表情に出してしまった時期がある
みたいだ。

それにしても小山は意外と勘が良いな。何とか「まかせるか？」
「気のせいだ。君も周りに振り回されて大変そうだと思つただけだ
よ」

先ほどの田が高井と吉川の言い合いが原因だと勘違いしてくれたよう
で、ああ。といつて納得してくれた。嘘でごまかす時には眞実を
混ぜると効果的だ。

しかしこの先、あの一人より君をもつと振り回す奴が目の前にいる
のだが、分かつていいのだろうか？

そして、チームの予想通り、大いに白熱した2人は時間だからシミ
ュレーションルームに行くと宣言し、リフレッシュルームを出て行
つた。

「で、君達も行くのかね？」

「放つておいたら、いつまでも続くので」

犬塚が良い笑顔で返してくれた。どうやら今のチームが本当に好き
らしい。完全に部下たちをまとめられている訳では無いけれど、良
い隊長だ。

彼ならこの複雑な人間関係も何とか出来るだろう。応援の言葉とと
もに送り出そう。

「行ってこい。がんばれよ隊長」

「イエッサー！」

三人は敬礼をして部屋を出て行つた。

さて、どっちが勝つかな？ 今度結果でも教えてもらおう。
今のお喋りが丁度良い息抜きになつたようだ。

執務室に戻つて、気合いを入れ直してデスクワークにあたる。

何とか本日の分の書類仕事を片付けて、模擬戦のデータを松平に送
信する。

訓練や模擬戦のデータから新しいアイデアが沸くそうで、わざわざ国と菱田重工間で特別協定を結んで、データのやりとりが行われているのだ。

仕事が終わり、時計を見ると18時を過ぎていた。

お腹も空いてきたので私は執務室を出て食堂に向かつっていた。すると、また廊下で田口軍曹に遭遇した。が、行つたり来たりしてその場をうろうろしている。何か様子がおかしい。

「田口軍曹、どうした？」

びくっと肩が震えてこちらに振り向いた。いつも以上に反応が大きかつたが、何よりもいつもと違つたのは背中に何かを隠すような動きをしたことだ。

しかもそれなりに大きな物らしく手は後ろに回したままだ。

「何を隠している？」

額に汗が滲んでいるのが目に見えるほど焦っている。

宮野大将の真似でカマをかけてみるか。

「恋をした女性へのプレゼントかな？」

田口軍曹の顔色が一瞬で紅潮すると、一転して青ざめた。忙しいやつだな。

分かりやすすぎて思わずくすっと笑つてしまつ。

「大佐殿はエスパーですか？」

私が宮野大将にした反応と全く同じだったので、吹き出してしまつた。

「確かに私のガラでは無いですが、そこまで笑わなくとも……」
かなり落ち込んでいた。がっくりと身体全体でうなだれてしまった。

しまつたな。今の笑いで誤解を与えてしまった。早くこの勘違いを払拭せねば。宮野大将とのカマかけについてのやりとりを簡単に説明する。

「なるほど。そんなことがあったのですか。さすが空軍大将殿です

ね

どうやら誤解はとけたらしい。

ただ残念ながら、どうやら宮野大将の悪戯好きが私にも受け継がれているようだ。ちらりと見えた手紙に相手の名前が書いてあったのだ。それを見てまた悪戯心がくすぐられてしまった。

いやー、悪戯好きだな私！

「相手はそうだな。食堂のおばちゃんの一人娘で名前は佳奈カナだったか。夜の食堂にバイトで入つてきている子だよな？ 絶世の美女とは言えないが、綺麗な長い黒髪で、清楚な印象がある真面目な良い子だ。あの垢抜けて無い感じに惚れ込んだのか？」

また軍曹の顔が赤くなつた。反応がとても早くてわかりやすい。

「なぜ分かったのですか？ 今のもカマかけというやつですか？」思わずひるんてしまうほど声が大きかつた。少し静かにと伝えるとシコンとしてしまつたので、ネタばらしをする。

「いや、今のは違う。その手紙の宛名が見えたのでな。というか、プレゼントに花束と手紙とは。いや、メッセージカードというのかな。なかなか良い趣味をしているではないか」

田口軍曹がクワツと顔をこちらに向けて、大きく目を見開いてこちらをジツと見つめてくる。困つた……正直顔が近い。しかも体格が良いのですごい迫力だ。

「あー……素敵なお贈り物だと思うぞ？ 君のような者が贈るというのもギャップがあつて良いと思う」

軍曹がこちらの手をとつて握ってきた。ゴシゴシした男らしい手だ。指の皮は堅く、マメのようなタコが何個か出来ていて、数年に渡る訓練の積み重ねの結果だろうか。何故か私は手の分析をしている。その理由は、この光景が周りから見ると相当不思議な光景に見えてしまうと思ったからだろう。

体格の大きな男性がバラの花束を持ちながら、普通の体格をしめる男性の手を取つていて、その両者の距離がとても近い。見られたら何か酷い勘違いされそうだ。

「ほ……本当にそう思われますか？！　花束とメッセージカードで喜ばれますか？！」

とても興奮した声だ。緊張のあまり声が震えているし、とても大きくなっている。どうやって彼を落ちつかせよ。何か近い話題をふつて気を散らしてみるか。

「ところでだ軍曹。どうしてまたプレゼントを？」

私の疑問で手を離して、身体の距離もあけてくれた。どうやら周りの誤解を受ける危険からは助かったようだ。

「実は、今日が誕生日だと聞いているのでお祝いを。と思いまして」なるほど。意外とがんばっているじゃないか軍曹。しかし、この緊張ぶりでちゃんと渡せるのか？

「なるほど。それはまた素晴らしい話だ。君の恋が成就することを祈っているよ」

何とかその場から逃げだそうとするが、軍曹に呼び止められる。

「大佐殿、折り入つて頼みがあります」

何かいやな予感がするなあ……。

「プレゼントを渡すときに、その……人払いをして欲しいのですが

……」

消え入りそうな声で頼んできた。予想は出来ていたが、意外とこういうところでは気が弱いようだ。鬼軍曹の意外な一面を見た気がする。

軍曹には日頃新人の教育で世話になつてるので、協力は喜んで乗つてあげるとしよう。今日の模擬戦で正規パイロットに勝てるような新人を育成してくれたボーナスだ。

「人払いか。どうせならそうだな。彼女を呼び出して、二人きりにさせようか？」

軍曹に彼女と一人きりになれるチャンスを作る提案をする。

「大佐殿……あなたが私達の上官で本当に、本当に良かつた！　私はなんと幸せな男なのでしょうか！」

……あの田口さん、涙が流れているように見えるのは氣のせいだ

しょうか？そこまで緊張していたんですか。そんなあなたに協力出来て私はとても嬉しいです。予想外の展開に私の思考が少しおかしくなりそうだ。

何故か声まで出にくくなっている気がする。

「と……とりあえず、行こうか軍曹」

精一杯の笑顔を作つて食堂に向かいつ促す。

「了解です。大佐殿」

花束片手に敬礼というのも不思議な光景だ。

軍曹の名誉のために周りに人がいなくて本当に良かった。

とりあえず、急遽作戦を考えることになり、歩きながら作戦概要を軍曹に伝えていった。

「では軍曹。作戦コード・ドリーム・シアター開始だ」

少し外連味が聞いた名前をつけて軍曹の恥ずかしさをじまかすのと、やる気を引き出す。

大層な名前をつけているが実際大した作戦ではない。
佐官は食事を部屋まで運んでもらえるサービスがあるのだが、そのサービスをおばちゃんの娘である佳奈に頼むのだ。

ただ、今から頼んでもすぐ仕事に戻つてしまふので、それではあまり意味がない。仕事が終わるか終わらないかのギリギリの時間に配達するようにお願いし、配達が終わったら仕事を上がるよつにおばちゃんから言つてもらう算段だ。

これならゆつくりと軍曹が彼女と話す時間が設けられる。

まあ、うまくやれば食事くらいには一緒にいけるんじゃないかな？
確か8時半頃に食堂が閉まるので、その時間から食堂のスタッフは食事をとるはずだから望みはあるだろつ。

さつきの拳動不審っぷりを考慮すると多分起こりえないイベントなんだろうと思つてしまふのが残念な話だ。

ちなみに、この作戦の最大の問題は何かといつと……
私の夕食がとても遅くなると言つことだ。

しかし、これも軍曹のため。空腹の1時間や2時間くらいは我慢し

よつ。

そういうえば、執務室の机の中にチラ ロードべらい入つていたと思うからそれを食べてしのぐか。

そんな風に自分の空腹をしのぐためにどうすれば良いか考えていたら、軍曹がいつたん花束を置きに部屋に戻つた。そういうえば、この作戦では彼も空腹に耐えるのだ。ただ、緊張で食事どころでは無いようなので大丈夫だろつ。

さてと、まずは敵情視察か。マップスをはじめとする兵器による戦争でも、恋愛という名の戦争でも、まずは彼我の情報収集が第一だ。確か意外と人気があつたような気がするが、さて、どうなることやら?

食堂につくと、さすが夕食時とあつて大変混雑していた。

佐官用の特別ルートを使って（ただ単にスタッフ用の入り口なのが）中に入り込み、おばちゃんに声をかけた。

「おーい、おばちゃん。ちょっとこっち来て」

後ろから声がかけられて食堂のおばちゃんが振り返つてこちらを確認する。

そして、手を振りながらこっちにやつてきた。

「あれま? もっちゃん何でそんなところから来てるの?」

「いや、すごい混雑ぶりだね。仕事が忙しくてね。ちょっとと氣分転換がてら配達サービスを頼みに来たのだが、眞面目に列に並ぶと恐ろしく時間がかかりそうだったので。つい裏から我ながらヒドイ言い訳だ。

ただ、さすがおばちゃん。特にこまれずに了承してくれた。

「電話で良いじゃないかい? まあいいわ。大体何時くらいだい? よし、これで第一段階クリア。

「そうだな。8時半あたりで頼めるか?」

「まだギリギリだねえ……まあ、もっちゃんの頼みなら仕方ないわね」

そして次がまた難関だ。最大限の演技をしなくてはならない。

「ありがとう。助かるよ、おばちゃん。って、おつとしました。もう一つ頼みがあるのだが、配達の方は佳奈さんに頼めるかな？ 確か今日は彼女の誕生日と聞いたのでな。普段多くの隊員が世話をなつているお礼として、ちょっとした贈り物があつたのだが、忘れてきてしまった」

「さすが、もっちゃん良い所あるわねえ。分かつた。その時間に佳奈をそつちに送るわ。プレゼントのことは内緒にしておいてあげる。それと、これは私の誕生日も期待していいのかしら？ ちなみに私は来月の4月2日よ

おばちゃんが嬉しそうに解してくれた。何とか第一二段階もクリアした。

ただ、どうやら来月の出費がこれで確定したらしい。さすがおばちゃんやるな！

さて、後はどれだけ彼女が人気かを探るだけだが、スタッフ専用休息室の机の上を見ると結構な数のプレゼントが置いてあった。箱の数からすると、プレゼントの数は15程度か。

包装で包まれていて中身はよく分からないが、大きさからするとここまで大きくては無い。女の子に受ける小物とかアクセサリーとかそういう類いの物だろうか？

田口軍曹が用意しているような花束と手紙は……どうやらないようだな。

良かつたな田口軍曹。君のそのチョイスはやはり間違つていなかつたかも知れない。

敵情視察も出来たのでおばちゃんにひとつ一度礼を言つてから食堂を出た。

「さて、私もでまかせとはいへプレゼントを贈ると言つてしまつた。何を贈ろうか」

歩きながら何が良いかを考える。少なくとも軍曹のプレゼントのインパクトを潰してはならないし、彼をアシスト出来るような物が良

いだろつ。

娘の佳奈の事は実はあまりよく知らないのだが、おばちゃんは酒飲みだと聞いたことがある。惚氣話で旦那と良く飲み比べをしたと語っていたことがあった。

なら、娘の方もある程度は飲めるだろつ。メンデル遺伝の法則から考えると両親ともにお酒が飲める体質であるならば、子供は最低でも75%の確率でアルコールの代謝が出来る。

そう考えると、ワインならば家族で楽しめるし、うまくいけば田口軍曹も誘われるかもしね。我ながらなかなか良い選択だ。

「よし。ちょっと、ワインでも買つてくるか」

田口軍曹に8時30分くらいに執務室から食堂の間の廊下で待機するよう伝えて、車でワインを買いに急いで町へ向かった。

ただ、店について気付いた事だが、私はあまりワインに詳しくなかった。

しまつた。この私としたことが……。

どうじつた物が良いのか悩んでいても仕方ないので、ダメ元でソムリエに誕生日に家族で楽しめるワインは無いか？ と注文したら、あつといつ間にワインを選んで出してくれた。意外と言つてみる物だ。

ワインを買つて基地に戻ると時間は既に8時をまわつていて、私もいつ佳奈さんが来ても良いくように部屋で仕事をしている振りをしながら待機を始める。

さて、田口軍曹は気が氣じや無いだろつなあ。様子を見てみたが離れる訳にはいかないので、想像してニヤニヤすることくらいしか出来ない。

そして、約束の時間がやつてくる。

部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「坂本さん夕食をお持ちしました」

確かに佳奈さんの声のようだ。

「どうぞ、入つてくれ」

「失礼します」

軽く頭を下げて佳奈さんが部屋に入つてくる。

食堂での仕事なので三角巾を頭につけてエプロンもしている。

後ろから見える長い綺麗な黒髪のお下げが白い布に栄えてより黒く綺麗に見える。

なるほど、清楚なイメージの子にこの衣装はなかなか似合つものだ。何といふか空気が柔らかく感じる。田口軍曹もこれにやられたのだらうか？

「ありがとうございます。ここに机に置いておいてくれ

「分かりました」

端末や書類の載つていらない客用の机の上に食事を置いてもらひ。一通り置いてもらひたらおばちゃんへの宣言通りプレゼントを渡さなければ。

「佳奈君。君のおかげで隊員達の士気は非常に高く保たれている。これは私からのほんの気持ちだ。是非お母様と一緒に楽しんで欲しい。誕生日おめでとう」

ほんの少しの笑顔で、出来るだけ真面目な顔で手渡す。笑顔を見せるのは次の田口軍曹の仕事だ。

「ありがとうございます！ 私もお母さんもワインは好きなので嬉しいです」

ふう、とつあえずは及第点のようだ。さて、舞台は整えたぞ田口軍

曹。

後は君が主役だ。

佳奈さんが部屋から出て行くを見送つて行動に移る。

さて、では尾行開始だ。自分で言つのも何なのだが趣味が悪い。宮

野大将が聞いたら大爆笑されそうだ。

しそり後ろをついていくと田口軍曹が花束を持って現れた。

「い、い、こんばんは！ 佳奈さん」

あちやー……緊張すぎて舌が回つてないぞ軍曹。

「こんばんは、田口さん。そういえば今夜は食堂に来なかつたです

ね。身体の調子でも悪いんですか？」

「おお、ちゃんと名前を覚えてもらっているし、食堂に来ているかどうかまでチェックしてもらっている上、身体の心配までしてくれている。なかなか良い子じゃないか。しかも脈もありそうだ。『え、ええ。実は候補生達の仕事が残つていて、食事はまだなのですよ』

田口軍曹は早口で言い切つてから大きく息を吸い込んだ。

「どうやら決意を決めて、ここで渡すつもりのようだ。

「あの佳奈さん。誕生日おめでとうございます。つまらないものかもしぬませんが、これをどうぞ」

「おつと……満面の笑みじや無くとても固まつている顔だ……。

ただ、その顔と花束のギャップが面白かつたのか佳奈はクスクスと笑い始めた。笑い方も意外と上品だな。おばちゃんの娘とは思えない。……これはおばちゃんに失礼か。

「何というか済みません。やつぱり変ですよね。この私が花束つて軍曹が見るからにしょんぼりしている。あきらめるな軍曹！」

「いえ、今年もらったプレゼントの中では一番嬉しいかな？ 小物やアクセサリーも嫌いじや無いんですけど、お花が大好きなんですよ私。お部屋に飾りますね」

「おお！ よかつたな軍曹！」

気付いたら拳を握つてガツツポーズをとつていた。落ち着け私よ。

「確かに、お食事はまだなんですね？ みんなと一緒にで良ければ今から食事はいかがですか？ ワインもありますし」

田口軍曹が眼をぱちくりさせている。何が起きているか多分脳が処理しきれていな状態だ。

「えつと？ 私と佳奈さんが食事ですか？」

「はい。あ、まだお仕事が残つてますか？」

「いえ、大丈夫です。是非一緒にさせてください！」

やたら大きな声で良い返事をした。おめでとう軍曹！

心中で拍手を送つていたら、軍曹がこちらに気付いたようで頭を

軽く下がってきた。

む、尾行がバレてしまった。こんだけ上手く行つたんだ。感謝されど文句は言われないだろ？

この時はまだ佳奈さんの「みんな」という言葉の意味がご両親のことだと私は思つていた。

無事に作戦が成功したと思い、私も執務室に戻り遅い夕食をとることにした。

机の上の料理を見ると、どうやら焼き魚定食のようだ。若い連中であまり人気が無いのか少し余りやすいようで、最後に頼むと大体これになつていて。焼き魚も美味しいとと思うのだが。

今日は時間が遅く、お腹が空いていることもあり、いつも以上においしく感じられる。空腹だけでなく、田口軍曹の幸福っぷりを分けてもらえたのが良い調味料だつたのではないだろうか。

食事が済んだので食堂に食器を返すついでに軽く様子を見てくるとしようと考えた。

しかし、食堂には私の想像していた楽しそうな光景とは全く別の楽しい光景がひろがつっていた。

「何だこの人数は？」

そう、田口軍曹が佳奈さんとおばちゃんやシェフのおっさんと仲良くやつているかと思いきや、物凄い人数が食堂に集まつている。田淵ざつと30人。一体何があつたと言うのだ？ 食器を返却口にあるシンクに置いて、近くの人々に声をかけた。

「おい、君。これは何の騒ぎだ？」

「お？ なんだ？ つて坂本大佐！？ 失礼しました。大佐もおばちゃんに呼ばれて來たのですか？」

一体何の話だ？ あらゆる想定が頭の中で浮かんでは消え浮かんでは消えた。私が考え込んでいると逆に不思議そうな顔をしてきた。

「あれ？ 坂本大佐も佳奈さんの誕生日祝いに来いと言わされたのでは？」

背中に冷や汗を感じる……しまつた。そういうことか。

作戦のためとは言え、仕事で忙しいと伝えたから」の情報は手に入らなかつたのか。

「実は先程まで仕事をしていたのでな。なるほど、実にめでたい話だ」

「おつかれさまです坂本大佐。このまま」「一緒にいかがですか？」

「いや、少し疲れているのでな。失礼させていただくよ」

「まことに。私の作戦ミスだ。田口軍曹に謝らなければ。

人混みの中から田口軍曹を探すために周りを回つてみると、田口軍

曹のトレーデマークであるショートモヒカンが発見された。

肩をトントンと軽く叩き、こちらに気付かせて耳打ちをした。

「すまないな。私の作戦ミスだ。まさかこんなことになるとは想定していなかつた」

私の謝罪に対しても田口軍曹は首を横に振つてくれた。

「いえ、どうかお気になさらないで下さい。当初の目的は達成出来ましたし、ここに着くまでの間は実に夢のようでした。作戦名通りのドリーム・シアターです。これで大佐殿を非難してしまつては、何か罰が当たりそうですよ」

田口軍曹は満面の笑みで答えてくれた。どうやら、本当に満足しているらしい。

辺りをもう一度見渡す。佳奈さんの近くにいる男達は口々に口説き文句を言つているようだ。それに対して佳奈さんは「ヨーロ」と当たり障りの無いお禮で返している。

私は再度軍曹に視線を戻し肩に手をおいた。

「田口軍曹。君の戦場は数多くの強敵が待ちかまえているようだ。負けるなよ」

「了解しました。私は誰にも負けません」

それで良い。がんばれ田口軍曹。今日はとりあえず、みんなで楽しんで来いと伝えて食堂を後にした。

一応今夜は多忙という設定なのだ。作戦がバレてしまつては田口軍曹に甚大な被害が出る。

参加出来ないのは残念だが、彼の名誉のためだ。仕方ないだろ？

佐官用の個室に戻る中、作戦終了の合図を自分のために出す。

「作戦コード・ドリーム・シアター。ミッショングンプリート」

それが何だかおかしくて、にやついた顔で頭をかきながら帰つた。部屋につくまで誰ともすれ違わなくて本当に良かつたと思う。この時は、にやけた顔をいつもの真面目な顔にするのが、簡単に出来そうになかったのだ。

個室に戻つて時計を確認すると既に9時を過ぎていた。

少し遅いと思ったが、とある人物にテレビ電話をかける。

数秒の呼び出しの後に着信が取られたようだ。柔らかく澄んだ声が聞こえる。

「龍ちゃん、今日も1日おつかさま。晩御飯はしつかり食べた？」
ショートカットの黒い髪で、毛先が少し跳ねている。にこやかな顔の女性がモニターに現れる。

パイロット時代にオペレーターとして共に戦った戦友であり、今は大切な恋人である澄川早苗だ。

ゴースト部隊が解散する際に、バラバラに別れるのなら気持ちを伝えておこうと決意し、告白したら上手くいってしまった。ただ、その話はまた今度だ。

自分も同じチームから恋人を作つてしまつたという理由で、今日も他人にあまり強く注意が出来なかつた。まだ上官として未熟だ。ただそんな自己嫌悪のような感情も、1日の終わりに彼女の声が聞こえて、顔が見られただけでホッと出来る。

「あ、大丈夫。君も変わりないか？」

「うん、元気だよ。さつきまで仕事してたの？ 何か声が堅いよ？」
彼女は耳が良いからか、小さい頃から声の調子や音にとても敏感だそうだ。

その特性を活かして、今では中央司令部の情報解析班についている。その彼女から、声の調子と表情から相手の感情を読み取れる技術を

学んだおかげで、彼女にはまだ遠く及ばないが、私にも少し真似が出来るようになつた。

「さつきまで、とある作戦指揮をとつていたからな」

真面目な顔をしながら答えた。とても大事な作戦には違いない。

「へー、でも何か随分楽しそうな作戦だつたみたいだね。どんなことをしたの?」

さすがだ。顔は真面目でも、やはり声で面白い」とだつたと分かるか。

先程起こつた田口軍曹の一連の話を伝える。

花束とメッシュセージカードを持つてウロウロしていたこと、その緊張ぶり、協力を申し出たら涙を流したこと、うまくいったと思つたら落とし穴があつたこと。

それに丁寧に「うん」「おー」「それでそれで?」と相槌を打つてくれる。話していくとても楽しい。

「とまあ、そんなことをしてたんだ」

「田口さんがんばったね。まだ分からないうけど、脈はあるかもね。龍ちゃんもおつかれさま」

「ありがとう。サナの方は今日どうだった?」

「えへへ、どうだと思う?」

ちょっと聲音は高め、抑揚もあり。ちょっとした笑いも含まれているとすると。

「どうやら良い一日だつたみたいだね?」

「うん、正解。特に大きな事故も事件もなくて、おいしそうに飯も食べれて、今は龍ちゃんとお話しできる。とても良い日だよ」最後の一言に少し気恥ずかしくなつて、ほほをかく。顔はきっと赤くなつているだろう。

「あはは、照れてるー」

テレビ電話が当たり前になつていて、いろいろ表情まで分かるので良かつたり悪かつたりだ。

とりとめの無い話をしながら時間が過ぎていく。

どちらかが一方的におしゃべりをする」とは無く、楽しい言葉のキヤツチボールが続く。

楽しい時はお互いに適當な話のネタで小さく盛り上がって、どちらかが悲しい時はただ聞いてあげて、困ったときはお互いに妥協策を考え、心が疲れたときは甘えあって、身体が疲れいたら互いの健康を気遣つて早めに話を終える。

そんなバランスのとれた絶妙なコワコ一ケーション。

今日は一人とも楽しい時だつたので、長いおしゃべり続いた。気付いたら10時30分だ。

次の日に響いてはお互いのためにならない。名残惜しげがそろそろ切り時だ。

「そろそろ終わるか。そうだ。来月くらいに仕事で首都のミヤトに仕事で行く機会があるかもしかり、そのときにご飯でも食べに行こう」

「やつたー。楽しみにしてるね。早めに日時を教えてね？ 予定が

んぱつてあけちゃうからさ」

「んじや、おやすみ。サナ

「おやすみ龍ちゃん」

モニターと音声が切れた。仕事に私情を挟むのは良くないが、これは早く宮野大将に仕事をしてもらわなければな。

電話が終わった後は、風呂を沸かして、ゆっくりと一日の疲れをとつて、ベッドに飛び込んだ。

長い一日が今日も終わる。

断章「死の商人」

断章「死の商人」

某国某月某日某時刻。

地下アジトに潜伏している武装した数人の男達の下に、身なりの良いセールスマントがやつてきた。

潜伏しているアジトが謎の男にかぎつけられているのだ。男達はそれぞれ武器を取り、常に相手の動きを止められるよう警戒をする。

そんな中でセールスマントは後ろから自動小銃をつきつけられてはいるが、余裕の笑みを浮かべている。

男達のリーダーであるヒゲをたくわえた中年の男がセールスマントの額に拳銃をつけ、殺氣を含んだ声で何の用かと問う。

セールスマントは一ツコリと笑いながらカバンの中から書類を手渡した。

「商売に来ました。これを買いませんか？　あなた達にとつては必要不可欠な物でしょう？」

書類を手に取った男性は驚きのあまり書類を手から落としてしまった。

罷かどうかを確認するために、声に殺氣を込め続ける。

「貴様正気か？　目的はなんだ？」

「もちろん大真面目です。目的はあなた方と同じですよ。國のためです」

一点の動搖もない落ち着いた返事だった。

「対価に何を要求する？　金は無いぞ」

「書類の続きをご覧ください」

地面に落ちた書類を部下が拾い上げて手渡そうとするが、リーダーの男と同じように文面を見て、驚きのあまり固まってしまった。

リーダーの男はその手から書類をとり、続きを読むいく。

「こんなのが対価で良いのか？　ある程度は既に予定していたことなのだが」

セールスマンの男は両手を挙げて大げさに驚いた振りをした。

「おお、それはありがたい。では交渉成立ということでしょうか？」

「大丈夫だ。もう一つの条件も我々のスポンサーがどうにかしてくれる」

セールスマンの方が笑顔で握手を求めた。

2人の男が握手をして、交渉が成立する。

セールスマンは交渉が終わり、帰り支度を始めた。

男達に前と後ろから挟まれながら地下アジトの出口に向かう。そして、出口の扉を開ける瞬間に身体の向きを変えて、男達に非常に楽しそうな声で贈り物があることを伝えた。

「今日はお近づきのしるしに手土産をご用意いたしました。どうかお使いください」

扉を開けると目の前に装甲車が五台用意されていた。

旧世代兵器とは言え、自動小銃と一般車両の組み合せより遙かに良い。

唖然とする男達に品の良い一礼をしてセールスマンの男は去つていった。

装甲車に歓喜し騒いだため、セールスマンが小型のマイクを使って呟いた言葉を男達は知る由もない。

「本部へ作戦完了。これより帰投する」

第八章「//ヤト出張」（前書き）

今回はちょっととした日常回。松平の変態化の原因や、坂本大佐の恋人サナとのちょっととした昔話が書かれています。

第八章「ミヤト出張」

第八章「ミヤト出張」

模擬戦の日から数日後、無事に宮野大将と話した作戦が正式に受理された。

おかげで、菱田重工の技術者や開発機器類の受け入れ準備や細かい書類仕事に追われる日々を過ごすことになった。

ちなみに、書類仕事の休憩中に聞いたことだが、 Gandick の吉田と高井の勝負は、吉田の勝ちだったそうだ。高井もかなり健闘したらしいが、経験の差が出たと言つたところだろう。

そして昨日、ついに受け入れ体制が整つたので、今度はこちらから菱田重工に出向いて、最終チェックを行うことになった。

メールで済ませば良いと思われるかもしれないが、色々と事情がある。

正直に言えば、書類から逃げたかったというのが半分だが、搬送に関しても少し気になることが出来たのだ。それを自分の目で確認がし始めたかった。

キーナ市から首都のミヤトに直行する地下リニアに乗る。一時間に一本程度の間隔で運行しており、大体 2 時間 30 分程度で 1300 km 離れた首都に着く。

スピードはとても速いのだが、揺れや騒音も制御されているので非常に快適に居眠りが出来る。おかげで、居眠りから目が覚めたらミヤト中央駅到着だ。

地下リニアの駅から地上に出ると、少しあせ氣味の体型で、ヨレヨレの白衣を着たぼさぼさ頭の眼鏡をかけた男が待っていた。何と松平が迎えに来てくれていたのだ。

今日は周りの目もないし、現役時代と同じように碎けて喋られる。

「松平じゃないか。仕事中じゃないのか？」

「もっさんを迎えるに来るのも仕事の「うちだよ。他のやつにもっさんは任せられないさ」

ちょっとおちやらけた声だったので、言つてることは「冗談だと分かつたが、彼の目から氣をつけろ」という意図が送られている。彼の冗談にあわせるか。

「で、私は君の長話をきき合わされる訳だな？　また例の惚れた女の話か？」

「ちょっとー、もっさんそんな大っぴらに人の恋路について喋るのは酷くない？」

特に周りに怪しい人間はいなかつたと思うのだが、この反応はやはり何かに警戒をしている。

普段の彼なら、ここで延々とマップスの魅力について語ってくれるはずだ。

「すまん、少しデリカシーにかけたな。では失礼する」

車に乗り込んで電源が入った時に、松平の表情がほっとしたものに変わった。

「さすが、もっさんだね。いつちの意図がちゃんと伝わったみたいで良かった。さすが僕達の元隊長だね」

「おいおい、良いのか？　盗聴器はついてないだろ？　な？」
いきなり警戒をとられたので、少し不安になってしまった。

「大丈夫大丈夫、僕を誰だと思ってるの？　車に小型ジャマーをつけるのは当然だよ？」

携帯端末を見ると確かに電波が入っていなかつた。確かに元々狙われやすい立場にいる人間だつたな。

「で、ここまでやつてるということは、やはりあれか？」

「本当に周りにいるかどうかは置いておいて、警戒しろ。って富っちが言うからやー。こっちも意外と大変だよ？」

宮野大将が気に入っているから良いものの、軍のトップをニックネームで呼べるお前はすごい奴だよ。

「で、その宮野大将からの件についてなんだが、今第三世代フレー

ムはどうなつてゐる?」

とりあえず、話がそれないうちに本題に入る。

「後は服を着せたり、おめかししたりの微調整で試験可能ってことだね。近い内に全部そっちに持つてく手はずだから、今急いでやつてるよ」

状況は把握出来た。わざわざ出向いた甲斐があつたようだ。

「松平、一つ頼みがある。こちらに搬入する時に、第三世代フレームは全て第一世代型の装甲をつけてくれ」

松平は何かに驚いて、勝手に一人で「へえ」と納得はじめた。

「どうした? 勝手に一人で自口完結して」

「いやね、富っちらにさ、もつさんが会いに来たら着せ替えの話をす
るから準備しとけ。って言わたんだよね。まさかその通りになる
とは。ちなみに服を着せる段階になつても、もつさんから何も無ければ
我が輩に連絡しろ。とも言われたよ」

宮野大将も気付いたのか。先を越されたのと試されているのが少し悔しい。

「スパイに第三世代フレームがうちに運ばれるのを気付かれるとま
ずいからな。第一世代型マップスの搬入という形で偽装したい」

「なるほどね。任せて。すぐやっておくよ。ついでに発注書も作つ
ておこうか」

話が早くて助かる。これで心配事が一つ減つた。

「ハリボテの方はどうなつてる?」

「それはもうどっちのハリボテもバツチリだよ。僕から見ても両方
本物にしか見えないからね。まあ、そのまんま同じ装甲材使つて
から当然なんだけどさ」

なるほど。そっちの方も順調のようだな。これで、菱田重工関連の
作戦はこれで安心だ。第三世代フレームが開発されている工場につ
くまでは適当に雑談をしておこう。

「で、松平。さつきの冗談の続きをなんだが」

凄く楽しそうにこつちに振り向いた。危ないから前を向いておけと

注意して冗談の続きを聞かせる。

「相変わらず、女性には興味無しと言つたところか？」

「ハハッ、もつさんは冗談がうまいねえ。たくさん愛する娘がいる僕だよ？ 興味がない訳がないじゃないか」

おそらくこっちの意図が多少分かっているせいだろう。語尾がめちゃくちやになつてゐる。

「動搖して語尾がおかしくなつてゐるぞ。いや、君に子供がいたら、親子そろつて20年後くらいにどんなにマップスを開発しそうだと思つてな」

そんな私の考えに松平は口をとがらせて文句で返してくる。

「ひどいなーもつさん。まあ僕のことが分かる人なら良いんだけど、そんな人は本当の意味で、ほんдинないんだよねえ……」

確かに松平は特殊すぎる性癖を持つてゐる。でも、だからこそ、今

の発言を聞くと悲しいと感じてしまう。

世界の軍事バランスをひっくり返すとはいからないまでも、バランスを大きく変えられてしまふ頭脳の持ち主だ。その頭脳を欲しがつている人間は「ロロロ」ところ。しかも、大抵ろくでも無い奴らが興味を持つてゐるのが問題だ。

昔、サナも松平は無理をしていると言つていたことがあつた。

最初の方は、あくまで自分の作品の自慢のよつなものだつたが、途中からある意味の自己防衛のために発展させた特殊性癖なのかもしれない。

以前、FTE技術の資料が研究者から漏れたという事件もあったのだが、この妄言癖とも言えるマップスに対する接し方で、ハーネートラップをはじめとする数々の情報漏洩の危機を回避してゐるそうだ。おかげで最近少し人間不信気味らしい。

「お前の場合は、そんなやつが現れたら大抵スパイの類なんだろうな……」

「もつさん相手だから言つけど、なんとまあ、悲しい」とさうなつちやうんだよねえ……

自覚症状はどうやらあるようだ。何とかしてやりたいと思うが、解決策がすぐには思いつかない。少し情けないが、急な訪問でも、何か時間を空けてくれたサナに今夜相談してみよう。

ただ、それでもだ。今落ち込んでいる彼は、元同僚で、戦友であり、大切な一人の友人だ。

そんな彼を元気づけるためには、多少のハッタリくらいかましても問題は無いはずだ。

「そのうち、何とかしてやる。だから、もう少し苦労をかけることになる。すまない」

松平はすてきな笑顔をしながら「冗談を含めて頷いてくれた。

「ありがと。やっぱりもっさんは頼りになるね。特に僕はホモとう訳じやないんだけど、ちょっととかつこよすぎで、惚れちゃいそうだよ？」

うれしさと悲しさと何かにすがりたいような切なさが混じった複雑な声だった。そんな声でこんな冗談を言つたのだ。これはおそらく彼の精一杯の強がりだろう。

だからこそ、その強がりに応えて自信満々に笑つて「冗談で返そう。
「おっと、大変魅力的な誘いだが、サナに怒られるのは怖いので止めてくれ。あいつ相手に隠し事は私でも出来ないからな」
二人で吹き出して大笑いしてしまつ。

工場につくまで一時間ほど笑い話が尽きることは無かつた。

「今のところ、こんな感じ」

端末のモニターを見ると調整中の第三世代フレームが映つていた。
なるほど、確かにまだフレームだ。装甲やブースターなどのパーツ
がまだ装着されていない。偽装するにはギリギリのタイミングだつた。

「なるほど。んじゃ、後は手はず通り任せれば良いんだな？」

「そうだね。任せておいてよ。んでこっちがハリボテの方」

確かにこれは第一世代型とは違つて見えるな。

形としては流線型を主体にした航空機のようなフォルムだ。

「ずいぶんと航空機に似たデザインになつたな」

「流線型のデザインもかつこいいかな？ って思つて。試験段階だから正式に採用するかは、何とも言えないけど、他にも色々あるからキーナ基地で試して良い？」

「別にかまわないが、会議が終わるまでは外装をごまかして欲しいところだな」

「ちえ、仕方ないか」

少し残念そうに舌打ちをされた。そんな残念だったのか。

その後は、搬入予定のパーツや武装のチェックを行つて受け入れリストを書いた。もちろん第三世代用のパーツも含まれているのだが、全て第一世代型用として書いている。木を隠すなら森に隠せといったところか。

リストを見ると普通に注文したら恐ろしい額になる量だ。緊急事態の作戦だからこそ出来ることである。

「搬送方法は輸送機で間違いないな？」

「そうだね。1機には全部積めないから、5機に分散して積んで、富つちが指定した空路を通つてそつちに運ぶよ」

バラバラに輸送機が飛び、各基地に少量の配達をしながら、最終的にキーナ空軍基地に本命を届ける作戦となつてている。

「よし、これで搬入の方も何とか目処がついたな」

「そうだね。僕はまだ仕事があるけど、もつさんはこの後どうすんの？」

時計を見ると既に5時を回つていた。確か待ち合わせは6時30分にミヤト中央駅だ。そろそろ送つて貰うことにしてよい。

「そろそろ帰るとするよ。まだこの時間なら中央駅行きのバスがあるだろ？ それを使うさ」「ひうさ」「そつか。んで、その後データ？」

予定を完全に当てられて驚いてしまった。ただ、この前宮野大将に

やれたばかりだ。動搖はしない。代わりにおちやらけてみせる。

「お前も超能力に目覚めたのか。……なんてな。富野大将の入れ知恵か？」

「本当に富っちはもつさんのことを、もつさんは富っちの事が分かってるんだねえ……。あいつが帰り際に時計を確認したら“データだろ？”って言ってみる。面白い反応するぞ。って言ってたからやつてみたんだけど。確かに変なリアクション返された」

そこまで計算済みだったか……思わず右手で頭をかいてしまう。

「今回も富野大将が一枚上手だったか……」

「あはは、どうやらそうみたいだね。んじゃまた今度キーナ基地ですね。さつちんにもよろしく」

「ああ、楽しみに待っている。またな」

中央駅に時間より少し早く着いてしまったので、のんびりと町の風景を観察していた。バスに乗っているときに気付いたのだが、工事用の大型トラックが良く通っている気がする。

そういうば、前に二コースで地価が高騰しているとか言っていたな。建設ラッシュでもまた来ているのだろうか？

二コータウンにマイホームを建てよう。といつた広告も流れている。景気が良くて結構なことだ。

私の給料ももう少し増えないかな？ と考えている

「私の給料ももう少し増えないかな？ と考えている

「お待たせ。ごめんね。結構待たしちゃった？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。どうやらサナも着いたようだ。振り返ると走ってきたからか、肩で息をしている。

「大丈夫。久しぶりのミヤトだから町を見ているだけで良い時間つぶしになつたよ。それに約束の時間にはぴったりだ。サナの方こそ大丈夫か？ 息が切れてるようみえるが……」

私の心配に笑顔で大丈夫と返してくれる。

「近くのお店を予約してあるから、早速行こうよ」

確かに今日はあまり時間の余裕が無いし、まだ少し寒い。早めにレストランに向かう方が良いだろう。

「分かつた。案内よろしく」

うん。と短く答えてサナはこちらに手を差しのばしてきた。少し顔が熱くなるが、恥ずかしがっている場合ではないな。男の尊厳がかかっている。照れ隠しのほほをかくのを必死に抑えて、彼女の手をとった。

柔らかくて暖かい。少し心臓の鼓動が速くなるのを感じる。

田口軍曹のことが笑えないな。と内心で苦笑いをしてしまった。

「どうしたの？」

本当に宮野大将なみか、それ以上に私のことがよく分かる。

「いや、なんでもないよ。ちょっと思い出し笑いをしてしまっただけだ」

別に嘘じや無い。嘘をつく必要も無いが、照れくさかつたのでごまかしたかつただけだ。

3分ほど歩くと彼女が予約した店に到着した。

「ここは初めて来るな。どういう店なんだ？」

「最近出来たお店だよ。何か各国の名物料理を集めてるんだって。キヤツチフレーズは確か、（卓上のぶち旅行）だったかな？ 面白そうでしょ？」

なるほど、面白そうだ。外の看板を見ると確かにいろいろなメニューが書いてある。久しぶりに基地の食堂以外の外食となるので、自ずと期待が高まる。

「確かにこれは何があるか楽しみだな」

扉を開けて中に入ると、いろいろな香りがした。

肉を焼く香ばしい香りや、ニンニクを炒めた香り、ハーブ類のさわやかな香りに、甘い果物やトマト等の野菜の香りもする。棚にはイントリアとして各国の変わった食材が飾られて、何ともカオスな空間になつている。確かに各国の名物料理を色々集めていると宣伝するだけはある。

店員が予約席に案内してくれて、二人が向かい合わせになる形で席に着く。

「一人ともが店長のおすすめディナーを注文して雑談を始めた。

「店の中は暖かいな。こっちは3月だとまだ少し寒いんだな」

「キーナ市は年中暖かいから羨ましいよ。私もそっち勤務が良かつたなー」

「中央司令部勤務つてのは十分すごいことなんだけどな。あそこはエリートしかとらない所だつたはず」

もしくは、何か一芸に優れている者か。彼女の場合はそう。

「私はやつぱり耳の良さでとられたんだろうね。昔は変わった子に見られるからあんまり好きじゃ無かつたんだけど」

耳の良さと勘の良さで不思議な子扱いされても仕方ないだろう。何を考えているか、隠し事があるとか、そういうのがほとんど見抜かれるのだ。普通の人にとってみれば最初は面白いと思うかもしれないが、積み重ねられると怖くなる。そのためか小さい頃は、良く人に避けられて友達が少なかつたとか。

「最初に会つた時は隠していたからな。部隊メンバーとのことで相談を持ちかけたら、やけに勘が良くてまさかとは思つたけど、その通りだつたと知つた時は少し驚いたよ」

「いきなり大まじめな顔をして（君には人の心を読む力があるのか？）つて聞いてくるんだもん。隠してるつもりだつたのにびっくりしちゃつた」

軽く笑いながら昔を思い出しているようだ。その声に悲しさの響きはなかつたので安心する。

「今考えるとデリカシーが無かつたかもな」

「ううん、おかげでこうやつていられるんだし。ありがとう」

満面の笑みに思わず照れてしまい頬をかいてしまう。

「龍ちゃんの恥ずかしくなると頬かく癒治らないね」

楽しそうに笑われてしまった。宮野大将もそうだが、私はサナにも勝てる気がしない。話がそれてしまつたがサナがまた話題をもとに戻した。

「声の調子と表情で何となく分かるつて言つたら、その後何度も教

えてくれ！ つて頼み込んで来るんだもん。それはもう本当に驚いたよ？ 小さい頃はみんな気味が悪いって言つから隠してたのに、龍ちゃんだけは、バレた後も一緒にいた間ずっと怖がらなかつた。それに今もこんな私を好きでいてくれる。本当にありがと」
サナはこんなことを言つて恥ずかしくならないのだろうか？ 彼女から教えられた声の調子や表情を読みとく方法からは、特にそんな様子は感じられない…… こちらが恥ずかしくて氣づけないだけかもしれないけど。

「そこまで言わると、さすがに、その何だ？ ……照れるな」

「いつもは気を張つてるんだから、こんな時くらいは遠慮無く照れちゃいなよー。それにそんな龍ちゃんはかわいいよ？」

ちょっとからかわれているが、悪い気はしない。同じからかいでも宮野大将からのからかいよりも遙かにかわいげがあつて良いし、そして何よりも自分に向けられた分かりやすい好意だ。それを悪いと思はずが無い。

しばし、料理が来るまでそんなお喋りを楽しんだ。

料理が来て話が一旦途切れたので、いつ切り出すか悩んでいた松平のことについて、相談にのつてもうひとつを決心した。せっかくの食事の時間で申し訳ないが、少し相談事に時間を貰おう。

「サナ、急ですまないが相談がある」

突然の頼みにも関わらずサナは快く受け入れてくれた。

「うん、いつくるかなー？ つて待つてたよ。龍ちゃん今日は松平さんの所に行つたから、きっとそのことだよね？」
サナの言つた通りだつたので、頷いて正解だ。と返す。

「少し松平が人間不信気味でな。何というか彼が特殊すぎるせいなんだが」

彼女なら言つぶらす」とはしないので、今日の松平との話を説明する。

「そつかー。何か少し前から無理してる気がしてたんだけど、そんな事情があつたんだね」

「どうにかしてやりたいとは思つているんだが、なかなか解決策が思いつかなくてね。サナの力が借りたい」

頭を下げる頬むと、サナの方が慌てて頭を上げるように言つてきた。
「もう、龍ちゃんの頼みならそこまでしなくても断らないよ？ それに松平さんのためだしね。そつだなあ、んじやいくつか確認しながら考えてみよっか

本当にこの子には助けられる。

「きつとそういうスパイの人たちつて段々と親密になつていくもんだよね？」

「過程はともかく、親密になつて秘密を聞き出すのが基本的な手口だな」

「それじゃあ、最初の接触はどうするんだろう？」

スパイと情報源との最初の接点か。

「うーん、あいつはパーティに参加する奴じゃないしな」

「学会とかシンポジウムとかには参加してるって聞いたことがあるから、それじゃないかな。それだったら、同じ研究をしているんですけど。つて感じで話しかけやすくない？」

それだと確かに同じ思考を持つ人間として偽れるから、近づきやすい。

「なるほど。確かにあってもおかしくはない。基本的に学会やシンポジウムはオープンな物が多いからな」

「でしょ？ となると、多分松平さんはそういう所で新しい出会いを求めてちゃうと、その気持ちにつけ込まれるってことだね」

そう。だからこそ、彼が特殊な妄言癖を身につけてしまった。

「となるとさ、すごく簡単な答えになっちゃうんだけど、良い？」
何か思いついたのだろうか？ 少し心配そうな顔をしているが大丈夫だ。今は少しでも解決策のヒントが欲しい。

「かまわない。教えてくれ」

「うんとね、私達が自分のよく知っている人を紹介すれば良いと思うんだ」

少しほかんとしてしまった。ああ、なるほど。そんな簡単なことでも良かつたのか。

「相談して良かつた。ありがとつ」

思わず頭を下げてしまった。

「え？ こんなで本当に良いの？ 龍ちゃんなら思いついてるつて思つたよ」

少し驚いたように手をぱたぱた振つている。わ、こんなのできつと良いはずだ。完全に素の状態まで侵し始めた彼の特殊性癖に合わせられるかどうかは別にして、少なくとも私達の知り合いでスペイをやつっている人間はない。

と云うか、いたら国家の国防上大問題だ。ああ、何でこんなことに気付かなかつたのだろう。

「ちょっと気合い入れすぎて考え過ぎちゃつたのかな？」

恥ずかしいことにまさにその言葉の通りだつた。

私は近づいて来る人間を手当たり次第に嘘発見器で検証していくとか考えていたのだ。

「残念ながら、そうみたいだ。軍の作戦指揮官が聞いてあきれるな自嘲氣味に笑いながら答えると、逆にはにかんだ笑顔を返された。

「大丈夫。だつてちゃんと自分では分からないから私に相談したんでしょう？ 指揮官だつて人間だもん。分からぬことはあるよ。大事なのは分からぬことを、分からぬまま進めるんじゃなくて、誰かに相談してでも物事を解決しようとする事だよ。ね？」

そしてはにかんだ笑顔のまま頭を撫でられる。それに対して、また頬をかく癖が出てしまつた。

そんな私の様子にクスクスと笑いながら、サナが今回の相談に評価を下してくれた。

「大変よく出来ました。松平さんのためにもがんばろうね龍ちゃんやつぱり君と一緒にいれて良かつた。2年前の私よ。良く勇気をふりしほつて告白した。

続けて出された食事も絶品で、最終電車の時刻まで楽しいお喋りの

時間が続いた。

終電のために9時頃に店を出たのだが、この時間になつてもトラックが走っている。随分遅くまでご苦労様だ。

「気のせいかも知れないが、大型トラックがかなり走つてないか? 「そうだね。ここ数ヶ月本当に多いよ。市内も郊外も凄い勢いで工事してるね。場所がなさ過ぎて山も掘り出したとか。ただ、たまーに何か変な感じがするんだ。何が変なのかはよく分からんだけ

ど」

どうことだらうか? 彼女は何を感じ取つてゐるのだろう?

「じめん。そんな心配そうな顔しないで。気のせいかも知れないし。ほら、同じトラックでも車種とか積んでるもので音変わっちゃうし、石油が動力源なのもかなり少ないけど走つてるしね。何が変なのか分かつたらすぐ伝えるよ」

「分かつた。何か分かつたら頼むよ」

店から地下リニアの改札口までの道のりはお互ひ無言で歩いていつた。

言葉がなくとも分かることがあるとこど、カッ口つけすぎだが、お互ひに口を閉ざしてゐるには理由がある。

次の日も互いに別の遠い所で、仕事がある。その仕事に支障をきたしてまで、もうちょっと一緒にいたい。と言つるのは大人として良くない。

それに私も責任ある立場の人間だ。部下に示しをつけなくてはならない。

だからこそ、お喋りはしない。お喋りは確かに楽しいが、時間が過ぎるのが早過ぎる。
無言で体感時間を引き延ばして、少しでも一緒にいる感覚を楽しむのだ。

サナの方もそれを分かつてくれている。本当に氣の利く子だ。
ただ、それでも別れの時間はやつてきて、改札口で別れの挨拶をする。

「また、じつに来るとそれは連絡する」

「うん、待ってるよ。おやすみ」

「おやすみ」

繋いだ手を離して改札口を通り。

きっと見えなくなるまで立っているんだらうなと思つて、ホームに通じる階段を降りる前に振り返つてみると。

「いなー……まあ良いか」

ため息をつこうとした瞬間に柱の影からひょいこり現れて手を振つてきた。

どつきりに成功したと思つているのだろうが、楽しそうな笑顔で笑つていて。

「やっぱりかなわないなあ」

最後に素敵な悪戯をされて、私の//アヤマ出張は終わった。

第九章「訓練生卒業」

第九章「訓練生卒業」

翌日、菱田重工からの納品予定書の確認をとつていたら宮野大将から極秘回線を使った通信が入った。

「おう！ 坂本元気にやつてるか？」

「相変わらず極秘回線で発せられる挨拶じゃなくてすね」

いつものことなので、最近はそこに付いてはあまり気にならなくなつてきたが、他の所に連絡する時はどうしているのだろうかこの人は。

「細かいことは気にするな。で、ここで早速質問だ」

宮野大将が言いたいことは予想出来てるので、こちらから先に言つて遮るうとしたが、少し遅れて同じタイミングで声が被ることになつてしまつた。

「「松平のところには行つたか？」」「「ですよね？」

私が声を被せたことに宮野大将は一瞬驚いて、笑い始めた。

「その調子だと、ちゃんとやれたみたいだな？」

「もちろんですよ。輸送品の偽装も発注書や納品書などの書類も偽造してきました」

もし、昨日行つてなかつたら大変なことになつていたな。行かなかつたら、どれだけやされていたことか。

「なんだ。せつかく教育的指導でもしてやううかと思つたのだが、うまくやりあつたか」

嫌みに近いことを言つてはいるが声は嬉しそうだ。

こちらも自慢氣味に精一杯の演技がかつた声で攻撃をする。

「ふふ、男子二日会わざれば刮目してみよ。つて所でしょうかね」

「言つようになつたな。まだケツの青いひよつこ大佐め」

その反撃に冗談のカウンターを合わせる。今日こそは負けませんよ。

「ケツが青くてひよっこでも、あなたの弟子ですかね。そういうの親鳥くらいは軽く超えていますよ？」

「フハハハ、本当に言つようになつたな。まつ、後はそれをちゃんと他のお偉いさんの方で言えれば一人前だ。ではそろそろ本題に入るか」

いつも通りの宮野大将との愉快な問答が終わり、本気になつた声で本題に入る。

「で、今回はどうんな悪いニュースを持ってきたんですか？」
わざわざ極秘回線を使つてているんだ。基本的に悪いニュースのやりとりが多い。「ぐまれにからかうためだけに使われることもあるんだが……さすがに国境資源会議が近い緊迫した時にそんなことをする人では無い。

「悪いニュースとは断定出来ないが、多分悪いニュースになるかもしれん」

いつもの歯切れの良さが無い。まだ確定していない情報なのだろうか。

「諜報部からの知らせだが、廃棄予定で放置されている大型艦船が行方不明になつていてる事件を知つていてるか？ 1年ほど前から何度かあつたが、最近増えてるらしいぞ」

全く聞いたことが無い。素直にここは話を聞きだすことにする。

「いえ、初耳です。廃棄されるような艦船が行方不明になることが問題になるのですか？ 資源回収が出来なくて困るという話ではないですよね？」

「もちろんだ。ちなみに廃棄艦船が行方不明になつている事件は我が国では無いぞ？ ヤポネから海を隔てて東の方にある石油産出国の数カ国だ」

そんなことになつてているとは知らなかつた。しかし、石油産出国となると少しきな臭くなつてきた。

「なるほど。ヤポネを標的とした多くの団体が潜んでいる所ですか。確かにそれは悪いニュースかもしませんね」

「ただな、分からぬのが無くなつてゐるのが軍艦ではなく、大型のタンカーや旅客船なのだよ。潜入中の工作員によると、廃棄にも金がかかるから、無くなつたことに対しても元所有者達も大喜びしているそうだ。だが、どうにも変だと思わないか？」

廃棄艦船を資源として各部品をばらして販売すれば、そこそこの活動資金にはなるのだが、心配しているのはそれではないだろう。

「戦闘力自体はない艦船ばかりですね。共通しているのは……先ほどからの説明だと大きいということだけですか？」

「その通りだ。小型艦船には手がつけられないらしい。多少の札束になるとは言え、大金に手を出して小金は取らない連中という訳ではあるまい？ むしろ金目当てなら盗みやすい小型艦船の方が安全なはずだ。わざわざ大型の艦船を盗めば、それだけ目立ちやすくなる。何か臭う気がするんだが……」

なるほど。富野大将の歯切れが悪い訳だ。事件を解くための情報が足りていらない。

「確かに悪いニュースといえば悪いニュースですが、これではどうすれば良いか分からないですね。富野大将が言うように何か裏がありそうと言えばあります」

「だから言つたる？ 断定ができるとな。だからこそだ、頭の隅にしつかり置いておけ。いついう時期だ。警戒し過ぎてし過ぎる」とはない」

富野大将の言う通りだ。寡兵で勝利するには相手の油断を突かなくてはならない。

少数の敵でも、全く意識しない方法で攻められると、対処までに時間がかかり、甚大な被害を受けてしまうことが十分にありえる。まして、それが大部隊なら尚更だ。

「了解しました。情報感謝します」

「こっちでも色々調べておくが、何か思いついたらすぐに連絡しろ。こんなもんの予測は当たらない方が良いんだがな。矛盾しているかもしれないが、我が輩や君の考えが、外れることを期待しているよ」

宮野大将の少し不安な声というのも珍しい。それだけ困惑しているのだろう。

「んじゃ、通信終了だ。またな」

「失礼します」

宮野大将との通信も終わり、書類仕事の続きを片付けることにす。午後に菱田重工からの第一便が到着するはずだ。今日は迂回路でやってきた第一世代型の試験用装備なので、オヤジさんを始め整備班は大変だろう。

時計を見ると10時30分を表示していた。予定を見るとこの日は候補生達の基礎戦略行動が11時から入っている。

大層な名前がついているが、実際のところは指揮官の命令に合わせて動くことが出来るかの訓練だ。

非常に基礎的な物だが、他の基地に引き渡す卒業前に、どうしても確認しなくてはならない。

そんな基礎も出来ないのであれば、せっかく育てたパイロットが犬死にしてしまうからだ。

後退すべきに後退し、前進すべきに前進する。

指揮による前進の結果、部下が死ぬこともあるだろう。ただ、それがしつかりとした作戦ならば犬死にではない。残念ながら名誉の戦死というしかない。

しかし、作戦の流れに反して死なれてしまつては、まさしく犬死にだ。勝利のために立てられた計略全てが無意味な物となってしまう。だからこそ、この基礎的な訓練が最後にある。

死んだ理由を彼らのせいにしないためにも。いや、死なせないためにも、パイロット候補生達の教育を担っている一人として、指揮官の一人として、今日の訓練も手を抜くことは許されない。

気合いを入れて最後の訓練を行うためにガレージに赴く。

少し早めにガレージに着くと田口軍曹が既に待っていた。互いに敬礼をして挨拶をすませる。

「田口軍曹、今日で候補生達の訓練も最後か」

「肯定です。来月の頭には異動先が決まるのですよね？」

「そうだ。今日は3月20日か。早いものだな」

一年に及ぶパイロット訓練が終わる。訓練のある日は賑やかだったガレージも次の候補生が入ってくるまで、少し静かになりそうだ。

「寂しくなるな軍曹」

「そうですね。ですが、それよりも嬉しさの方が強いです。彼らは立派に育ってくれました」

少し鼻声になつていて聞こえた。これは後で泣き出すかもしない。

「軍曹、私が小学校・中学校の頃、何故卒業式で教師は泣くのだろう？と不思議に思つたことがあるのだが、君を見ていてその疑問が解決しそうだ。君は実に良い教官だと思う」

訓練過程の終了通知がなされる時に、我慢しないで泣いても良いよう、先に予防線を張つておく。

そんな私の予防線に軍曹は照れた笑いを返してくれている。やはり少しでも命を落とす可能性のある戦場よりも、教官として活躍してもらいたいと思う。彼にはもっと多くの者を育てて欲しい。以前考えていたことを今伝えるか。

「田口軍曹。前線に出るパイロットを止めて、本格的に教官としてやつていかないか？君にはこれからも若いパイロットを育てていって欲しい」

「ほ……本気でおっしゃっていますか？」

驚きのあまり上手く舌が回っていないし、軍曹が目を丸くしてこちらを見ている。相当驚いているようだ。

「本気だ。先ほどの言葉も含めて全て私の本心だ。引き受けてくれないか？」

田口軍曹は少し考え込むように腕を組んで下を向いてしまった。

私も田口軍曹の決断に息をのむ。

「分かりました。私でよろしければ、これから先も私の持てる全て

を次の世代に伝えてこきます

「助かる。ありがとうございます」

お礼の意味を込めて手を握る。彼と起こした恋騒ぎの時とは逆の構図だ。

その時と心境が随分違つて笑つてしまつ。

「では軍曹。暫定教官最後の仕事だ。ともにがんばるとしよう」

「イエッサー！」

軍曹からはいつもより気合いの入った返事が返ってきた。

訓練の時間になり、候補生達が集まってきた。田口軍曹の号令で候補生全員が気をつけの体勢から休めの体勢に変わつた。

そして、私の合図で最後の訓練が始まる。

「候補生の諸君。今まで一年よく頑張つてきた。なんと今年は候補生50人全てが脱落せずにこの最終訓練まで残つている。非常に喜ばしいことだ。ただ、最後まで気を抜くな。戦場ではちょっとした気の緩みが命取りだ」

ここで一旦話すのを止めて、大きく息を吸い込み声量を大きくする。「諸君らが死ぬこと無く、退官する最後の日まで生き延びる力を持つていることを今日！ 今ここで！ 私に示せ！」

「「サー！ イエッサー！」」

私の挨拶にとても声の大きい揃つた良い返事が返ってきた。どうやら心配することは無さそうだ。

「では、軍曹。後は任せたぞ。私は一足先に司令室に向かう」

「了解しました。候補生諸君それぞれの機体に乗り込み合図を待て。よし、行つてこい！」

「サー！ イエッサー！」

田口軍曹の合図により候補生達は各自の機体に向かつて走つていった。

ガレージを後にして司令室に向かつ。田口軍曹にはその間、機体の搭乗時間や準備時間などを計測してもらつていい。

司令室に到着すると橋をはじめとするオペレーターの準備が完了しているようだつた。こちらも最終確認だ。

「みんな準備は出来てゐるか？」

「肯定です。いつでもどうぞ」

目を閉じながら、大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

クリアになつた頭で、マイクを手に取り声を張り上げる。

「パイロット訓練過程、最終単位、基礎戦略訓練開始。全機出撃！地上にあるガレージから候補生達の機体が次々に出てきては飛翔する。

空に上がつた機体が、5機1小隊制でそれぞれの小隊ごとに横並びのフォーメーションをとる。

さすがに50機によるマッピスの整列となると壮観だ。

この後みつちり1時間。ひたすら私の号令に従つて候補生が分散したり、合流したり、陣形をとることが続いた。

長い時間をかけても彼らの行動精度はほとんど落ちなかつた。本当に今年の新人は良いのが育つた。

田口軍曹が持つてきた待機状態にいたるまでの時間も規定範囲内だった。

判定結果はもちろん合格だ。手元にある候補生達の資料に訓練過程終了の印を押す。この1年、実によく頑張つてくれた。

帰還した候補生全員をホールに呼び出して、訓練課程修了の証明書と資料を手渡し、訓練課程修了の挨拶を行う。

「諸君、1年間の訓練過程をこれにて終了する。今から君たちはマップスの正規パイロットだ。これから多くの困難が君たちを待ち受けているかも知れない」

私の頃とは違つて、戦闘時に対マッピス戦が多くなつてゐる。一方的な戦闘はほとんど起こりえないだろう。だからこそ、彼らの覚悟を問う必要がある。

「その困難はこの一年間の訓練が可愛く思えてしまうことだらう。だが、忘れるな。君たちはこの国を守る力を手に入れた。君たちの力でその困難を取り除かなければ、力なき君たちの親、兄弟、友、恋人、全ての国民が君たち以上の悲しみを背負うことになる。君たちは彼らを守るためにどんな困難にも立ち向かう覚悟はあるか？」

候補生50人が一斉に敬礼のポーズを取る

「「サー！ イエッサー！」」

気合いの入った声が部屋に響き渡る。この心構えを忘れないで欲しい。

「良い返事だ！ 諸君、おめでとう！」

私が拍手をし始めると、教官役であつた軍曹も拍手で続いてくれた。顔を見てみると涙が頬を伝つてゐるよつに見える。指摘すると「汗です」と返されると予想できるので、あえてつっこまないでおく。

そして、予想した通り感極まつて涙を流してしまつた軍曹を、新人パイロット達が取り囲みだして胴上げし始めた。何とも体育会系的なノリである。

各々が憎まれ口を叩いてはいるものの、顔と声の調子は笑顔そのものだ。

終わりよければ全て良しか、のど元過ぎればなんとやう。と言つたところだろうか。

そんな野球リーグで優勝したチームのような光景を微笑ましく思いながら眺める。

胴上げが終わると軍曹は袖で涙を拭いて、おそらく彼らの前ではしことがないであろう満面の笑みを浮かべた。

「よし、お前ら！ 今夜は俺のおこりだ！ 精一杯楽しむぞ！」

普段見ない顔で、普段発せられるはずの無い言葉が飛び出して、新入達はポカンとしたが、隣にいる者と確認をとりあつてざわざわする。誰かが叫び出した。

「イヤツホウ！ 今夜は飲みまくるぞ！」

その叫びに続けて一斉に雄叫びが上がり始める。
どうやらこの盛り上がりは当分收まりそうに無い。

後は軍曹に任せて食事でもしてこよう。

これは、今夜は大変なことになりそうだな。と軍曹の無事を祈りながら、

独り言を呴いてその場を後にした。

第十章「その男変態ヒツヨウ」（前書き）

今回は新兵器をちりりと紹介します。

第十章「その男変態につき」

第十章「その男変態につき」

最終訓練から5日後、菱田重工からの移送が全て終わった。おかげでヤポネ基地は地下ガレージと地上ガレージが全て埋まっている。

そんなここ数日間の話になる。

ヤポネ基地は今やちょっとした博物館状態だ。軍事マニアがやつてきたら狂喜乱舞しそうなカオス空間になっている。

しかも、移送が終わってから連日に渡り、ジャンクパートを使ってオヤジさんと松平がノリノリで新しい物を作り始めているので余計かさばっている状態だ。

新しい試作品と搬入された物からいくつか取り上げて、どういう時に使えるか考るために、ここ数日を反芻してみる。

まず一つ目に近接武器御用達の新オプションパートである回収用ワイヤーだったのだが、回収以外の使い道をオヤジさんと松平が一緒に考案して、銃剣用の接続部分をワイヤーの射出装置に改造することに成功した。

いくつかの試作品を携えて試験したときは近接得意とするパイロット達が楽しそうにブレードやダガーを射出しては引き戻して遊んでいた。中にはブームランのように弧を描きながら飛ばして引き戻す者もいる。射程距離はざっと50m。回収速度は1秒を切るか切らないか。格闘武器の距離では破格で不意打ちにはもつてこいだ。もちろん、近接武器を銃器から外した後も、人間で言えば袖に当たる部分に新しく増設されているワイヤーが収納されている小型の箱、ワイヤーボックスと繋げれば回収機能は維持出来る。

おかげで近接時の戦術の幅が広がった。

楽しそうに近接武器を飛ばしているパイロット達の様子を見て、調

子に乗つた二人は、もつと銃器に色々つけようと言い出した。

近接武器の距離延長はやつたから、次は最高のゼロ距離武器だ！とコンセプトを決めて、アイデアを得るために模擬戦のデータを見返すと、近距離時における銃器の鈍器化について討論を始めた。

その結果、何がどう転んだのかはさっぱり分からぬのだが、パイルバンカー型の銃剣の試作を始めたのだ。

何故そうなつたと二人に聞いたら「男のロマン」と答えられたのでそれ以上言及はしなかつた。

一本目はただ杭を打ち込むだけだったのだが、これではつまらない！と両者が呼応して、ただ単に杭を撃ち込むだけでは無く、炸裂火薬を撃ち込んだところに送り込み、装甲の内側から爆破して敵を破壊する謎の兵器が出来てしまった。

「これぞロマン！」とオヤジさんはご満悦だ。

確かに威力としては素晴らしいのだが、炸裂火薬を仕込んだ特殊杭なので、リードが必要になり、わざわざ他の銃器の弾丸を削つてまで予備弾薬を大量に所持する必要は無いと判断する者も現れ、基地のパイロット達からは賛否両論だった。

これに対しても改善の余地有りと一人は今日も研究をしている。

逆にみんな困惑したのがハイブリッドライフル開発コード・「ブリューナク」。稻妻のような槍。開発コードの由来はその威力と弾丸の見た目からだそうだ。

以前この基地で試験した化け物ライフルだ。銃の全長はマップスより大きい6m。普段は銃身が3段階に折りたたまれて長さは3mほどだ。何とか肩のハードポイントにつけることが出来るが、大きすぎて照準を安定させるために両手を使わなくてはならない。展開すると形は歩兵が使っていた対物ライフルのような造形をしている。

折りたたんでいるときは、1段目にグリップがあり手に持つ部分。

2段目に、やたら大きい2mくらいある拳銃のシリンドラー（回転式弾倉）のような物が弾倉の上についている部分。

一体何なのかと聞いたら、粒子コンデンサーと答えられた。ちなみにコンデンサーの癡に回転する。その形と様子からリボルバーとの部分は呼ばれているそうだ。

3段目に銃身^{バレル}部分が折りたたまれている。3mとちょっと長い。一応ライフルの形をしてはいるが規格外だ。

そして、何より驚くのが外付けのジェネレーターが必要なこと。ちなみにこの外付けジェネレーターが採用される前の試験段階では、チャージ時に他の行動が出来なくなるほどのエネルギーが持つて行かれた。

その欠点を払拭するために専用の外付けのジェネレーターを開発したそうだ。

おかげである程度動くことは出来るよつになつたが、あくまで動けるだけだ。

接地して止まらない限り、浮遊装甲や粒子シールドを展開できるほどの余裕が無い。

どうやら専用ジェネレーターの供給量以上に粒子を必要とし、本体のジェネレーターからも粒子をとるらしい。恐ろしい燃費だ。

燃費の悪さに隠れて見落としてはいけないのが、何と専用の弾丸を使わないといけないこと。通常弾頭だと弾が特殊な処理に耐えられないそうだ。おかげで運用コストもバカみたいに高い。

味方に敵からの防衛をしてもらつて、長々としたチャージの末にようやく一発の弾丸が発射出来る。これだけ言つとただの欠陥兵器だ。ただし、威力だけはどんな兵器よりも高いことは試験で試し撃ちをして見てている。

推進火力で発射した時は試験用の装甲板が何枚も吹き飛ばされて、溶けた。その時は空中に向けて発射したので何も無かつたが、水平に撃つていたらどうなつていたか想像もしたくない。事前に説明で注意しろ。と言われたときは疑問に思つたが、撃たれた結果を見て納得した。

マップスにぶつければ、おそらく浮遊装甲を展開していても吹き飛

ばされる威力だ。

防ぐ方法は弾丸を浮遊装甲に当てて出来る一瞬の停滞時間に全速で射線から大きく逃げること。

ただし、そんな動きはこの武器の特徴を知らない普通のパイロットには出来ない。

弾丸が光っていて大きく見えることくらいしか、ロングレンジライフルの弾丸と見た目は大きく変わらないのに、その一瞬の輝きで防御を捨てる判断を出来る人間がいるとは思えないのだ。

当たりさえすれば、相手に防がれようが直撃しようが撃墜出来る威力である。

逆に言えば当たらなければ全く意味が無いじゃなか、非常に不利な状況で戦わなくてはならない。

そんな当たりさえすれば、最強の遠距離武器という非常にロマンあふれた武器になっている。

現存しているのは、このヤポネ基地に運ばれた3丁と首都にある菱田重工の工場で保管している2丁の計5丁だそうだ。サイズが大きすぎて運びきれなかつたらしい。

正直言おう。使い所が本当に分からない。旧式兵器にはもうひんやり普スに対しても過剰火力だ。

しかも、高速で移動できる機体を正確に直撃させる腕が必要だ。このライフルが何を目的に採用されるのか松平に聞くと

「一つは、まだ見ぬ新兵器に対する万が一のための保険だね」と答えられた。以前言っていた大型兵器用といつことか？まだ実際に見たことがないので想像がしにくい。

ただ、もう一つは耳打ちで小さな声で伝えられた。

「もう一つは敵基地の破壊。何というか、えぐれるよ？」

何か恐ろしい単語を口走った。

いや、確かに施設への攻撃なら動かないから当たりやすいが、表現がおかしい。爆破とかではなく、えぐれる？

「一応あれリミッターかけてあるからね？ 本気出したらそれくら

いしかやえるかも。理論上だから実際にやつたことは無いんだけどね」

「口一コしながらとんでもないことを口にしてきた。

リミッターありで今の過剰火力だと? 「冗談だろ? いや、松平は兵器に関して不思議な例えをするが、冗談をいう人間では無い。本気だ。

「どうかこれは攻城兵器だつた訳か。ようやく納得が行つた。そして最後にもう一つと付け加えられた。

この自慢げな顔をされたら言うことは大体予想がついてしまう。

「僕の趣味。ロマン武器作つてみたかったんだよね・チャージから射撃までの発射シーケンスつて最高に燃えない?」

やっぱりか。松平らしくて非常に分かりやすい理由だ。マップスが人型になつた理由を思い出して苦笑いする。ただ、彼の作った物は思わぬところで役に立つことになるかもしれないでの、絶対にバカにしない。

攻城兵器以外の役割で、私はこのハイブリッドライフルの使い道に悩んでいたのだが、この基地に所属するパイロット2名が何故か興味を持つてしまった。

ガンドック5の石山と、めでたく新人パイロットとなり、キーナ基地に配属が決まった元クロスボウ1の武田だ。

その破壊力とコンセプトにどうやら二人とも魅せられたらしい。二人に言わせると、この極限まで一撃にかける感じがたまらないそうだ。

実機による訓練では、専用弾ではなく、練習用のペイント弾による発射までの間隔と弾道の感覚を掴む練習をしている。

シミュレーターでは松平にデータを作つて貢つて、小隊メンバーを巻き込みながら、発射までの護衛などの特別訓練を始めるくらいはまつてている。

シミュレーターに付き合つた小隊長の犬塚に、小隊での使い勝手を聞いたら、あそこまで緊張する武器はありません。と答えられた。

私も自分の部隊にあれを使う奴がいると考えると頬もしい反面、すごく恐ろしい。

防御力も回避能力も最低まで下がった味方を守るのは非常に骨が折れるし、何よりも撃墜されてしまうのではないか？ というプレッシャーが凄いだろう。

そして何よりもその効果範囲。チャージ方法にもよるが、ちょっと洒落にならない。下手に射線に近づくと巻き込まれる。

ただ、道具というのは使い方次第だ。常に頭の中の選択肢として残しておこう。

自分が使える。という部下が一人もいるのだ。ならそれを活用する方法を考えるのが私の仕事もある。

ちなみに、このスナイパー二人が松平に感謝した言葉は何だったと思う？

使うと言った一人にはこのハイブリッドライフルの最後の開発理由は伝えてある。

人によっては悪口だが、ある意味最大のほめ言葉。

「『ありがとう変態！』」

その時の松平は少し泣きそうな顔で笑っていた。

「まいったなあ……褒められてるのかなこれ？ どういたしまして？」

その声は少し嬉しそうだった。

第十一章「ハガネの指揮官」

第十一章「ハガネの指揮官」

4月25日。特に大きな事故や事件もなく、ついに国境資源会議の前日となつた。

今日は警備に向かうパイロット達に対して最終確認をするために、ブリーフィングを行う予定になつてゐる。

今回の警備に当たつて貢うのはAWACSのホークアイとガンダック小隊。そして新編成されたライン小隊だ。

ライン小隊は武田を隊長機とした新人が集まつた小隊だ。

遠距離攻撃の技術が重要な作戦となるので、基地内にいるスナイパー全員に競技をしてもらつたところ、新人の連中がかなり上位に来たので、今回は特例ながらも参加してもらうことになつたのだ。

ブリーフィングルームに入ると既に全員が待機していた。

全員の出席を確認し、私は首都の俯瞰図をモニターに表示しながら説明を開始した。

「では、作戦を説明する。今回の作戦は首都ミヤトの警備、及び緊急時における護衛と遊撃だ。何もなく事が進めば、君達は上空5kmで指定されたこの範囲を巡回するだけだ。まずはここまで、何か質問は？」

一旦ここで切つて何事も無かつた場合の質問を受け付ける。

次からが本題なので余計な質問は早々に除去しておきたいのだ。

数秒待つても手が上がらないので、特に何も無いと判断し、次の説明に移る。

「次に、緊急時の説明に移る。想定される敵は、反ヤポネのテロリスト集団だ。目的は恐らく両首相を捕らえて、様々な経済的もしくは政治的な交渉を有利に進めることだろう。最悪のケースはただ破壊を目的にすることだな。そこで、我々の仕事はテロリストの制圧

と首脳の護衛だ。特に戦闘車両やマップスといった兵器に対する対処がメインとなる。敵の目的が前者だった場合は、首脳を失った瞬間にゲームオーバーだ。必ず生かして待避ポイントまで護衛しろ」そして、市街戦だからこそその条件を説明しなくてはならない。

警備打ち合わせで決定した交戦規定だ。

「緊急時には周辺の市民の待避が済むまで戦闘行動が制限される。制限内容は、こちらからの攻撃は敵の真上からの狙撃のみ許可される。ということだ。彼我の射線に建築物があつてはならない。およそ、10分程度で市民の避難が完了すると想定されるが、その後も出来る限り、都市に被害を出さないように戦闘して欲しい。また、避難が済んでいない地区での首脳護衛は非常に難しい局面となる。確実に攻撃を防ぎ、確実に攻撃を当てて敵を撃破しろ。交戦規定について何か質問はあるか？」

犬塚と武田の両小隊長が手を挙げた。先に犬塚を指名し質問を出してもらひ。

「敵部隊が空中戦をしかけて来るときはどうなるのでしょうか？」
警察庁長官と同じ事を聞かれたな。いい質問だ。

「常に敵の上に位置するよう回避と防御を優先しろ。発砲は許されないが、上方からの格闘攻撃は許可する」

海軍が引きつけてくれているとはいえ、空中戦の可能性はゼロではないのだ。これが、近接攻撃が得意なガンドック小隊を派遣する理由である。

「了解しました」

説明に納得してもらえたようなので、続いて武田の質問を出してもらつた。

「想定される敵の数はどうなっていますか？」

随分と困る質問だ。正直などころ全く予想がついていない。

「残念ながら分からぬ。AWACSがついているとは言え、いつ、どこで、どれくらいが、どのように、動かれるか分からぬ状態だ。よつて基本的にサーチ＆テストロイとなる。こちらでも注意するが、

奇襲をはじめとする罠が張られていると常に心がけておけ

「了解です」

今の質疑応答でまた新たに質問が出るか待つてみたが、続けての質問は来なかつた。

「次に諸君の役割分担について再確認だ。ホークアイは最高高度で常に情報を収集し、全軍に送り続けてくれ。次にガンドック小隊はガンドック5による狙撃を攻撃の主軸とし、他4機で全体の援護。そして空中戦での近接攻撃を主に担当してもらう。最後にライン小隊はライン1とライン3が狙撃を担当。他3機は浮遊装甲で敵の攻撃を防いでほしい。これについて何か質問は？」

……特には無いよつだ。皆自分の役割が分かつていてくれて大変ありがたい。

「武装については対マップス用の装備だ。菱田重工の松平技術顧問と整備主任が製作した武器のオプションは各自で判断しろ」

皆の反応を見ると少しだけ武田が残念そうな顔をしている。市街地でハイブリッドライフルは禁止だ。威力が強過ぎて被害を出しかねない。

「では、解散。各員オーカシス基地へ向かい。ゆっくり休んで明日に備える」

首都まで結構距離があるので、明日の早朝から警備をすることになるとキーナ基地からは間に合わないため、徳川大佐に派遣部隊の受け入れを申請してある。

次に彼らと直接顔を合わせるのは会議後だ。

「「イエッサー！」」

「よし、行つてこい！」

私は緊張感に満ちた隊員を見送り、一旦執務室に戻つた。

執務室に戻ると、緊急という留守録が残つていた。

宮野大将から秘密回線による通信の準備をしろ。と残されている。こちらの準備が出来たことを通常回線で知らせると、今回は何故か

サナも参加することを伝えられていた。

宮野大将とは何度か各国の事件について意見交換をしあつたが、何か情報解析班の方で掴んだのだろうか？

通常回線を切るとほぼ同時に、秘密回線による通信がこちらに入つて来た。

一つは宮野大将から、そしてもう一つ情報部からも来ている。これは恐らくサナだ。

「すまんな坂本。今日は楽しいお喋りは無しだ。まずいことになつたぞ」

珍しく焦った声をしている。一体何があつたのだろうか？

「まさか既にテロリストが現れたとかですか？」

「それに近い。澄川君説明してやれ」

「坂本大佐。以前お伝えした違和感が判明しました。土砂が積まれていたトラックの音が普段より重かつたのです。恐らく何か大きい重い物を運んでいたと推測されます」

悪いことしか連想出来ない単語が並べられた。

「まさかとは思いますが、その中に何かしらの兵器が隠されていた。ということですか？」

当たつて欲しくない想像ほどよく当たるようだ。宮野大将が重い口振りで肯定した。

「そう我が輩も考えている。先程の澄川君の話を聞いて、急いで郊外に設けてある埋め立て用土砂置き場の確認に向かわせたところ、監視員からある日突然山が小さくなつた報告を受けたそうだ。その時はどこかの業者が勝手に持ち出したと思ったそうだが、その後持ち出し報告は来なかつたらしい。現在、他の連中にも協力してもらって、潜伏先を探索している最中だが、明日までに見つけられるかは分からん。明日は荒れるぞ」

「すみません。ここ一ヶ月間、違和感のある音が聞けなかつたので、てっきり私の勘違いだと思っていたのですが、逆にそれがヒントになつてようやく違和感の正体が掴めたのです」

彼女が感じていた違和感の話を聞いたのは1ヶ月前だ。そうなると、かなり長い間潜伏していることになってしまいます。

つまり綿密な計画で動かれている可能性があるということだ。

「いや、澄川さんが責任を感じる必要は無い。富野大将、こうなると例の艦船の事件も関わりがあると思いませんか？」

綿密な計画をテロリスト達が立てているということは、彼らの拠点にあつた艦船を使って、何かを仕掛けてくる可能性がぐっと上がることになる。

「君が以前話したものか。海岸沿いに配備されている部隊が首都に向かえないようにするためのデコイ。確かに不審物を放つておいて損害を受けてしまつ訳にはいかないからな。ある程度の時間稼ぎは出来るだろうが……。む？ どうした？ 今通信中だ」

どうやら部屋に誰かが入ってきたらしい。声は落ち着いているので部下のようだが、どうしたのだろうか？

通信機越しに部下の報告に驚いている富野大将の声が聞こえる。恐らく何か良くないニュースが舞い込んできている。

「富野大将どうなされました？」

「どうしたもこうしたも、訳がわからん。行方不明の大型艦船の一部がレトリア連邦で発見されたそうだ」

東部石油産出国で失われた大型艦船が、軍事大国のレトリア連邦で確認された？ 何か特殊な改造でも受けているのか？

「富野大将、その艦船は何か改造された様子はありますか？」

「わからん。ただ、外観には変化が無いようだな。クソ、資源会議直前で次から次へと面倒ごとが増えるとは」

「お一人とも落ち着いてください。とりあえず今は、存在が明らかなテロリストの対策を考えみてはいかがでしょうか？」
サナからの提案で突然の知らせに、飛んでいた思考が一気に引き戻される。

落ち着いて頭を整理しよう。サナの言っていた違和感とは何だった？

「澄川さん、もう一度確認を取らせててくれ。確か君の感じ取つた違

和感というのは土砂じゃ無い何かが、土砂として運ばれていた。といふことで間違いないか？」

「はい、その通りです」

よし、となると多分そこは間違いなく何かの兵器を運んでいたことになる。

「次にお一方に確認を取りますが、ここ数ヶ月の間はトラックをはじめとする大型車両や重機が多くなかつたですか？」

「そうだな。言われてみれば多かつた気がする」

「多かつたです」

それは一日行つた私も感じ取つたことでもある。そして今一人とも実感があるということはだ。

「となると、一度埋めた兵器を、事業者に紛れ込んで、物資や兵器の運搬をしているとは考えられませんか？　ここ最近、首都圏内で開発された大型施設もしくは巨大倉庫や工場というのはありませんか？」

「ふむ、そういうことか」

どうやら富野大将に私の考えは伝わつたらしい。

「建築業者や運搬業者を装つて、搬入を自然に行える先がそのリストで、その施設に兵器やテロリストを潜伏させている。こういうことだな？」

「はい、その通りです。確かに最近は建築ラッシュ。労働力が安い外国人を違法で雇う企業が現れても不思議では無いかと」

富野大将がうなり始めた。恐らくこの考えを吟味しているところだろう。

「なるほど。当てずつぽつりマシか。他への連絡は我が輩からしておぐ。艦船の方だが、これは海軍の方に再度警戒するように通達するくらいしか出来ないな。後は任せておけ」

「了解しました」

「情報解析班の方でも何か分かり次第連絡します」

この通信が切れたらすぐに派遣した2小隊に連絡を入れよう。

明日は戦闘になる可能性が非常に高くなってしまった。指揮官になつて初めての実戦となるかも知れない。正直怖い物がある。パイロットとして初めて戦場に向かつた時とはまた違う怖さだ。

「では、お互いかあれば、すぐ連絡を入れて貰うぞ。通信終了だ」

「了解しました。失礼します」「

応答で少し声が震えてしまったかも知れない。サナの声と被つたので恐らく富野大将には聞こえないだろうが、まさか怖さで声が震えてしまつとは思わなかつた。

サナの通信はそこで切れたのだが、富野大将の咳払いが聞こえる。

そして、富野大将が優しいような厳しいような声で喋り始めた。

「坂本。今のお前はあくまで指揮官だ。パイロットで小隊長じゃないからな？ 自分の出来ることは限られてくる。お前は戦闘中の部下達にライフルで援護射撃や、浮遊装甲で防御するといった直接の助けをしてやることは出来ない。ただ、代わりにだ。その頭を使つて上手くやれば、部隊全員を死地から生きて返してやることも出来る。お前はこの先、敵を多く撃墜するエースパイロットという英雄にはなれん。どれだけ敵を倒したかよりも、どれだけ部下を生きて帰してやれるかが私達指揮官の能力だ。それを忘れるな」
ビビッていたのがばれていたようで、発破をかけられてしまった。思わず励ましに感謝して胸が熱くなるのを感じる。

「肝に銘じておきます」

「うむ、では今度こそ失礼する」

その言葉の通り、今度こそ通信が両者とも切れた。

通信が終わり、頭の中で都市部における様々な奇襲方法の想定をしながら、司令塔に向かう。

派遣した小隊に先ほどのテロリストが潜伏している情報と対策の連絡を入れるためにだ。

頭の中が焦りで混乱しかけたころに、携帯端末に着信が入つた。

表示を確認するとサナからだつた。

「どうした？ また何か分かったのか？」

「ううん、そうじゃないんだけど、何か不安そうだったから大丈夫かな？ って」

やれやれ、私も自覚があったとは言え、宮野大将も、サナも良く気づくよなあ……。この二人には隠し事は永遠に出来そうに無い。

「初めての実戦になるからな。正直少し怖い」

「ごめんね。私がもうちょっと早く気付いてれば、こんなギリギリで焦ることは無かつたんだけど」

少ししょんぼりとした声で反省の言葉が告げられた。

確かに気付くのに時間がかかったが、自分を責めて欲しくない。

情報というのは戦いにおいて重要な要素だ。

彼女の情報が無ければ、予想外の攻撃で大変な被害を受ける可能性もあった。

今ならまだ準備が出来る。

「さつきも言つたがサナのせいじゃない。むしろ良くちやんと気付いてくれた。少しの時間でも準備が出来るんだ。その時間で宮野大将が言つたように、頭を使って何とかするさ」

これ以上不安を増やすないように、心配させないように精一杯明るい声で話す。

「ありがとう。やっぱり龍ちゃんは優しいね」

どうしようか？ この非常事態に顔が熱くなっている。

「無理しちゃ駄目だよ？ 今夜は早く寝ること。居眠りしながらの指揮は厳禁だからね？」

まったく……前と違つて今の私はそんなにサボつてないぞ？ 緊張していた頭が一気にゆるんで、少しきつとした気がする。

「分かってるよ。夜にまたいつも通り電話してくれ。その時にまた今度を頼むよ」

心の中で続きを呟く。

……多分、緊張して眠れないからな。

そのつぶやきに気付いたかどうかは分からないが、いつものように

楽しそうに笑われた。

「あはは、仕方ないなあ。分かった。ちゃんと連絡するね」
声には出さないが、おかげで頭が落ち着いた。ありがとう。と感謝をする。

その後、派遣した部隊に明日は戦闘になると連絡を入れた。更に、徳川大佐と毛利大佐、そして警察庁長官に通信を繋げ、お互いの連携の確認もしあい、奇襲に備えての動きを再確認した。さすが歴戦の指揮官達だけあって落ち着いて対策を再検討していく。基本的には打ち合わせ通りだつたが、市内に歩兵を潜伏させ、市内の警備を強化することで同意した。

その後は、テロリストの捜索の続報を夜まで待つたが、一步遅かつたようで、どうやら各地の大型施設は既にもぬけの殻だつたようだ。何者かが生活した痕跡はあったのだが、テロリストは発見出来なかつたそうだ。

戦闘が起きずには済めばと祈つていたが、残念ながら、潜伏しているテロリストとは当日に戦闘する事になりそうだ。

そして、その予想通り、私は第一世代型マップス開発コード・ハガネで編成された部隊の指揮官として、初めて戦うことになる。

サナから早く寝るようじ。と短い電話をし終えてベッドで横になりながら考え事をする。

しかし、分からぬ。一体どうやってテロリストは潜伏させ部隊を消した？

何かを見落としているのか。それとも、地下で見つけた生活痕が偽装で、そういう施設から目をそらせるためか……。

そんな答えの出ない考え方をしながら私は眠りに落ちた。

第十一章「国境資源会議開幕」

第十一章「国境資源会議開幕」

朝6時に目が覚めて、いつものように顔を洗い、軽い朝食をとる。コーヒーを入れて、端末を立ち上げる。
おはようございます。と機械音声が流れ、カレンダーに記載されている今日の予定を確認する。

4月26日

- ・全日……国境資源会議警備指揮

- ・全日……領空侵犯の警戒

「ついにこの日が来たか」

軍事大国レトリア連邦との国境資源会議の日だ。

ニュースサイトはもちろん国境資源会議がトップニュースだ。

様々な関連コラムが書かれており、ニュースサイトの閲覧ランキン
グの上位には多くの関連記事が載っている。

そして、いつも通りのスポーツや芸能記事も続いて並んでいる。

恐らく、今日から数日間ニュースがあるもので一色になるだろう。
それは残念ながら、変えられそうにない。

ならばだ、せめてその色を絶望感溢れるものでなくすだけだ。

「よし、司令塔に向かうか」

コーヒーを一気に飲み干し、端末を落とす。

今日は他のニューストピックを見ている暇は無い。

コーヒーカップを洗い、乾燥棚に置いて、個室を後にしてた。

7時30分に司令塔につき、オペレーター達に今回の警備に参加する基地との通信をつなげて貰つた。

司令官用の机のモニターに徳川大佐と毛利大佐が映っている。

どちらも私よりも先にスタンバイしていたのか。しまったな。

「おはよう。坂本大佐。昨日はよく眠れたかね?」

毛利大佐から少しドスが効いている声がする。そして、何故か両名の表情が少し怖い。

まだ、規定の時間より早いハズなのだが、どうしたというのか？
とりあえず、落ち着いて対処だ。

「ええ、皆様が優秀な方ばかりなので、おかげさまで。とにかく、何があつたのですか？」

私の返答に対し、何故か徳川大佐はがっくりと肩と頭を落とし、毛利大佐はうんうんと笑顔で頷き始めた。

「私の勝ちだつたようだな徳川大佐」

毛利大佐の勝ち？

「くつ、外したか。仕方あるまい君の勝ちだ。今度そちらに向かうよ」

何かの賭け事をしていたようだ。ただ、どういう賭け事をしていたのだろう？ と疑問がわいたので尋ねることにした。

「すみません。話が見えないのですが。何の賭けをしているのですか？」

私の疑問に徳川大佐が落としていた頭をあげて答えてくれた。

「ああ、すまんすまん。確かに君は今回が初めての実戦だろう？ 繫張して眠れるか眠れないかの賭けをしていたんだよ」

ああ、そういうことだつたのかと納得すると、毛利大佐が追い討ちをかけ始めた。

「な？ 言つただろ？ 私の見る目はまだ衰えていない」

「いや、お前が眠れるに賭けたら、選択肢は一つしかないから仕方ないだろ？」

「ならば、最初から乗らなければ良いではないか？ それに先程負けを認めたではないか」

「だから、せめてレートを下げてくれ」

ワーワーと五十近い2人が言い争いを始めてしまった。
割つて入れる雰囲気では無いので、とりあえず、治まるまで待つことにした。

五分ほど言い争いをした後、2人とも何故かかなりスッキリとした表情となっていた。

一体何が起きているのか？と疑問に思つてたら、こちらの心境に気付いたのだろう。毛利大佐が先程までのやりとりを説明してくれた。

「おつと、坂本大佐を仲間外れにしてしまったようだ。熱くなりすぎたな徳川大佐」

ハハハ。と2人が笑いあつてから、また説明が続けられる。

「先程の賭けと言い争いなら氣にするな。ちょっとしたジンクスだ」今やりとりが験担ぎだったのか、意外とプライベートでは愉快な人達なのかもしない。

「毛利大佐。どうせなら坂本大佐にも混ざつて、やつてもらうとうのはいかがかな？」

狐のようにつり上がつた毛利大佐の目がキラリと光つたように見えた。

「よし、今度は何を賭けの対象にしようか？」

どうやら私の意志とは関係なく、巻き込まれてしまつたらしい。

2人が楽しそうに悩んでいると新たな通信枠が出現した。警察庁長官だ。

咳払いと共に挨拶をされる。

「おはよう。軍の諸君。今日はよろしく頼むよ」

「ハツ、こちらこそよろしくお願ひします」

二人の声が、さつきまでの冗談めいた口調から一気に固い声の調子に変化した。すごい対応力だと感心してしまう。いや、感心してる場合ではなかつた。

私も続いて挨拶を返さねば。

「微力ながらお手伝いさせていただきます」

これで指揮者が全員揃つた。これを契機に、名々が自分の部下に指示を飛ばし、警備体制を整え始める。

「こちらビックハットよりオーカシス基地に待機中の全機へ、準備

は出来るか？」

隊長3人が代表して返事を返してくれた。

「アフマーティブ」

「いつでも行けそうだ。彼らの表情と声からは、焦りや不安も今のところ感じられない。

「よし、合図が来るまで待機」

空軍の方は準備が完了したと他の指揮官に伝える。

後は、他の三部隊の準備が終わるまで、待つだけだ。

「陸軍、準備完了だ」

「海軍の方も問題ない」

「全部隊準備が済んだようだな」

陸、海、空軍そして、警察による作戦の始まりが警察長官から伝えられる。

「作戦コード、ケルベロス。ミッションスター！」

参加者達の雄叫びが混ざりあって、まるで窓を激しく叩く大嵐のような音になつた。

そして、その轟音とともに全ての部隊が動き始め、私の部隊も指定された空域に向かつて移動を開始する。

ちなみに、今回の作戦名は警察庁長官の趣味だ。

陸、海、空といつづつの軍といつ頭が警察といつ胴にくつついた三首の犬。

言うならば（首都の番犬）と言つたところか。

ただ、やたら物騒な番犬ではある。子供達からの人気は得られそうにない。

打ち合わせで作戦名を決めるときに、長官からこの案が出された時は吹き出すのを堪えるので精一杯だった。

もっと堅苦しい作戦名を言つと思っていたので、50代中盤の男性にしてはファンタジー過ぎる。と心中でつっこみを入れていた。いや、外連味は大事なので悪くない作戦名だと思いますよ長官殿。打ち合わせの時を思い出して、少し思考が変な方向に飛んでしまつ

た。

そして、予定通りの時刻に、私の部隊が首都ミヤトに近づいているので、旋回の準備をするよう指示を出そう。

「ビックハットよりガンダックおよびライン全機、まずは指定空域の端を時計回りに回つてくれ。ホークアイは予定通り高度を上げて首都中央で旋回だ」

「了解」

現在の時刻は0830。

ここから先は1秒たりとも気が抜けない。

モニターに映し出される地図を見ながら息をのむ。

ガンダックとライン小隊が旋回行動を始めて30分後。

敵部隊の出現は確認出来なかつたので、予定通り両首脳の移動が始まつた。

警察の方から送られてくる映像を見ると、道路を最大限まで使って、公用車の周りをパトカーが最低でも三重に囲んでいる。多いところは五重だ。

そして、上空ではガンダックとラインの一小隊は、公用車との距離が一定になるように旋回を続けている。

「ホークアイ、レーダーに反応はないか？」

「今の所は不審な物は映つていません。粒子反応や熱源レーダーで検知される高エネルギー体は味方機のみです」

「了解した。そのまま観察を続けてくれ」

「イエッサー」

この移動するタイミングでは無いのか？

建物内にいられるよりかはターゲットが狙いややすいし、マップスの護衛も相手から見えては近くにいないので、兵器による奇襲にはもつてこいの状況なのが……。

そんな私の心配をよそに、公用車は順調に会議場に向かっていく。
「なあ、坂本大佐。先程の続きなんだが、今回の賭けは君が作戦中に混乱に陥つて焦るかどうかにしないか？」

軍用の回線を使ってこの状況でとんでもないことを徳川大佐が言い出したので、思わず驚いてしまった。

「徳川大佐この状況で一体何を？！」

「この状況だからこそだ。もちろん君は焦らないに賭ける。私と毛利大佐は焦るにかける。構わないだろ？」

毛利大佐もいつの間にか軍用回線を使っていて、一時的に警察長官は仲間外れになっている。

「なるほど、その話乗った。坂本大佐、私達との賭けに勝て。好きなもん食わしてやる。かわりに君が負けたら、キーナの最高級料理店を我々二人にごちそうしてもらおう」

全く、この国の将官達は眞面目に見えてどこか愉快な頭をしている。

励まし方がひねくれ過ぎだ。それとも照れ屋なだけなのか？

言い争いまでジンクスになつていてる理由がよく分かったよ。

「分かりました。でも覚悟しといつくださいよ？ 2人相手にしているんです。私が勝つたら2人分おごってもらいますよ」

ワハハと徳川大佐が大笑いを始めた。

「おい、毛利！ 上乗せ（レイズ）が来たぞ！」

「だから言つただろ？ 私の目に狂いはない。坂本大佐その度胸、実に私好みだ。その上乗せ（レイズ）に乗つてやる！」

ノリノリな2人のベテラン指揮官のおかげで、俄然やる気が増してきた。

ああ、人の士氣つてのはこういうことでも上げられるのか。勉強になる。

「よし、賭けも決まつたし秘密のお喋りはここまでだ。カシゴマ基地とキーナ基地のオペレーター諸君、今の話はくれぐれも内密に」司令室にいる全員が顔を見合させて苦笑いしている。ただ、2人のおかげで、緊張し過ぎない良い空気になつたようだ。

そんな中で深呼吸をして、自分の冷静さを確かめる。

心拍正常、呼吸いつも通り、喉の渴き無し、空腹感無し……。

よし、大丈夫いける。この賭けに負けるわけにはいかない！

覚悟を胸に刻み込み、モニターを見つめ直す。
出だしは非常に順調。

長い長い一日の、長い長い30分が終わり襲撃を受けやすい移動は無事に終わった。

4月26日時刻0930。ヤポネ、レトリア両首脳、国際会議場に到着。

警察庁長官から通達が入る。

「作戦第一段階成功。とりあえず、一安心といったところか」
安心するにはまだ早いが、確かに長官にとつては部下が一番危険に晒されるシチュエーションが一つ終わったのだ、
安心するのも無理は無い。
それでも、長い一日はまだ始まったばかりだ。
気を抜くわけにはいかない。

4月26日時刻1000国境資源会議開幕

第十二章「動を出す策」

第十二章「動を出す策」

午前中の会議はどうやら無事に終えたらしい。中継を見ていると今から毎休憩に入るようだ。とりあえず、今の所何事も起きていない。

この間に司令室にいるメンバーに交代で昼食と休憩をとるよう指示する。

私は持ち場を離れられないのでも、おばけやんと佳奈さんからオーギリの差し入れを貰っている。

「ビックハットより全機へ。今のうちに身体の方の補給をしておけ」長期戦で空腹状態になると士気の維持が出来ないのは、兵法の基本と留つた。

少し隙が出来るデメリットがあるが、士気の維持するメリットの方が強い。

「「了解」」

最近の携行糧食は宇宙食をもとに開発したパックに入っている。技術の進歩でなかなか味も良い物になっている。

蓋を捻つてあけると、一重構造になっている外側の袋が酸素と反応して熱を発し、内側の袋に入った食事を温めるスピード調理だ。

「不味くは無いんだけど、何かこうひいて吸い込むタイプだと、食った気がしないんだよなあ……」

ガンドック4が少し悩ましそうにぼやきだした。

「ゼリー やビスケット よりマシよ。なんなのあれ？ 容量のくせに

カロリー高すぎるわよ。ついつい食べ過ぎちゃってひどい皿見たわ

ガンドック2が釣られてお喋りを始める。
緊張した心の疲れをとるために、食事中くらいには賑やかにしてもうつても、構わないとthoughtたので、私語は放置する。

「いや、俺らつてカロリー取らなきゃ、やつてられないか？」

といふか、お前そういうの気にしてるんだな」

「本当にデリカシー無いわねえ……軍人やってるけど、一応女の子よ？」

「お前が女の子ねえ……何かの冗談だろ？」

「4今のは先輩が可哀想です」

同じ女性であるガンドック3から、呆れた口調で非難の声が発せられた。

「性別的には2は女性だろう。4お前は何を言つているんだ？」
ガンドック5……それは正しいが、ちょっと勘違いをしていると思うぞ。

司令室の皆もクスクスと笑い声を押し殺しながら笑っている。

「先輩……ここにも、もう一人ダメな奴がいました……」

「5、後でお説教です」

「え、何か変なこと言いましたか？」

そんなやりとりに、隊長のガンドック1がさらりと小さく呟く。
「やれやれ、相変わらず酷い話だ」

ライン小隊の面々もガンドックの会話に驚いていた。

「いやー、ハンデがあつた初回以外、模擬戦で勝てなかつたから、
よっぽど厳しい真面目な人たちかと思ひきや、思つたよりはつちや
けてるのねえ。私達もあれくらいやつちやう？」

隊長のライン1が妙な提案をしだすが、ライン3の沖田がうんざり
したような声でそれを止める。

「ライン1とライン2以外にもはつちやけだしたら、收拾つかない
よ？ 何で隊長と副隊長が君達2人になつたんだろう。僕はガンド
ック1みたいな真面目な人が、隊長だと良かつたよ」

「そりや、私の魅力じやないの？」

とライン1の武田が答え、

「俺は人徳だな」

とライン2の伊東が答える。

2人とも違う！と思わず通信でつっこみを入れそうになった。

武田を隊長に選んだのは模擬戦時に見せた視野の広さ、度胸の良さ、そして戦術立案から実行までの部隊指揮能力の高さから。

伊東を副隊長に入れたのは、その反射神經の良さから味方機の総合的な援護と、敵陣切り込みの際に部隊鼓舞が出来る威勢の良さ。そして、その一人の特性から隊長機の武田と相性が良いからだ。司令室からは見落としてしまう現場の情報を広く観察し、敵部隊の弱点部分に攻撃を集中、もしくは防御を崩すチャンスメーカーとして活躍出来る組み合わせだ。

「2人の考えは絶対に違うと思うよ……」

隊長と副隊長の滅茶苦茶な回答に頭を抱えながらライン3は溜め息をついた。

「まあまあ、良いじゃないの。暗いよりかは明るい方がマシよ？」
そう。攻撃向きの部隊はどんな時でもポジティブで無くてはならない。

この明るさも隊長になる資質の一つだ。彼らにはまだ冷静さが少し足りないが、この先がんばってつけてもらおう。

「何だかんだで、うちの部隊も十分はっちゃけてるよね」

ライン4がライン5と一緒に部隊の総括を始める。

「そうだな。ガンドックに負けず劣らず愉快だと思うぞ。ただ、まあ貧乏くじはライン3に任せることだな」

「勘弁してよもう……」

切実な声で2人の協力をあおるが残念ながら笑つてスルーされてい る。

私はそんな部下のやりとりを聞いて内心とてもニヤニヤしているのだが、顔には何とか出さずにいる。

良いチームじゃないか。これから先が楽しみだ。

と思っていたら、緊急通信が入った。その内容を聞いて、突然背中に冷たい水をかけられたような寒気がする。

「警察本部より全部隊へ、不審物の情報が入った。現在、部隊を向

かわしている。確認の報告が入り次第すぐ連絡を入れる「

「ついに来たか。ビックハットより全機、不審物が発見された。楽しいお喋りは一旦中止しろ」

「「」了解

切り替えが早くて助かる。

ただ幸運なことに、この連絡からすぐ5分後に中身はただの時計であることが報告された。

「誤報か。良かった」

ここで、仕掛けられたかと思った。しかし、安心したのも束の間で、警察の方に次々と不審物の情報が入る。

「こちら警察本部。先程から通信呼び出しが止まらない。しかもほとんどど、不審物だ」

間違いない。敵の仕掛けが動き始めている。

「不審者は見かけられていないのですか？」

「今確認しているところだ。これは応援を近い内に頼むことになるかもしれません。軍の皆、頼むぞ」

不審物情報はほとんど首都北側の地区からだそつだ。深呼吸して頭を落ち着けさせる。

本命はどこだ？ 北に意識を集中させてからの南部からの侵攻か？

それとも、それを読みの裏をかいて北が本命か、どっちだ？

残念ながら分からない。こうなればどちらでも対処出来るように動くだけだ。

「毛利大佐。提案があります」

「分かつていい。南側は任せろ」

「感謝します」

毛利大佐も同じ考えに至っていたようだ。おかげでこちらの部隊を北に回せる。

「ビックハットよりガンドックおよびランス全機。旋回範囲を北側のみに絞る。こちらからガイドラインをレーダーに表示するので、それに合わせる」

「「了解」」

警察からの続報が次々入るが、全て誤報。つまり中身は何でもない紙袋やスチールケースなどが置かれているだけだった。

そしてこの誤報騒ぎが2時間弱続いた後、ようやく落ち着いた。あまりの異常事態に指揮官全員が状況の確認を取り合ひ。

「さて、軍の諸君。君達なれどをどう見る?」

苦虫をつぶしたような顔で警察庁長官が尋ねてくる。

相手の思つたがうが、あれだけ部隊をひっかきまわされれば、イライラしてしまうのは仕方ない。

しかも、防犯カメラからの情報は、見た目が「一転二転している」とから、多数のテロリストが工作している。と考えるのが自然だ。共通しているのは、警察に連絡を入れた人達は誰かが「あれは何だ?」という声を後ろから聞いた。ということだけだそうだ。つまり通報者は基本的にシロ。

そこまで確認をとつてから、徳川大佐が考への説明を始める。

「恐らく、目的は2つ。一つは今の長官が陥っている状況です。ひとまず、落ち着きましょう。次に我々を不審物情報に慣れさせること。また、誤報かと油断されることです」

精神的な揺さぶりか。冷静な対応をとらせない狙いは確かに考えられる。

そして、次に毛利大佐が続いた。

「そして、今パタッと止んだ。徳川大佐の考へから推測するに、恐らく次に何かを仕掛けるかと。私ならそうですね……本物をそろそろ仕掛けます。この後予定されている記者会見に合わせてね」

「場所はどうなる?」

毛利大佐の提言に場所が抜け落ちたことをしつかり気付いて質問をする。

「正直分かりません。今までの誤報は北側からが多かつた。だから本命は南側。もしくはその予測の裏をかいて北側で爆発させて、混

乱を生み出し、首脳を狙いやさくする。と考えるのが普通でしょう。

「分かつていいではないか。それに聞いた限りありうる話だ」

同じ考えに至ったので、毛利大佐の言いたいことが分かる。

だからこそなのだ。ありうると思つてしまふからこそ、怪しい。

「そう。誰でも思いつく偽報の使い方です。そのせいですよ。分からぬのは」

「どうこうとか分かりやすく頼む」

「今回テロリスト達は、1ヶ月以上前から潜伏し、今日も狙いやすい移動中ではなくわざわざ偽報まで使ってきて、こちらの混乱を誘っている。その相手が立てる計略の詰めが、こんな単純な話であるとは思えないのです」

「むう……だが、それではこちらも手が打てないぞ？ 結局の所、現状維持しかないではないか」

毛利大佐の言う通り別の狙いがあるなら、今の北部と南部の分散旋回も死角があるため問題となる。

しかし、今の陣形を更に1小隊ずつに分散させて、奇襲に備えると、普通の手で来られてしまった時に問題が生じる可能性もある。

となると、打開するには相手の目的をもう一度考え直すべきか。

「今悩んでいるのは相手がどのような方法で我々の裏をかいてくるかということですが、テロリストの標的はほぼ間違いなくヤポネ首相でしょうね。となると、どのような方法にせよ国際会議場への接近が必要です。兵器を使っての接近ならば、警察特殊部隊のマップスで対処出来るはずです。ただし、上空を旋回している海軍機と空軍機の旋回範囲を国際会議場上空500mまで狭めます。遠距離からの侵攻を止めるのは遅くなりますが、近距離からの奇襲による被害はかなり抑えられるのではないか？」

しばしの沈黙の後、皆が渋々と了承の言葉を口にする。

「やむを得ない……ということか」

「残念ながら、やるしかありません。部隊に指示を出しましょう」
陣形変更の決定が下されたので、すぐに指示を出す。

「ビックハットより全機へ。旋回範囲が変更になった。レーダーのガイドに従つて移動しろ」

国際会議場を中心に500mの円がレーダーに表示され、味方機のシグナルが円の中に入っていく。

「ホーカイ、分かつていいとは思うが、今の陣形で一番の要は君だ。敵を見逃さないように注意しろ」

「了解」

現在時刻1450。記者会見まで残り10分。

第十四章「パーティの合図」

第十四章「パーティの合図」

時刻1500、国際会議場特設記者会見場。

目が眩みそうなカメラフラッシュの中、ヤポネ首相が白い歯を見せながら手を振っている。

毛利大佐が予測している襲撃タイミングだ。

しかも、人間による襲撃はこちらからは手が出せないので、SAPと対テロ部隊のみが頼りだ。

厳戒体制の中、首相の会見が始まる。

「皆様こんにちは。先程、国境資源会議が終了致しました。今回の会議も非常に有意義でありました。国境線に埋蔵されているFTTE鉱は我が國の物であることを、正式に二国間で合意しました。正式な条約締結は国会の承認を得られ次第行います。二国間の緊張が緩和されることを切に祈ってきた国民の皆様のおかげです」挨拶を済ませ、結果を軽く伝えると詳細を報告するため交代することになった。

「詳しい内容は外務大臣の方から説明があります」

首相が外務大臣と交代しようとしたその刹那、遂にテロリストが行動を始めた。

国際会議場南部900mの地点にある複数のビル屋上から赤い光が生じ、雷鳴のような音が大気を震わせる。

飛散したビルのガレキが、道路や他の建物に突き刺さる音が鳴り響く。

そして、その轟音に発砲音を書き消された銃弾が記者会見場の机や床に風穴を開けていった。

耳をつんざくような叫び声が連鎖して会場は大混乱に陥っている。首相を確認するとSAPによつて、無事守られたようだ。

首相の無事を確認し、送られてくる爆発現場の映像に目を向けると、屋上の屋根が吹き飛んでいた。

何故わざわざ屋上に？

と疑問に思つた瞬間、警察から全軍に緊急通信が入つた。

「こちら東部第17検問所！ 乗用車五台が検問を突破して中央に向けて進行している！」

大体東に5km地点か、爆弾を屋上にしかけたのは、気付かれやすいようにするためか！

「こちら西部第3検問所！ 同じく乗用車七台に突破された！」

こちらも同じく西に5km地点。挟み撃ちにされてしまつてこる。

しかし、兵器を潜ませている中で乗用車はおどりだと考えるのが自然だ。

「長官！ 両首脳と市民の避難はどうなつていますか？」

「市民の避難は始めている！ 両首脳は公用車に無事ついたようだ。そろそろ待避ポイントに向かい始める！」

よし、警察の対応は早い。

「恐らくこの乗用車はおどりです。本命が近く出現すると思われます。予定通り検問所を全て解除して、避難指導を徹底させてください！」

ホークアイに不審車が他にも無いか確認をとつてもらつと。

「こちらホークアイ、不審車のマークを全軍に送信した。南5km地点からも出でてきたぞ！」

レーダーを確認すると10台の乗用車がまるでレースをしているかのような速度で進んでいた。

「発砲された者が出できた！ 警察のマップスを動かすぞ！」

おどりとは分かつてているが仕方ない。市民の命には変えられないのだ。

それに乗用車を止める程度なら、こちらから発砲する必要はない。

「了解しました。伏兵には気をつけろよ」と言ってください！」

「わかつとる！」

警察は会議場から500m離れたマップス2機編成の分隊をそれぞれの方向に送り始めた。

しかし、レーダーを見るとマップスの接近に気付いたテロリスト達は走行ルートを直線から、分散して何度も折り曲がるあみだくじ方式のルートで動き始める。

こちらの数が少なくて、突破される可能性が強まつたため、対抗して中央に配置してあつた三機編成のマップス分隊も、それぞれの方に向に出現した乗用車に向けて動き出した。

その様子を上空から見ているライン1から通信が入る。

「ピックハット。私たちはどうすれば良いの？」

「待機だ。我々は本命に備えるぞ」

「了解……」

少し悔しそうな返事だった。

目の前で戦闘が繰り広げられそうな中、見ていいだけというもどかしさがあるのだろう。

しかし、今は我慢して貰わなければならぬ。

警察と乗用車はそれぞれ4km地点で鬼ごっこを始めた。

市民の避難がまだ終わっていないため、こちらからは発砲がまだ出来ないので。

何とか蹴りや近接武器で止めるしかないので、少し手間取っているらしい。

「ホーカーイより全軍へ！ 南側2km地点から大型重機だ！ 地下から出てきやがったぞ！」

横幅2.5m長さ5m高さ1.9mの重機五台が地下駐車場から出現した。

やはり、乗用車はおとりで、本命がいたか。

しかし、何故大型クレーンといった重機なんだ？

私のその疑問はすぐにとけこととなる。

海軍のマップスが近づくと重機のアームから砲弾が飛び出したのだ。動きを止めるために降下して近づいた海軍機は、相手が重機だと思

つて油断していたのか、粒子シールドの展開が遅れ、砲弾のエネルギー変換が間に合わず、脚部の装甲が少し凹んだ。

もう少し遅ければ脚部のブースト機能に異常が出るダメージを受けたかもしけなかつたが、落ち着いて状況の報告をしてくれた。さすが、毛利大佐の部隊だ。立ち直りが早い。

「重機の装甲がパージされて、中から装甲車や戦車が出てきました。近くに重機がある場合十分に気をつけてください！」

やられた。昨日探し回つても見つからない訳だ。

完全に偽装されていたらしい。

サナの言つていた駆動音の違いの原因が判明した。なるほど、積み荷の偽装だけではなく、戦闘車両を他の外装で隠すという、二つの方法で偽装されていたということか！

となると、建設ラッシュで地上や地下のそこら中に重機があるこの状況、非常にまずい。

どれが本物か偽物か分からぬのだ。

「こちら陸軍の徳川だ。郊外の方にも偽装車両が出現した。現在交戦中。援護に向かうには時間がかかる。緊急事態だ。他の所からも応援を出して貰うぞ！」

「了解。他の基地に援軍を要請します」

しかし、援軍を要請するという田論見は完全に外れてしまう。軍本部に連絡を取ろうとするのとほぼ同時に緊急通信が入る。

「ヤポネ領海付近に所属不明の大型艦船が多数出現！ 各基地はこれに対処せよ」

よりもよつてこのタイミングとは出来すぎている。

やはり艦船消失の事件はテロリスト達が仕組んだ事件だったか。

「こつちは2方面指揮か、状況判断能力が落ちるかもしれません。いざという時は頼むぞ坂本大佐」

海軍である毛利大佐は不審艦船の対処まで始めなくてはならなくなつた。

完全に戦闘状態に突入した中で、大部隊の援護が期待出来ない状況

になってしまった上に、ベテランのアドバイスも期待出来ない。条件がどんどん悪くなっていく。

少しでも改善が無いかと市民の避難状況の確認をとる。

「市民の避難状況はどうなっていますか？」

「まだ済んでおらん！ 予想以上に混乱しておるせいで思ったように避難が進まない！ 公用車は見ての通り北側に進み始めたところだ。警察のマップス5機が護送するから、南の戦闘車両を頼むぞ！」事前のブリーフィング通り真上からの狙撃のみか。仕方ないがやるしかない。「了解しました。ビックハットよりガンダックおよびライン全機。敵戦闘車両を破壊しろ。敵の足は海軍が囮になつて止めてくれている。確実に上空からの狙撃を当てろ！」「了解。ガンダックエンゲージ」「了解。ラインエンゲージ」

スナイパーを上に、その下に残りの機体が浮遊装甲を展開する陣形を組み、高度を3kmまで下げて攻撃を開始する。

「ガンダック5、狙撃を開始する。右の戦車をもうひづれ！」
「ライン1、んじや左いくよ！」

「ライン3、では真ん中はいただきます。皆さん防御は任せます」三機のスナイパーにより丁寧に狙つて放たれた弾丸は見事に直撃を決め、一撃で戦闘車両を行動不能に陥らせた。

海軍機のパイロットが口笛でヒューという音を出し、感心する。

「やるじゃないの空軍さん。残りも決めちゃってよ」

「そのまま敵を足止めしておいてくれたら、もっとサービスし・て・あ・げ・る」

海軍機の要請にノリノリで答えるライン1がそのまま残りの2台を狙撃で撃破する。

「これで、一段落かしら？」

無事に敵を撃破してご満悦なライン1に先輩であるガンダック1が注意を促す。

「油断するなライン1。まだ終わりだと決まつてはいなぞ」

「つてかさ、みんな。今回の敵さんの動きつて大佐が模擬戦の時にやつたのと似てると思わね？」

Ganduck4が現場の空氣から状況を読み取る力をいつの間にか身につけたのか？

この前の訓練が良い教訓になつたらしい。

「どういうことよ？」

「いやさ、模擬戦でやつた大佐の作戦つて、囮を使って相手を動かして、分断するつてのが基本だつたじやん？ 何か今回同じように釣られている気がするんだが、気のせい？」

「あんたの口からそんな言葉が出てくるなんて、さつきの携行食糧腐つてたんじやない？」

Ganduck2が驚いた声でさらつと酷いことを言つている。

そんなに驚くようなことだつたのか……。

しかし、Ganduck4の考えには同意せざるをえない。

恐らくまだ何がある。

「一応俺も傷つく時は傷つくんだぜ？」

昼とは立場が逆になつてゐる。本当に仲が良いのか悪いのか……。

「こちらホークアイ。どうやらそのバカの言ひ通りだ。全方位から10台ずつ出現した重機か外装をページ！ 首脳の避難経路が北東のポイントブラボーに変更されました」

首脳が目的だとしたら、確かに南側に集められてしまつてゐるので、Ganduck4が言つた通りまんまと釣られてしまつたことになる。どうにかこの状況を開拓しなくては！

「市民の避難はまだですか？」

「南側は終わつた！ 東西もほぼ終わつてゐる。北地区商業区で人が多いせいでもう少しかかる！」

予想以上に時間がかかるな。パニックになつて仕方ないとは分かつてゐるが、もどかしい！ いや、焦るな落ち着け。頭をかきながら一旦深呼吸をして氣を落ち着かせる。

「毛利大佐。南側の敵は任せます！」

「了解。北側をしつかり片付けてくれ」

北部以外は市民の避難がほぼ終わっているため、車両も警察の方で対処が出来る。その代わりにこちらは北に集中し首脳を護衛する作戦だ。

「ビックハットより全機！ 北側の敵を叩くぞ！ 公用車に敵を近づけるな！」

「「」了解」

陣形を維持しながら北側の敵車両部隊に近づいていく。

「橋、公用車が待避ポイントに着くまで、後どれくらいかかる？」

「推測時間は八分です」

「全機聞こえたか？ 八分間敵の足を止めるか、八分以内に敵を撃破しろ」

「旧式兵器の戦闘車両なんてちょちょいのちょいよ… 40秒で片付けてやるわ！」

頼もしい返事だ。がんばれ。敵の撃破に関して私は応援することしか出来ない。

「北東地区より重機出現！ 繰り返す、北東地区より重機出現！」

よりもよつて、近くまで来たこのタイミングか！

敵の出現により、橋から公用車の目的地変更が告げられる。

「敵部隊の出現によつて、ポイント変更。北西地区のポイントEに進路を変更しました」

確かにまだ敵が出現していないポイントだが罠の可能性が高い。

しかし、進路変更があるなら、今北にいる装甲車部隊は速やかに排除しなければならなくなつた。

「北東の戦闘車両は警察の部隊に任せと、そのまま田の前の敵を撃破しろ！」

「了解。右3機を落とす。残りは任せる」

「僕は左3機を狙います」

「んじゃ、私は今回も真ん中ね。最後の一機は早い者勝ちでスナイパー3機が狙いをつけ始める。

ただ、今回は下でターゲットを集めてくれる味方機がないので、対空攻撃で反撃されている。

しかし、所詮旧世代兵器の攻撃だ。油断さえしなければ容易く防御出来る。

それに、ガンドックは浮遊装甲による防御が得意だ。落とされる心配はほぼ無い。

「マップスを甘く見ないで。今時戦車で対抗は無理。5早く決めちやつてね」

「3油断するなよ？ 君が落とされても意味が無い。ただ、攻撃は任せてくれ」

浮遊装甲を敵に向けて防御する。普通に回避しても良いのだが、今はスナイパー3機に集中してもうつためにわざと浮遊装甲を当てに行く。

おかげでスナイパー達は一撃必中で狙撃を次々に当てていく。

「5さすが」

「ふむ、こちらの勝ちか」

ガンドック5が最初に3機を撃破し、最後の1機を破壊する。

「あー、負けちゃったか」

「いや、ラインーもガンドック5も、そこ競争するとこじやない！」

…

これで、移動経路上の敵がなくなつた。

「よし、そのまま車両を挟むように部隊を分散する。前方にガンドック小隊、後方にライン小隊で護衛につけ」

「「了解」」

目的ポイントまで残り5分。

敵影は今のところなし。

このまま行けば護衛ミッションは完了だ。

しかし、今回のテロリスト達は実に手強かつた。

「ホークアイより、全軍へ！ ポイントH近辺に大型トレーラー5

台を確認！」

ここに来て援軍だと！？

まさか北東に出現した部隊までおとりだと囁つかのか？

「不審大型トレーラーの後部が開いて……マップスです！ 中からマップスが出てきました！ 数は…… 10！」

しかも、よりもよつて大本命のマップス部隊か。

「ビックハットよりガンドック小隊へ！ 避難完了の知らせがまだ入っていない！ 首脳の公用車を守るためににはやむを得ない。敵部隊を何とか上空に引き摺りあげろ！」

「了解！ ガンドック小隊フォーメーション（クロウ）！ 攻撃は近接格闘のみだ！」

「ガンドック2了解。みんな気をつけてね！」

「ガンドック3了解。誰もやらせない」

「ガンドック4了解。派手にいくぜ！」

「ガンドック5了解。ついていきます」

隊員の応答に対してガンドック1が力強いかけ声を発する。

「行くぞ！」

そのかけ声に応じて、ガンドック全機が背部ブースターの出力をあげて一気に降下を始めた。

「ライン小隊はガンドック小隊が引き摺りあげきれなかつた敵を抑えろ！ 敵マップスを公用車に近づけさせるな！」

「了解！ みんなタイミングは私に合わせて！」

「ライン2了解。突っ込むタイミングは任せるぜ」

「ライン3了解。僕はあまり近距離戦つて得意じゃないんだけどなあ！」

「ライン4了解。ライン3の分まで働いてあげるから安心して」

「ライン5了解。そういうことだ。いつもの恩返しつてやつだな」「んじゃま、ライン小隊の初仕事に撃墜記録を作つて、小隊の名前に泊をつけるわよ？ レッツゴー」

タイミングをずらしながら、ガンドック小隊に続いてライン小隊も降下を始める。

ガンドック全機が最大スピードで降下しながら近接武器で敵マップスに攻撃をしかける。

衝突による激しい金属音が鳴り響き、爆発音が聞こえた。

どうやら初撃は、それぞれの機体が浮遊装甲を肩にマウントし、その面から敵に体当たりをぶつけて、近距離武器で攻撃を繰り出したようだ。

刃が長い粒子ブレードを使っているガンドック1が敵マップスの腕を一本切り落とすことに成功し、残りの隊員も粒子ダガーで装甲を切り裂いて、ダメージを与えることに成功している。

そして、追撃をいれずに即高度を上げるために脚部ブースターを最大まで出力を上げて上昇し、敵からの反撃の回避と空中戦への招待を行った。

招待に応じたのは攻撃を受けなかつた5機で、射撃を行いながらガンドック小隊を追いかけて空中にあがつていった。

公用車を拿捕もしくは破壊するのには損害がある機体に任せても問題ないという判断だろう。

だが、甘い！

「ライン小隊！ 敵はある程度ダメージを既に受けている。何とか空中戦に持ち込んで破壊しろ！」

「「ア解」」

さすがに一度田の奇襲は準備が出来ていたためか、攻撃は全て浮遊装甲で防がれてしまった。デッドコピーだけあって性能はほぼ一緒だ。

ここからはパイロットの技量にかかるている。

ガンドック小隊と同じように即高度を上げて空中戦に持ち込もうとするが、敵はなかなか高度を上げてくれなかった。

あくまで、狙いは公用車つてことが。さて、どうする。

「陸軍より全軍へ！ こっちも敵がマップスをしてきた！ 援軍はやはり出せそうに無い」

陸軍からの援護はやはり期待薄のままだ。

「もう少しで戦闘車両の片がつく。それまで持ちこたえてくれ」
海軍と警察からの援護はもう少しかかる。

「橋田的ポイントまで後何分だ？」

「残り3分です！」

高度を上げずに公用車を狙われている。といふことはだ……。

「ビックハットよりライン3！ 君は近距離戦闘が苦手だな？」

「は、はい！」

「公用車をマップスで直接ポイントまで運べ。その間、ライン小隊は4機で敵の動きを封じろ！」

「無茶言いますねー大佐。数が不利な状況でVIPの護衛付きですか？」

ライン1の言ひとおり、無茶な話だ。だが、これが一番安全に護送出来る方法だ。

「悪いが冗談を言える状況じゃ無いのでな。本気だ」

「了解。ライン小隊、ライン3を全力で守るよ！」

それぞれの小隊が遂に1対1まで分散させられてしまった。
デビュー戦にしては随分と苦労するシチュエーションだ……。

胃が少し痛くなってきた気がする。

第十五章「ミミックボックス」

第十五章「ミミックボックス」

Gandick 小隊が空中戦を開始し、Line 小隊が首脳護送を始めた。

Gandick 小隊の方は射撃が出来ず、動きも常に上にいるよう制限されるため、思つたように敵が攻撃出来ていない。

敵もそれに気付いてわざと距離を離してきている。首脳を守る上で効果的なのだが、やつかいであることに変わりはない。

「Gandick 1 よりビックハットへ。射撃武器の使用許可はまだですか？」

「まだだ。すまないがもう少し持ちこたえてくれ」

「了解。全機落とされないように注意するぞ」

「さすがにもう1時間近く経つんだ。そろそろだろ？」

「こちら Line 1。敵が強行突破を図ってきた！ さすがに防御だけじゃ厳しいわよ？」

やはり、そうなるか。Line 小隊の方もかなり分が悪い。4 対 5 で強行突破を防ぐとなると、かなり面倒だ。

それに、今は射撃が制限されていて牽制すら出来ない。

「橋、待避ポイントまでの時間は？」

「残り一分です」

「Line 小隊、一分で良い。敵を抑えろ」

「了解！ 全機浮遊装甲展開と同時にカウンターの用意！」

Line 小隊は無数の弾丸を浮遊装甲で全て防ぎながら、敵部隊の格闘攻撃に備える。

「やっぱ私に来るよね。もてる女は辛いわ！」

隊長機と判断された Line 1 の機体には片腕が無くなつた機体と損傷が少ない敵 2 機が、残りの隊員に敵が一機ずつ攻撃をしかけるた

めに接近してきた。

「しつかり振つとけよ？ 男の告白を適当にあしらつと後で痛い目見るぜ？」

「言ひじやないの！」

ライン1は左右から来た敵の粒子ソードによる斬撃を浮遊装甲で受け止め左手にダガーを、右手のロングレンジライフルに炸裂火薬仕様のパイルバンカーを装備した。

敵2機が防いでいる装甲をはじきとばし、防御ががら空きになる。鎧迫り合いから蹴りを使って敵マップスを吹き飛ばしたライン2が援護に入ろうと接近するが間に合ひそうにない。

「くそつ、やれるかライン1？！」

「私を誰だと思つてんのよ？」

追撃を入れようと粒子ブレードを振り上げる敵2機に対して、ダガーの投擲と、パイルバンカーを敵の腕部に直撃させる。

ダガーを当てられた敵は腕からのエネルギー供給が途絶え、ブレードの刃が消えた。パイルバンカーを当てた方は装甲内からの爆発で、腕部がちぎれるように吹き飛んだ。

ライン1は、吹き飛ばされた浮遊装甲と飛ばしたダガーを回収して、再度機体の周りに浮遊装甲を展開しながら叫ぶ。

「ライン小隊隊長。武田京子よ！」

「決め台詞を言うならしつかり敵を片付けてからにしろ！」

ダガーを当てられた敵が左手のアサルトライフルを使って、ライン1の機体に射撃を撃ち続けて足止めを行つてゐる。

その間に両腕の無くなつた敵機が頭上を越えて公用車を運んでいるライン3に接近する。

私もしまつた。と思つたその時待望の通信が入つた。

「待たせたな坂本大佐。北地区避難完了だ！」

警察庁長官から規制解除の連絡が入つた。

「全機射撃規制解除！ 発砲を許可するがあまり町を壊すなよ！」

「待つてました！ ライン2前の奴を頼むわ。後ろに行つた奴はこ

つから撃ち落とす。ライン4とライン5は牽制射撃で敵を突破させないで」

「簡単にいってくれるぜまつたく！」

文句を言いながらブレードを構えてライン2が敵に突撃をかける。

「ライン5分かつてると思うけど」

「おうよ、建物を吹っ飛ばすなって言つんだろ？」

丁寧に敵を狙いながら一発一発とレールライフルを発射する。

派手さは無いが、確実に当てるこことによつて敵をひるませることが出来た。

「いただき！」

ライン1のかけ声と共に放たれた弾丸は見事に敵マップスの背後を捕らえた。

ブースターが爆発し、推進力とバランスを失つて、その場に落ちた。ただ、まだ脚のブースターが生きているので、まだ動ける。それを見越して、さらに脚部と腰部に3発の弾丸を撃ち込み、行動を完全に封じた。

「こちらライン3。ポイントに到達。首脳陣は地下の専用リニアに搭乗を始めました」

よし、良くやつた。これで後は敵部隊の撃退のみだ。

「こちら空軍坂本。全軍へ、首脳陣の待避を確認した」

「こちら陸軍徳川。冷や水を浴びせて悪いが、予想通り菱田重工工場および本社に歩兵が入ってきた。ただいま待機していた部隊が応戦中だ」

やはり本命はそこだつたのか。

テロリスト達が首脳の拉致に成功しても失敗しても、油断か混乱で菱田重工に進入できる作戦だと考えられる。

宮野大将の予想通りだつたが、やはり凄い人だ。

対処は待機していた陸軍が何とかしてくれるだらう。おかげでこちらの部隊は、残敵の撃破に集中出来る。

「お、やるじやないのルーキー！ こっちも負けられないっすね隊

長！」

ガンドック4が情報を聞いて素直に褒めたたえた。

「ああ、こちらも仕事を果たすぞ」

射撃規制が外れたおかげで、お得意の連係攻撃を開始する。

「ガンドック1よりガンドック全機へ、フォーメーション（ハント）

」「了解」

敵一機を引き離すために残り4機に攻撃を集中する。弾幕で相手を追い込み防御態勢をとらせてから、ガンドック1による高速機動で陣形の端にいる敵に近接攻撃をしけけ、少しづつ部隊から引きはがしていく。

まさに獵犬による追い込み猟といったところだ。

「全機、まずは一機だ」

隊長の合図と共に一斉にターゲットを部隊から離れた敵機に合わせる。

浮遊装甲を開かれて、集中砲火によるダメージは少なかつたが、完全に動きを止めることができた。

「もうつた！」

そして、その動きの止まった獲物の後ろにガンドック1が回り込み、コアにブレードを突き立てて、そのまま横に滑らせてコアを切断する。

「次いくぞ！」

「了解」

見事な連携攻撃で敵を一機撃破する。墜落していく機体から避難するパイロットが確認出来たので、警察部隊に連絡を入れる。

「こちら空軍坂本、敵パイロットの脱出を確認した。ポイントは中央から11時の方向に20km。殺害せずに逮捕して下さい」

「分かった。こちらのマップスをテロリスト逮捕に回す」

海軍機も北部地区に到達し、一気にこちらが優勢となる。

精銳揃いの20対8だ。負ける確率は非常に低いはず。

「ビックハットよりミヤト全軍へ。そのまま敵を撃破するぞ」

部隊の気合いを再度入れ直す。

ただ、ここで敵部隊は予想外の行動をとつてきた。

「こちらライン1。敵機が後退していくわ」

「こちらガンドック1。同じく敵が撤退を始めた。方角は11時の方向。追撃しますか?」

このタイミングで? 何かまだ隠し球があるとか?

いや、どちらにせよ徳川大佐に連絡を入れなければ。

「徳川大佐。そちらの北拠点に敵が接近しています。注意してください」

「大丈夫だ。敵車両部隊およびマップス部隊はすでに撃破した。そのまま迎え撃つ」

さすが、百戦錬磨の部隊だ。圧倒的な数で敵を制圧しきつたらしい。そうであるなら、追撃は無しだ。

「ビックハットより全機。追撃はせずに、陸軍に任せる。これで敵が全部と決まつた訳ではない。油断するなよ」

「了解」

空軍部隊の首都待機を決定した後に、徳川大佐から軍用回線で連絡が入ってきた。

「菱田重工を襲つた連中だが、報告によると東の石油国家群の連中らしい。テロリストを装つてゐるが、どうやら元正規兵だ。こちらの部隊も重傷を負つた者が出てゐるが、何とか撃退に成功した。偽装したマップスは北部戦線の援軍に戻すぞ」

「了解しました。頼みます」

ただのテロリスト部隊では無いと思っていたが正規兵がかなり混じり込んでいたのか。

道理で統制がとれている。その上、これまでの仕掛けの数々、優秀な指揮官が裏にいるはずだ。

やれやれ、菱田重工が守れたのは宮野大将様々といった所か。

しかし、ほつと出来たのもつかの間だった。

「ホークアイより全軍へ。首都北部80kmの山岳地帯から異常な粒子反応を確認！ なんだこれは？ でかすぎるぞ？ 衛星からの映像を全軍に転送する」

山の斜面から粒子砲の青い輝きが天を貫いた。

その崩れ落ちる土砂と木々の中から何かが姿を現した。

この国では技術者の趣味により設計案が初期で廃棄された計画。

高騰する地価。

多すぎるトラック。

運ばれていた兵器と思わしき物。

東部の石油産出国家群で消えた大型艦船とレトリア連邦での再発見。その全てが一つに繋がった。

FTE粒子の制御技術による大火力の砲台と移動性能を手に入れた新たな軍艦。

割れた山から大型タンカーを元に改造された空飛ぶ船が姿を現したのだ。

その光景に司令室内は騒然としている。思わず私も心の底から素の言葉が漏ってきた。

「マジ？」

4月26日 時刻 1640。

第十六章「一撃に全てをかけて」

「おい、坂本。あれは何の『冗談だ？』

徳川大佐が戸惑いながら通信を入れてきた。

「いやー、リアルですね。映画の撮影でしょうか？」

「ほお、今度息子と見に行こうか。非常に迫力ある映像が見られそうだ」

毛利大佐も私の『冗談』にのつてくれて、3人で高笑いを始める。

「んな訳あるか！毛利、まさか領海に現れたのもこれか？」

「落ち着け徳川大佐。不審船は全てただのガラクタだつたよ」とぎ話の化け物はあの一点だけか。

とりあえず、レーダーを再確認する。

「徳川大佐、あの化け物とマップス8機に挾撃されます。いくらこちらが20機でも危険かもしれません」

敵の能力は未知数だ。警戒しなければならない。

「大丈夫だ。私の部下を甘く見るなよ？」

部隊を南に南下させて、合流をはかる敵部隊のマップスを先に撃破する作戦をとるようだ。その後に、全戦力を集合させて一気に叩くつもりらしい。

万が一に備えてこちらも準備をしておこう。ガレージに通信を入れて松平を司令室に呼び寄せる。

「もつさんそんなに慌ててどうしたの？」

「良いからモニターを見ろ」

「そんな変な物が映つてるの？……何あれ？ 映画の撮影現場？」

「残念だが松平そのリアクションはもう私がやつた！」

「いや、それだったら実に良かつたんだが、どうやら本物だ」

それを聞いて松平の眼光が鋭くなる。

「粒子反応と発生熱量、移動速度と船体サイズ。数字が出せる物は全部見せて。後、船体の拡大写真も何枚かよろしく」

観測データを全て展開してもらい、松平が食い入るよう見つめる。

「もっさん、どうやらちょっとめんどくさそう

一瞬でデータの解析を済ませて評価を下す。やはり機械に関しては変態的に天才だ。

「簡単に説明してくれ」

眼鏡をくいつと直して松平が説明を始める。

「簡単に言うとF-T-E粒子を利用した大型兵器。防御システムはこの粒子反応と密度から考えて粒子シールドが展開出来ると思う。装甲の厚さは分からぬけど、通常のタンカーの船体とは光沢が違う。恐らく浮遊装甲並の堅さの装甲があるはず。マップスは装甲を厚くし過ぎると四肢の動きに支障があつたんだけど、船体だったらどれだけ厚くしても問題無いからね」

何という物を作り上げているんだ。マップスで浮遊装甲を展開されるだけでも苦労するのに、それで船体を覆っているだと？

「撃破方法はあるか？」

「接近戦によるブレード攻撃。浮遊装甲つて普通ははじき飛ばす方が早いからって理由でほとんど切断まですることって無いよね？一応通常出力で10秒以上粒子をぶつけ続けると切れるよ？ 普通しないけど、最大出力なら5秒。大量に弾丸を撃ち込んで傷をつけた後ならもう少し早いかもね」

「その方法だと対空砲火で蜂の巣にされないか？」

「恐らく正解、外觀だけで対空用の機銃を40基80門確認したよ。先端に装備されている主砲と思われる粒子砲も十分危険だし、副砲も2列に8基ずつで24門。正直良くもまあこんなに積んだよ」

洒落にならん……。

元パイロットだから分かるのだが、マップスの機動性がいくら高いといつても全て避けきれる規模じゃない。

雨の日に傘をささずに走つて帰つても濡れない。くらい無理な話だ。

「浮遊装甲を前面展開して、突撃をかけるのも危険と思つがどう思つ?」

「同意だね。いくら何でも何百発と貰えればさすがに壊れる可能性がある。残念ながらとても頑丈っていうだけで、魔法の盾つて訳じゃ無いんだよね」

「射撃武器による撃破は可能か?」

「対マップス用だと、ちょっと厳しいかな。艦橋の装甲は恐らくそのまままだから、そこを狙い撃てれば何とか。後はさすがに砲台もそこまで頑丈じゃなさそだから壊せるかも。粒子シールドの出力次第だから分からぬけど……」

やはり、難しいな。近距離はリスクがでかすぎる。遠距離はリスクが小さいが攻撃が通るか分からぬか……。
「何かを忘れている……あ。

「なあ、松平。ブリューナクならどうだ?」

私の質問を聞いて、とても嬉しそうな顔して二三回口じました。

「行けるよー。でも真正面から撃つとろ獲やテロリストの逮捕は出来なくなっちゃうね

もう一度船体の構造を確認する。

タンカーの長さは350m、高さは75mで船体の大部分を占めている石油をためる槽に恐らく大型ジェネレーターなどの内装を積んでいるのだろう。

「なあ、松平。半分消し炭にしても構造分かるか?」

松平は私の質問に少しの間腕を組んで悩んでから、うんと頷いた。

「多分分かるよ。というか、今考えていること以外で損害を抑えながら確保するのって無理だと思つよ」

「都合良く菱田重工の掃除も終わつたと報告も来ていいことだし、ちょっと倉庫から借りてくぞ?」

「菱田重工技術顧問が許可します。どうぞやつちやつてくださいな」
松平からの許可をとりつけ、 Ganduck 小隊とライン小隊を菱田重工の工場に向かわせた。

ハイブリッドライフル《ブリューナク》は二丁あるのだが、一丁で十分だ。

発射シーケンスの際に護衛が必要となるので、射手をライン1に任命した。

ガンドック小隊の方が浮遊装甲による防御が上手いためだ。更に松平からの提案でライン2に第二世代用の追加大型ブースターを装備してもらい準備が完了した。

両肩と脚部に円柱状のブースターが追加されて見た目のバランスが少し悪いように思える。

「徳川大佐、菱田重工の技術顧問から的情報によると、例の化け物は通常兵器では対処が難しいことが判明しました」

「やはりか。こちらは敵マップスをほとんど撃破したんだが、あの化け物に手こずついてな。数機が半壊状態だ。運が良いことに死傷者は出でていないがな」

敵が元正規兵といえど、マップスの訓練をほとんど受けていなかつたせいか、最大の問題はあっさり片がついてしまった。

おかげでこちらの仕事がかなりやりやすい。

これ以上損害が出る前に終わらせなければ。

「新兵器を使用して撃破します。既に段取りは済んでいるのでいつでも行ける状態です」

「分かった。任せるぞ。こちらは一旦撤退する

「首都の方は警察に任せてくれたまえ」

「長官殿、海軍を忘れないでくださいよ。つてことで頼むぞ空軍諸君」

徳川大佐、警察庁長官、毛利大佐からの許可を貰い、指示を出す。「ビックハットよりガンドック小隊及びライン小隊。敵の大型飛行艦船を撃破するぞ!」

「「了解!」」

高度1kmで前進し、距離が10kmまで近づいた時、マップスの

モニターからその巨体が映し出される。

この巨体が高度800mほどで時速200km／時ほどで飛んでいるのは、やはりにわかに信じがたい光景だ。

その光景に目を奪っていたら、タンカーの側面にある装甲が8力所開き、中からミサイルが合計80発も発射される。

「つづわ、何これ花火大会でも始まつた？」

「気が合つたライン1。私も同じ事を考えていた。全機フレア射出！」

「ちょっと一 Ganduck1、私の部隊まで指示しないでよー」

敵のミサイルに対抗してフレアを射出してミサイルを回避しながら突き進む。

距離が7kmを切り始めると対空砲火が始まつた。

「今度は粒子砲による対空砲火が追加かよ。緑やら赤やら青やらカラフルで素敵だな！ 爆発物のプレゼントまでつけやがつてクリスマスかつてんだ！」

「Ganduck4落ち着いて。そろそろタイミングよ」

Ganduck2が言ったようにそろそろだ。

敵がこちらの集団にかなり気を取られていて、必死に落とそうとしてきている。この状況なら奇襲が出来るはずだ。

「ビックハットよりライン1、ライン2、ショータイムだ。一撃で決めてこい！」

「まさか早速実戦で使えるとはねえ。待つてましたよこの時を！」

「大佐は俺をスピード狂にでもするつもりですか？ 説明を受けたときは意味が分からなかつたですよ」

2機が奇襲のための準備に入り、残りの機体が前面に出て浮遊装甲を展開し攻撃の雨を防いでいる。

ライン1が腰部ハードポイントに装備していたハイブリッドドライブル用の円柱型外部ジェネレーターをレボルバー部分に接続する。AIによる機械音声がこちらにも聞こえ始めた。

ハイブリッドドライブル・ブリューナク発射シーケンス開始します

トリガー、リボルバー、コンデンサー、ガンバレル展開。

外部ジェネレーターの接続を確認しました。エネルギー供給を開始します。

専用弾をマガジンからガンチャンバーに装填。

リボルバー内粒子増加を確認。回転加圧開始します。

高密度粒子の生成を確認。ガンチャンバーに放出開始。

専用弾のコーティングを開発。コーティングパターン『ピアース』

弾丸内高密度粒子装填率 25% 50% 75% 100%

弾丸外殻コーティング完了しました。ブリューナク発射可能。

この間何と30秒。何とか防ぎ切れたようだ。

事前に彼らが部隊を巻き込んで訓練をした甲斐があつた。

「ブリューナクのチャージ完了！ 行けるよー」

「よし、全機作戦通りに動け」

「「了解！」」

一斉にスマートクを発生させ、小隊がいる半径100mほどが煙に包まれる。

そこからライン1を抱えて追加ブースターを最大出力まで上げてライン2が一気に降下する。そして残りの8機で前進し、注意をひきつけている。

ライン2はわずか数秒で時速1000kmまで速度をあげていた。

「うおおお？！ さすがに速すぎるぞこれ？！」

「ちょっとライン2！ 地面とキスだけは勘弁よ！ ちゃんと動いてね？」

「分かつてるよ！ 僕はちゃんと女の子とキスしたい。ってかまだ速度上がってるし！ 8秒後に離すぞ準備しろよ」

「了解！ やつてやるわよ」

100mの低空飛行で音速を超えていたのだが、郊外で本当に良かつた。下に建築物がないので人的被害を気にしなくて良かったのだ。

「後は、任せたぜ。決めてこいライン1」

タンカーの真下に潜り込むようにライン1がライン2より落とされ

た。

「当たれえええ！」

ライン1の叫びと共に放たれた弾丸は、轟音を響かせ青い輝きを放ちながらタンカーの船底に向けて飛翔する。

弾丸の外殻にコーティングされた粒子がらせん状に分散することにより、敵の粒子シールドを攪乱し、貫通力が殺されずに命中し激しい金属音が鳴り響く。

そして、命中の瞬間に弾丸内に圧縮された高密度粒子が解放され巨 大な粒子の槍となつて船に突き刺さる。

直径50m長さ100mの細長い円柱に近い円錐形の青白い槍。 まさしく雷を体現したブリューナクといったところか。

船体の6分の1が消し飛び、制御が出来なくなつたタンカーが墜落していく。

その後墜落したタンカーの艦橋をマップスで占拠し、めでたくテロリスト達の逮捕と半壊しているが機体サンプルがとれた。

「やれやれ、これでさすがに終わりだろ」

一番のでかぶつを撃墜したことと、首謀者が逮捕出来たので、ほぼ収束したと考えて良いだろう？

さすがに疲れたぞ。

4月26日1800 ミヤト動乱に関与したテロリストの制圧
完了

第十七章「おかえり」

第十七章「おかえり」

4月26日20時00分、派遣していた部隊が帰還した。
私もガレージに出向いて隊員達を迎える。

「諸君！」苦労だった。初の実戦だったが、良く皆無事に帰つてきてくれたな」

「いやー、一日中働いたので疲れちゃいましたよ。
ライン1の武田京子が大きな伸びをしながら笑顔で答える。
氣を抜きすぎだが、まあ良いか。

「ガンドック小隊、全員無事帰還しました」

逆に犬塚剣の方は敬礼をしながら帰還報告をする。
真面目で大変よろしい。

それを見て慌てて武田が敬礼をする。

「ライン小隊、全員無事帰還しました」

隊員達がその様子を見て大笑いする。

「次からはそれを最初にするように」

「了解しました……」

顔を真っ赤にしながらうつむいている。可愛いところもあるじゃないか。

とりあえず、一度咳払いをして声の調子を整えて、私がパイロット時代に作戦から帰還したときに富野大将がかけてくれた言葉の真似をする。

「みんな、おかえり」

私の笑顔に皆顔を見合わせて驚いている。

そんな驚かなくても良いのになあ……。

「「ただいま」」

皆が笑顔で返してくれた。なるほど、一人も欠けずに帰つてくると

いつのは良い物だなあ。富野大将もこいつ氣持ちだったのだろうか。

その後、皆で食堂に行き食事を一緒にとることになった。

田口軍曹が涙を流しながら良くやつたと隊員を褒め称えている。そのデレッぶりにライン小隊一同は面食らっているが、ガンドック小隊の方は大笑いしている。

きっと来年か再来年にはライン小隊がこの光景を見て大笑いするんだろうな。

食事を済ませ自室に戻ると富野大将から携帯端末に連絡が入った。プライベート用の通信か珍しい。

「おう、今日ははづまくやつたよつだな」

「おかげさまで。つてところですよ。富野大将の助言が無ければ恐らく痛い目見えてました」

「ほお、随分謙虚だな。浮かれても良いんだぞ？ 初勝利だろ」

「ハハ、ホツとはしてますよ。それに浮かれてたらまたお説教ですよ？」

富野大将は私の応答にクククと笑っていた。

「よく分かつたな。正解だ。次も頼むぞ坂本大佐」

あれ？ ひょっこりじゃなくなつた。少しは認められたのかもしねない。

「任せてください」

「そういうえばだ、レトリア連邦の方で諜報部員が数名逮捕されたらしい。罪状はテロ行為の扇動だそうだ」

なるほど、一連のテロ行為は裏にレトリア連邦がいたのか。
「で、それに対してもちらはどう動くのですか？」

「ようやく会議で合意しかけてるんだ。一応、平和的に事を進めると言つことで、非難声明だけだ」

良かった。こちらから攻めに行くことは無かったか。

「となると、当分は暇出来るってことですかね」

「ハハ、あんまサボりすぎたなよ。仕事を山のようにおしつけるが」「勘弁してくださいよ」

2人で笑い合つて通話終了の挨拶をする。

「では、失礼します」

「おう、またな」

携帯端末をベッドの上に放り、自分も倒れ込むようにベッドに飛び込む。

ああ……そうだ。サナに連絡しなきゃ。

「龍ちゃんおつかれさま」

「サナの方もおつかれさま」

「大変だったみたいだね。身体の方は大丈夫?」

画面を見るにまだ中央司令部のオフィスにいるようだ。
おそらく事件の事後処理で残業中の所だつたんだろう。そんな中で

こちらの心配をしてくれている。

少し申し訳ないので、今日は早めに切り上げた方が良さそうだ。
「胃が痛くなつたこともあつたけど、大丈夫だよ。メチャクチャ疲れただけだね」

サナがぽんと手を打つて納得したような顔をした。

「なるほど、それでベッドで横になつてたんだ。んじゃ今日はこの辺にしどこうか」

「ありがと。そういうば、今度、有給とつてこいつちに来ないか?
ちょっととした賭けに勝つて、食事を2人分おじつて貰えることになつた」

「へー、何があつたの?」

徳川大佐と毛利大佐から挑まれた賭けの内容を説明すると、まるで学校の先生のような口振りで褒められた。

口調は演技がかつていて嬉しそうに二コ二コしている。

「よく頑張りました。時間が決まつたら教えてね。絶対遊びに行くからさ」

「それじゃ、おやすみ。あまり無理するなよ

「心配しないで大丈夫だよ。後少しであがるからさ。おやすみなさい。ゆっくり休んでね」

電話が切れると意識があつと言ひ間に無くなつて、次の日は危うく寝坊をするところだつた。

最後の最後に締まらないなあ……と苦笑いしながら執務室へと向かう。

以上の出来事が私のハガネの指揮官として最初の作戦となつた日の出来事だ。

携帯端末に映し出されるニューストピックはテロ行為があつた割には、明るい論調で書かれていた。

機械の英雄達という見出しで、キーナ基地の部隊が映つている。後で、みんなのネタになるな。

「さてと、今日も平和だと良いなあ」「太陽に向かつて大きく伸びをした。

第一章「事後処理」

第一章「事後処理」

「終わったぞおおお！」

5月3日日曜の午後16時、執務室の机を両拳で殴り叩き、天井をあおいで腹の底から叫んだ。

山のようにたまつた報告書を遂に書き上げて、机の上に突っ伏す。「富野大将め……ホントに仕事を山のように押ししつけてきたよ……一週間前に起きたヤポネ首都ミヤトにおけるテロの報告書だけでなく、他にも色々と書かされた。

今回の市街戦における戦術レポート以外にも、これから対応策など、一部上の人物がやる物と思われる仕事まである。

おかげで、私の「ゴールデンウイークは明日から他の人とは一週間ずれてしまった。

「疲れた……眠い……」

気が抜けたせいか、昔のサボリ癖がよみがえってきた。

そのまま上半身を机に預けようとするが、寝てしまつてはダメだと頭を横にぶんぶんと振つて目を覚ます。

「コーヒー飲みに行こう」

軽い運動とカフェインで眠気を解消する作戦に出で、リフレッシュルームに向かつた。リフレッシュルームにつくと休日で人が少ない中、田口軍曹が何かの資料を見ていた。集中しているためか、こちらには気づいていない。

「コーヒーに砂糖とミルクを入れてから、一口分を飲み込み、頭を上官モードに切り替える。

「田口軍曹、何を見ているんだ？」

「あ、これは大佐殿。来週から入つてくるパイロット候補生達の資料を読んでいたのです」

報告書で忙殺されていて、忘れていたが、候補生が来るのは「ゴールデンウイーク」が終わる来週からだつた。

「そうか。もうそんな時期か。今年もよろしく頼むぞ教官殿」

「ハツ！ ご期待に応えられるよう努力します」

以前候補生達の特性を一人一人説明してくれたが、裏ではこのように資料とにらめっこをしていたのか。

上官なのにサボりかけた自分が少し恥ずかしくなる。

これ以上邪魔をしてはならないと思い、コーヒーを飲み干し、その場を後にした。

自分も新人の資料をしつかり確認しておかねばならない。

残念なことに仕事がまた増えてしまったが、文句を言つても仕方ない。

眠気を完全に払うために、執務室に走つて戻つた。

氣合を入れて走つたのは良かつたのだが。

「あれ？ 思つた以上にきついな」

久しぶりの全力疾走に身体がついていけず、息がすぐに苦しくなる。

「最近書類仕事ばかりだつたからな……」

ちょっととした身体の衰えに衝撃を受けるが、そんなことよりも頭を切り替えて仕事に戻る。

今夜は徳川・毛利両大佐から賭けの賞金が手に入る予定なのだ。残業で行けなくなつてしまつては、格好がつかない。

それにわざわざミヤトからサナも呼んである。

遅れたら格好がつかないで済む問題ではなくなつてしまつ。気合いを入れ直してパソコンに向かい、資料の確認をする。受け入れ人数80人。何と去年の1・5倍だ。

「パイロットが増えるとはいへ、いくつまで増えたら頭打ちになるのやら」

思わず苦笑いをしてしまつた。

資料を斜め読みで一通り見終えたところでファイルを閉じ、
時になるまで、初日の挨拶を適当に考えながら時間を潰した。

5月3日17時。私の短いゴールデンウイークが始まる。

第一章「賭けの結果」

第二章「賭けの結果」

仕事を終わらせて、制服から着替える。

今日は先日一緒に戦つた徳川大佐と毛利大佐が相手なので、念のため落ち着いた格好の衣装で行くことにしたのだ。

黒のストライプの入った白いYシャツとスラックスをはいて鏡の前に立つてみる。

「何だか変に緊張してきたな」

同じ階級とは言え相手は大先輩である。

前後不覚で失礼なことがあつては大変だ。

念のため多めにアルコール分解薬を持つて行こう。

更に事前に酔いにくくする飲料も服用して、車でキーナ市街地に向かつた。

まずは、地下リニアのあるキーナ駅にサナを迎えていく。それから待ち合わせの店だ。

車を停めて、改札口で待っていると、薄手の黒い上着を羽織つて、肩の出ている白い花柄があしらわれたワンピースを着たサナがやつてきた。

制服以外の服装を見るのが久しぶりというのもあって、少しどきっとしてしまう。

ちょっと幼い感じがかわいい。

「お待たせ。ん？ 何驚いてるの？」

相変わらずよく人の顔を見ていると感心してしながらも、理由を口にするのが少し恥ずかしくて頬をかいてしまう。

私の癖をよく知っている彼女はこの反応を見て、嬉しそうに笑いながら私の頭を撫でてきた。

残念ながら余計恥ずかしい思いをしてしまうことになった。

「そういえば、なんか格好が硬いけど、どしたの？」

「一応同じ階級とはいえ大ベテラン相手だから念のため。ねなるほど。と手をうつて納得してもらえた。

「変かな？」

「つうん、制服とはちょっと違つ真面目さがあつてかつこいいよ」首をちょっとと傾けて上目使いで見上げながら言われたので、思わず一瞬頭がフリーズしかけた。

当初持っていた緊張とは別のドキドキが襲つてくる。

「ところで、今日はどこに行くの？」

実はびっくりさせようと思つて、まだ行き先を教えていなかつたのだ。

さすがにこいつたことは超能力者ではなので、サナでも予測できない。

「着いてからのお楽しみでいかがでしょうか？　お嬢様」
サナの質問で我に返り、緊張を紛らわすために、遊びの意図も込めてちょっとと執事っぽく答えてみた。

氣取つた口調で答えた私の言葉を聞いて、二ヶコリと微笑まれる。

「お願いしますね。私の執事様」

おそらく、私の意図は見抜かれているだろつけど、ちゃんと驚くかな？

ちょっととワクワクする。

車で両大佐と待ち合わせている場所につくと、何と2人とも既に待つていた。

いきなり謝罪からは、失敗した。

「こんばんは。すみませんお待たせしてしまって」

「お、来たか坂本君。時間前だから気にしてはいないが。何だヤケに堅苦しい格好だな」

徳川大佐と毛利大佐はポロシャツに半ズボンだ。しかも、観光客

向けのおみやげ用の物を着ている。

確かにキーナ市は5月で十分暖く、観光客としてならその格好は間違つてはいないのだが、面食らつてしまつた。

「ほほう、坂本君は私服姿も真面目なのか、若い内は遊びを覚えたまえ」

いきなりダメ出しの連続で少し困つてしまつ。

「いやー、聞いた場所が聞いた場所だったので。ついついかっこつけようとしてしまつて」

あなた達が相手だからですとは言えず、頭をかきながら嘘の言い訳をしてしまつた。

これ以上のダメ出しをもらわないように話題を変えてしまおう。

「紹介します。今日」一緒にさせていただく、澄川早苗です」

私の紹介で、サナがぺこりと頭を下げて挨拶をする。

「はじめまして。澄川早苗です。坂本君がお世話になつたみたいで、今日はよろしくお願ひします」

「おお、なかなか出来たお嬢さんではないか。坂本君のこれから」

徳川大佐が決め顔で小指を立てている。

まあ、誰でも分かりますよね。

「はい。その通りです」

「やはりか。予想通りだつたな徳川よ」

2人が笑い合つていた。どうやら今回は賭けではなかつたようだが誰をつれてくるか予想しあつたらしい。

「私達も1人では無く家族連れなのでな。後で紹介させて貰うでしょう。既に中で待つておるよ」

困つた。緊張の種が増えた……。隣にサナがいてくれて本当に良かった。

お店はキーナ市の浜辺から伸びた木造の橋の先にある「テージレストランだ。

1団体につき1「テージがあてがわれ、注文が入るとオープンに

なっているウッドデッキに小型の運搬用ボートが料理を自動で運んでくる。

ちょっととしたレジャー感もあり家族連れからカップルまで大人気で、サナもびっくりしてくれた。

「雑誌で見てから、いつか行きたいと思つてたんだよね！ やつた弾んだ声で両大佐にお礼を伝えると、2人とも笑顔でどういたしまして。と返した。

予約してある部屋に入ると既にご家族の方達が待つていた。
その中のただ1人を除いてきっと両大佐の家族だろう。

その1人は見覚えがある眼鏡をかけた瘦せ気味の初老の紳士。

「えー……つと。富野さん？」

「おう！ よく来たな坂本！ 富野さんはまた久しい響きだ。今日はそれでいけ。お、澄川も一緒か」

この声、この砕けた感じ。間違いなく本人だ。

「何でいるんですか？！」

「驚かそうと思つて」

ちろつと舌を出しながら、全く恥びれずに理由を告げられる。
お酒が入つてないのに頭が痛くなりそうだ。

「伏兵や奇襲に対する心構えが足りないようだな坂本」

どや顔でそんなことを言われても困る。

サナの方にアイコンタクトをとり、知つてた？ と合図を飛ばす
と首を横に振られた。

「まあまあまあ、富野さん。今日は一応彼が主賓なので、からかう
のはこの辺にしておきましょう」

徳川大佐が助け船を出してくれた。

皆が席につき改めて自己紹介をする。

徳川大佐は男女1人ずつの4人家族、毛利大佐は女の子2人に男の子1人の5人家族だ。

子ども達の年は15から19くらい。

30歳以降に出来た子ども達らしい。

「ゴールデンウイークに家族旅行といったところだろう。

運ばれてきた飲み物が各自のテーブルに置かれて、みんなで乾杯をする。

最初のビールを飲み終えた時に、ふとあることに気が付いた。

「あの、今まで私は仕事してたんですけど、お一方はいつからゴールデンウイークでした？」

聞くと2人とも普通の日からだった。

どうやら報告書だけで、特に休みをずらしてまで忙しくなかったとか。

「富野さん私の休みが遅れた原因って、間違いなくあなたのせいですか？」

「フフフ、正解だ坂本。何、経験不足な君には早く一人前になつてもらいたいからな。わざと仕事を押し付けた」

やつぱり予想通りだった。少し頭に来たのでわざと棘のある言いで文句を言うことにした。

「で、自分はのんびり休養に來たと？」

「さて、それはどうかな？ 他の目的も十分あるかもしけんぞ？」

仕事で重要人物に会いに來たとか

ニヤニヤしながらシラをきつてきた。

隣のサナはその様子を見てふふっと軽く笑っている。

「富野さんも坂本君と同じで照れ屋さんですね」

さすがサナだ。私では分からなかつた何かにしつかり氣づいたらしい。

が一体なんなんだ？

「コラ、澄川それ以上は言つなよ？ 上官命令だ」

人差し指を立てて、大げさな動きで口の前に持つてきている。

「報告で坂本大佐のことを詳しく教えると根ほり葉ほり聞かれたよ。賭けのことも含めてな。そうしたら、我が輩も是非参加させてもら

おうと言い出したのだ。富野さんも今日まで仕事だったぞ。おかげで君達とスケジュールを合わせるのが難しかったよ」

毛利大佐が富野大将の制止のそばからネタバレをする。

富野大将は眉間にシワを寄せながら毛利大佐を一睨みするが、「富野さん、海軍は指揮系統が別なのであしからず」

肩をすくめながら、あっさりと回避してしまった。

それを聞いて富野大将は笑い出し拍手をしながら、やるじやないかと毛利大佐を称える。

そして、手元にあつた3杯目のビールをかなりのペースで飲み干した。

みるみるうちに顔が赤くなつていいく。

「愛弟子の初勝利だからな。祝わない訳にはいかぬだろう」

隠す必要がなくなつたためか、酔っ払い始めたためか、直球で理由を投げつけてきた。

やれやれ、この人は難しい人だなあ。

とにもかくにも弟子として礼は返そつ。

「ありがとうございます。ビールおつぎしますよ」

「澄川や他の女性の方が良いが仕方ない。ほれ」

文句を言いながらもグラスをこつちに差し出して來た。

「良い師匠ではないか。なあ坂本君」

「この人が師匠だと苦労が多いですよ？ 德川さんも一緒に弟子入りをしてみませんか？」

「ハハ、私は遠慮しておくよ。後進も育てなければならぬ立場なのでね」

残念ながら振られてしまった。

お酒も入り、美味しい料理を楽しんでいると毛利大佐が私の提案を逆にした冗談を言い始める。

「そうだ坂本君、私の弟子にならないか？ 君なら大歓迎だ」

「おい、毛利。お前はいつから狐から猫に変わったんだ？ 坂本はお前にはやらん！」

「フフ、富野さん。これは泥棒ではなくハンティングですよ。隙あらばといつやつです」

「おー、良いアイデアだ。だったら私もその狩りに名乗りをあげるぞ」

「貴様等にあいつの師匠はつとまらんよ。あいつは私の弟子だからな？ 油断すると痛い目見るぞ」

3人ともノリノリで本人の意志とは無関係に話を進めていく。

能力を高く買ってくれるのは嬉しいが、年配の男性が1人の男性を取り合つというのがシユールな光景だと思って苦笑いしてしまう。男達がこんなやりとりをしてる一方で、女性陣も子ども達も既に互いに面識があるらしく、勝手知つた様子でおしゃべりをしながら、笑い声をあげている。

サナの方も夫人達と仲良くなつたようで色々話しているのが聞こえる。

その話題の中に旦那を尻の下にしく方法とかが聞こえて来て、少し寒気がしたのは内緒だ。

ただでさえ勝ち目が無いのに、そんな技まで身につけられたらどうしようもなくなる気がする。

普段部下達の上に立つてている3人のおじさま達の家庭内地位が何となく想像出来て、思わず顔が引きつった。

「坂本さん。早苗さんを泣かせることがあつてはなりませんよ？」下らない想像をしていたので、突然の徳川夫人からの忠告に驚く

が、そんなことをする訳がない。

「そんなことはしないですよ」

自信満々に胸を張つて宣言をする。

「坂本さんがダメなら、いつでも家に来なさい。あなたなら大歓迎です」

無いと言つたそばから酷いことを言わないでください。

こんな感じで徳川夫人はちょっと氣が強そうな方だ。徳川大佐は頭あがるのだろうか？

「あらあら、カシコマも良いところだからいつでも遊びに来てね」毛利夫人は対照的にゆるめではあるが、毛利大佐を上手く丸め込んで動かしていそうな雰囲気がする。

両夫人に随分と好かれているようで、サナの方も遊びに行くと約束をしている。

そんな楽しそうな様子を見てホッとするのも束の間。

おじさまる人からお酒を次々注がれた私は分解薬を飲む暇もなく、氣絶した。

氣絶する直前、遠のく意識の中で、サナに薬のことを伝える。

「サナ……鞄の中に……薬が……」

「へ？ 龍ちゃん？ わつ！？ ちょっと大丈……？！」

最後に認識出来たのは慌てたサナの声と驚いた顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4762z/>

鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

2011年12月29日21時53分発行